

不良と皇帝陛下

アイリエッタ・ゼロス

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

闇に魅入られし者は、何のために力を振るうのか……

目次

プロローグ	1
異世界転移	6
対立と謎の声	12
邂逅	17
本音と勝負	24
受け継ぐ力と共同戦線	29
再会	34
キャラ設定	49
シヨ一の始まり	54
シヨ一の終わり	62
ブルックと新たなメダル	71
規格外と昇格	81

新装備とライセン探索	86
情報入手と衝撃発言	95
迷宮発見	101
ライセン大迷宮	108
巨大ゴーレムとベリアル	115
陛下の実力（本気では無い）	121
ミレディ・ライセン	125
幕間 奈落	131
幕間 弟子入り	137
帰還	144
次なる迷宮へ	149
氷雪洞窟へ	153
氷の迷宮	162

俺とオレ	167
幕間 覚悟と別れ	172
幕間 ブルック	180
幕間 一時の休息とフューレンへ	188
迷子と再会	193
合流	200
フリートホーフ壊滅	209
母と娘としぼしの別れ	215
現在のステータスと所有メダル	224
成就	228
初デート	236
プレゼント／好きだからこそ	247

守るべきもの／氷の魔物	255
氷結のグロツケン・炎上のデスローグ／ウルへ	264
ベリアル面の面影	273
雫の耳かき	283
フューレンでのショッピング	292
ウルでの再会	301
雫の意思	310
黒龍殲滅……？	314

プロローグ

週始めの月曜日、それは一週間の中で最も憂鬱な日。だが、俺にとっては一切関係のないことだった。

……何故なら、俺は学校の屋上でイヤホンで音楽を聴きながら寝ていたからだ。すると、

突然俺は影に覆われた。影の方を見ると、一人のポニテ女が俺を見下ろしていた。

「……またサボってるの、帝君」

「八重樫か……授業は終わったか？」

「ええ。今はもう昼休みよ」

「そうか……」

そう言われて、俺はイヤホンを外して起き上がった。

「相変わらず、成績は良いくせに授業はサボって……」

「別に、授業を受けようが受けまいが俺の勝手だろ」

「…… はあ。内申点消えても知らないわよ」

「ノート提出してるから心配いらねえ。後で南雲かお前に借りるしな。それに、テストの点稼いでるから留年になる事はねえよ」

「…… ホント、タチが悪いわね。先生の苦勞が眼に浮かぶわ」

八重樫は呆れたようにそう言ってきた。

「うるせえ…… てか、いつも思ってたが、毎日毎日ここに来てお前も飽きないな」

「別に…… 私がここに来るのも勝手じゃないかしら？ 貴方が授業を受けないのと一

緒よ」

「…… 確かに。そいつは違いねえな」

俺は八重樫の言葉に素直に同意した。

「はああ…… 今日の昼って何の授業あった？」

「英語物理、後は現代社会」

「そうか…… 今日の昼は大人しく授業を受けるか」

「あら…… 珍しい事もあるわね」

「たまに受けとかねえとあのちびっ子担任がうるさいから……」

「…… それ、愛子先生の前で言わないでよ。愛子先生泣くから」

「それは俺の気分次第だ」

そう言つて、俺は屋上の扉を開けた。

「おい、とつとと行くぞ」

「はいはい……」

~~~~~

### 教室

「南雲、午前中のノート貸してくれ。昼休みが終わるまでには返す」

「帝君。いいよ、はい」

「悪いな。ああ、あとこれ」

教室に戻つて来て、ちびっ子担任からの小言を言われた俺は数少ない友人である

南雲 ハジメにノートを借りていた。そして、俺はノートを借りるとカバンの中から

一冊の小説を取り出して南雲に渡した。

「も、もう読んだんだ…… それで、どうだった？」

「なかなか良かった。今度続きを貸してくれ」

「つ！ う、うん！ わかったよ！」

それを聞き、俺は南雲の隣の席に座り、片手にカロリーメイトを持ちながら

南雲から借りたノートを写し始めた。すると、再び八重樫が俺に近づいてきた。

「ねえ、お昼それだけ？」

「ああ。今日はあまり腹が減ってないからな」

「……だからって、それだけっていうのはやめておいた方が良いわよ。栄養偏るし」

「…… お気遣いどうも」

そう言つて、俺は軽く流したのだが、今日は機嫌が悪かったのか持っていた

カロリーメイトを奪われた。

「おまつ、何すん……!?!」

俺は続きを言おうとしたのだが、突然口の中に何かを入れられた。口の中に入れられた

何かは甘い味がしており、噛んでみると、それは卵焼きだった。

「どう、味は?」

「…… まあ、悪くはねえ」

「そ。なら、これから毎日作つてあげましょうか?」

そう言つた瞬間、教室にいた生徒どもはザワつきだし、男どもは俺を睨みつけていた。俺は

それを逆に睨みつけて男どもを黙らせた。そして……

「…… それは遠慮しておく。色々と面倒な事になるのが目に見える」

俺はそう言ふと八重樫からカロリーメイトを取り返しノートを書いていた。そうし

ていると、

突然教室の床に謎の魔法陣の様なものが見れた。その魔法陣は広がっていき、俺の足元にまで

届いてきた。そして、次の瞬間、真っ白な光に教室内は包まれた。

~~~~~

? side

『(この気配……)』

俺はとある気配を感じていた。

『(いる、間違いなくいる！ この俺の力に耐えられそうな人間の気配が！)』

その気配は、俺が今いる城から感じていた。

『(どいつだ。この俺の闇に耐えうる可能性を持つ人間は……)』

俺は気配を辿った。そして行き着いた先にいた人間は目つきの悪い男だった。その男からは、

周りにいる人間とは比べ物にならない程、心の中に闇を感じた。

『(コイツか……これ程の闇なら、利用価値は十分にある)』

そう思った俺は、すぐさま行動に移した。

異世界転移

「……何処だよこっ」

気づくと、俺は何かの神殿の様な場所にいた。そして、周りには教室にいた他の生徒どもと

ちびっ子担任がいた。

「……ねえ」

すると、急に服の袖を引っ張られた。振り向くと、八重樫が不安そうな表情で俺を見ていた。

「……これ、一体どういうことなの？」

「俺が知るわけねえだろ……だが、あのスカしたジジイは何か知ってそうだ」

そう言った俺の視線の先には、鈴を付けた杖を持った、無駄に派手な衣装の年寄りがあった。

「ようこそトータスへ、勇者様、ご同胞の皆様。私は聖教教会にて教皇の地位に就いております

イシユタル・ランゴバルトと申すもの。以後宜しくお願い致します」

くくく

イシユタルとか名乗ったジジイに連れられて、俺達は大広間にいた。大広間には十メートルを

超えるテーブルが幾つも並んでいた。俺は後ろの方に座り、周りの様子を伺っていた。

「(どいつもこいつもメイドに見とれて呑気なもんだ……この状況を理解できないのか……)」はあ

俺は周りにいるメイドに見とれているバカどもを見てそう思った。女子も鼻の下を伸ばしているバカどもを冷め切った視線で見ている。そうしている間にも、ジジイはこの世界に

ついでの話 시작했다。簡単に纏めてみると……

・この世界はトータスと呼ばれており、人間、魔人、巫人の三つの種族が存在している

・人間と魔人どもは何百年も戦争をしている

・少し前までは戦力は五分五分だったのだが、魔人どもが魔物を大量に使役するようになった

・その為、このままでは人間が滅びると思い、この世界を創ったエヒトとかいう神は、

人間を

救うために俺達をこの世界に召喚した

「(くだらねえ……マジでくだらねえ……)」

聞いていた俺は心底そう思った。そう思っていると、誰かがテーブルを叩いた。

「ふざけないで下さい！ 結局、この子達に戦争させようってことでしょ！ そんなの

許しません！ ええ、先生は絶対に許しませんよ！ 私達を早く帰して下さい！

きつと、

ご家族も心配しているはずですよ！ あなた達のこととはただの誘拐ですよ！」

テーブルを叩いたのはちびっ子担任だった。そして、ちびっ子担任はジジイに向かっ

て

そう言っていた。だが、どうにも威厳とかが足りないため、ほんわかした様な空気が

流れていた。だが、ジジイの次の言葉に空気は凍りついた。

「お気持ちはお察しします。ですが……あなた方の帰還は現状では不可能です」

「ど、どういう事ですか!?!」

「先ほど言ったように、あなた方を召喚したのはエヒト様です。我々人間に異世界に

干渉するような魔法は使えませんので……あなた方が帰還できるかどうかはエヒト

様の

御意思次第ということですよ」

それを聞き、生徒達はパニックを起こしていた。すると、再び誰かがテーブルを叩いた。

音の方を見ると、テーブルを叩いたのは俺が一番嫌いな人間の天之河だった。

「皆、ここにイシユタルさんに文句を言っても意味がない。彼にだってどうしようもないんだ……」

俺は、俺は戦おうと思う。この世界の人達が滅亡の危機にあるのは事実なんだ。それを知って

放っておくなんて俺にはできない。それに、人間を救うために召喚されたのなら救済さえ

終われば帰してくれるかもしれない……イシユタルさん？ どうですか？」

「そうですね。エヒト様も救世主の願いを無下にはしませんまい」

「俺達には大きな力があるんですよ？ ここに来てから妙に力が漲っている感じがします」

「ええ、そうですね。ざっと、この世界の者と比べると数倍から数十倍の力を持っていると考えて

いいでしょうな」

「うん、なら大丈夫。俺は戦う。人々を救い、皆が家に帰れるように。俺が世界も皆も救ってみせる！」

その言葉をキツカケに、生徒どもは希望を見つけた様な表情に変わった。だが、俺を含めた

四人は全く違う表情をしていた。

一人目はちびつ子担任。このままだと俺達が戦争に参加してしまうので、それを止めようとする。

必死な表情をしていた。

二人目は南雲。流石はこの様な状況になるラノベを読んでいるからか、他の生徒よりは少し

落ち着いた様子でジジイの様子を伺っていた。

そして、最後は八重樫。八重樫はどこか呆れた様な様子で天之河を見ていた。

「この三人だけか……このまま行くと、人殺しになる未来が見えているのは」

そう考えているうちに、アホに賛成していく人間は増えていった。俺はそれを見ているうちに、

どんどんと苛立ちが溜まっていった。そして……

「皆！俺達が力を合わせればこの世界の人達を助けられる筈だ！だから俺に

ついて来てくれ！」

その言葉を聞いた瞬間、俺の苛立ちは限界を超えた。すると、突然目の前にあつたカツプが

音を立てて割れた。その音に気づいた連中は俺の方を見てきた。それが都合が良いと思つた俺は

アホに賛同した連中にこう言つた。

「……今、そのアホの意見に賛同したお前ら、馬鹿ばかりか？」

対立と謎の声

「月無……それはどういう意味だ！」

俺の言葉に、案の定アホは突っかかってくる。それを聞き、俺はアホに近づきながらこう言った。

「そのままの意味に決まってるだろ。テメエ等、戦争に参加するって事は人殺しをするってわかって言ってるのか」

「「っ!」」

そう言った瞬間、アホに賛成したバカどもは驚愕の表情を浮かべた。

「っ、月無! 皆を怖がらせる様なことを言うな!」

「何が怖がらせるだ。俺はただ事実を言っただけだ……。そもそも、何でこの世界を救う必要がある。戦争を始めたのはこの世界の人間達だ。この世界と関係の無い俺達が

命を賭けてまで救う必要は無いだろうが」

「そんな事はない! 俺達はこの世界の神に選ばれたんだ! それに俺達には力がある!

その力はこの世界の人達を救う為に使うべきだろ！」

「力を貰って特別と思ってるのか……笑わせんなよ偽善者」

そう言つてアホを睨みつけると、アホの顔色は一気に青白くなった。

「お、おい月無……！」

「テメエは黙つてろ脳筋。アホに賛同するしか脳がない奴に用は無い」

俺は肩を掴もうとしてきた脳筋の手を弾いてアホの胸ぐらを掴んだ。

「ぐっ……!？」

「そもそも、力なんて使いこなせるのか？ ただのガキだった人間が、急に手に入れた力を

本当に使えるのかよ」

「っ、当たり前だ！ 皆がいればそんなものは簡単に乗り越えられる！」

「そんなもの、か……力に飲まれる奴が言いそうなセリフだ」

「何だと……！」

「力つてのは使い様なんだよ。使い手がど素人なら周りの人間を傷つける」

「そうなつたら、俺が止める！ それよりも、そんな事が起きない様に俺が皆を守る！」

「…… テメエ」

その言葉を聞いた瞬間、俺はアホの顔面を殴った。アホは飛んでいき、テーブルに激

突した。

「がはっ……！」

「先に言っておいてやる…… お前が誰かを守る事なんてできない。自分の周りにいる人間一人、

守る事ができない奴にはな」

そう言つて、俺は後ろに座っている八重樫を見た。俺の視線に気づいたのか、八重樫は

目を閉じた。すると、さつきまでこの様子を見ていたジジイがこう言つてきた。

「まあまあ。急な展開で気が立っているのも理解できます。一先ずお開きにして、ゆっくりと

休まれては如何でしょうか？」

「…… チツ」

俺は舌打ちをしてさつきまでいた席に戻ろうとした。すると、突然頭の中に謎の声が聞こえてきた。

『フフフ…… 良い闇を持っているな、人間』

「っ!？」

俺は突然の声に周りを見た。だが、声を発している様な人間は見え、他の人間にも

この声は

聞こえていなそうだった。

『俺の声はお前にしか聞こえていない。周りを見たところで俺の姿は見えんぞ』

「(……お前は誰だ?)」

『俺か? 俺の名前はベリアル。闇の皇帝だ』

「(闇の皇帝だと……?)」

『ああ。俺はお前にある提案がしたい。お前はこれから王宮に向かうだろう。王宮に着いたら

俺の言葉に従ってある場所に来い』

「(……俺に何かメリットはあるのか)」

『勿論だ。お前次第で、元の世界に帰れるかもなあ』

「(っ!?)」

その言葉を聞いた瞬間、俺は一瞬思考が停止した。

『どうする? 俺の言葉を信じてみるか?』

「(……わかった)」

『そうか。ならば王宮に着き次第、一人である場所に来てもらうぞ』

そう言うと、男の声は聞こえなくなった。すると……

「帝君」

俺はいつのまにか目の前にいた八重樫に声をかけられた。

「っ！ …… 八重樫か」

「今から王宮に向かうそうよ。だから後について来てだつて」

「（あの男の言った通りか…）ああ、分かった」

そう言つて、俺は八重樫の後をついていった。

邂逅

「彼の者へと至る道、信仰と共に開かれん……」
「天道」

ジジイに連れられた場所に着きジジイがそう言うのと、俺達が立っている台座が動き始めた。台座は下に見える王城に向かっていた。その様子をバカどもは楽しそうに騒いでいた。バカどもがそうしている間に、俺は少し離れた所でバカどもを

見ている八重樫の隣に立った。

「……この状況、あまり良い状況とは言えないわよね」

隣に立つと、八重樫がそう言ってきた。

「ああ」

「……」

「不安か？」

「……当たり前でしょ。戦うなんて、やらなくて良いならやりたくないわよ」

俺の言葉に、八重樫は弱々しい声でそう言った。

「そいつはその通りだ」

「……帝君は、普段と変わらないわね。怖くないの？」

「ああ。人間なんて、死ぬ時はすぐに死ぬ。だから、いつ最後が来ても良い様に少しでも未練を

残さずに生きる。それが俺の生き様だ」

「……強いわね、帝君は」

八重樫は俺のことをスゴイ人間を見るような目でそう言ってきた。

「そういう生き方しかできねえだけだ。別に強いわけじゃない」

「そう……何か私に出来る事あつたら言つて。出来るだけ力を貸すわ」

「……だったら、一つ頼みを聞いてくれ」

そう言つて、俺は八重樫の耳元で小さな声でこう言つた。

「王宮に着き次第、俺は単独行動を取る。その間、南雲の事を気にかけてやってくれないか？」

「単独行動つて……それ、本気で言つてるの？」

「ああ。本気で言つてる」

八重樫はしばらく考え込むと、確かめる様にこう聞いてきた。

「……本気、なのね？」

「ああ」

「…… はあ、分かったわ。出来る限り気にかけておく。でも、一っだけ約束して
すると、八重樫は俺の前に立ち、真剣な表情でこう言ってきた。

「絶対に、生きて帰ってきて。それを守ってくれるなら、何も言うことはないわ」

「…… ああ。約束する」

そう言った時、頭の中にあの男の声が聞こえてきた。

『イチヤついてるとこ悪いが、そろそろ着くぞ』

「（…… 別にイチヤついてねえ。それで、俺は何処に行けばいい）」

『それはいちいち指示を出す。お前はその通りに動け』

「（…… わかった）」

そうしている間に、俺達に乗っていた台座は王城の中に着いた。

『今だ。後ろにあるバルコニーから下に飛び降りろ』

「（ああ）」

「じゃあ八重樫、そっちは頼んだぞ」

そう言つて、俺は他の連中にバレないようにバルコニーから飛び降りた。降りた場所
は、

同じような形をしたバルコニーだった。

『そのまま部屋の扉を突っ切つて右に曲がれ』

俺は頭に聞こえてくる声に従いながら王城の中を走った。そして……

『その扉の横にある飾りの目を同時に押せ』

俺が着いた場所は宝物庫の様な場所だった。

「(剣やら杖やら宝石やら…… 売ったら日本円で幾らぐらいだ?)」

そんな事を考えていると、再び声が聞こえてきた。

『宝石見ないで奥に来い』

「(はいはい……)」

そう言われ、俺は宝物庫の奥の方に向かった。すると、奥にあるテーブルの上に置かれている

何かが黒く光った。

『今光った物を手に取れ』

その言葉に従い、俺はテーブルにある謎の機械を手を取った。その機械は真っ黒で、何かを

入れる事が出来そうなスリットが三つあった。そして、持ち手の部分にはトリガーがあった。

『そのトリガーを押して、現れたゲートをくぐれ。俺はその中にいる』

俺はその声に従い、持ち手の部分にあるトリガーを押した。すると、目の前に黒い光

を

放っている謎のゲートが現れた。俺はそのゲートから放たれる強烈な闇を感じながらも、

恐る恐るゲートの中に入った。

「……は……」

ゲートの中は真つ黒で、至る所から強烈な悪意や殺意を感じた。そして、前の方から謎の

気配を感じた。

「(とりあえず、気配の方向に向かえば良いのか……?)」

そう思いながら、俺は気配の方に向かって歩き出した。すると、目の前に玉座のような物が

現れた。その玉座からは、謎の鋭い爪が見えた。

「お前が……俺を呼んだのか」

そう言うと、玉座に座っていた存在は立ち上がり、俺の前に立った。

『ほお……俺の指示なしにここまで来るか。やはりお前は面白い人間だ』

俺の前に立った存在は人間とはかけ離れた姿をしており、全身真つ黒で、ところどころ赤い

模様が入り、両手は鋭い爪で、オレンジ色の獰猛な目をしていた。

『人間、俺の名はベリアル。お前の名は?』

「…… 月無 帝だ」

『ミカドか…… ならばミカド、俺の力を受け継ぐ気はないか?』

そう言つて、ベリアルは黒い笑みを浮かべながらそう言つてきた。

「力だと?」

『ああ。俺の魂はもう少しで消滅する。その前に、俺の力を誰かに受け継がせたいと思つた。』

だが、俺の力は闇だ。その力を使うには闇を内包している人間にしか使えない。だから、

お前にこの提案をしている』

「……」

『俺の力を使いこなす事ができれば、元の世界に戻れるかもしれない。どうだ? お前に』

メリットはある話だろ?』

「…… ああ、確かにな。だからこそ、いくつか聞いても良いか?」

『何だ?』

「……お前、本当の目的はなんだ」

俺はそう言つて、ベリアル目を睨んだ。

本音と勝負

『……ほお、それはどういう意味だ?』

俺は睨みつけてくるミカドにそう言った。

「そのままの意味だ。お前、俺に力を受け継がせるのが理由って言ったが、その話、

嘘だよな?」

『……何故そう思う』

「お前の目、あのジジイと同じだ。本音を隠して自分の都合よく動かそうとする人間と

同じ目……それに、お前は力を使いこなせたらって言ったが、お前の力がどんな物か

を俺は

知らねえ。その力の説明をする前にテメエは消滅したら元の世界に戻る以前の問題

になる。

ま、そもそもお前という存在が本当に消滅するのもかも怪しいところだがな……」

『ククク……ハツハツハツ!』

黙ってミカドの話を聞いていた俺は笑いが止まらなかつた。

「何がおかしい……」

『いや、俺はどうやらお前の事を過小評価し過ぎていた。まさか俺の話はバツサリ嘘と
言い張るとは。お前は今までに会った事がないほど面白い人間だ』

「そいつはどうも……それで、テメエの本当の目的は何だ」

『俺の目的か？ わかりやすく言えば、お前の肉体を乗っ取って俺自身の肉体を復活さ
せる事だ。』

今の俺に肉体は無いからな。お前の肉体を乗っ取れば俺は自由に動ける』

「何で俺の肉体だ。別に他の人間でも良いだろ」

ミカドは警戒しながら俺にそう聞いてきた。

『さっきも言ったが、俺の力は闇だ。魂だけに闇があっても、肉体に闇が無ければ俺の全
力の

力は発揮できないんだよ。それに、肉体を復活させるには闇が必要不可欠なんだよ』
「……なるほどな」

ミカドはどこか冷静な様子でそう呟いた。その様子を見た俺は、ミカドにこう言っ
た。

『さて、こうして俺の目的はあつさりバレた訳だが……ミカド、俺と一つ勝負をしない
か？』

「……勝負？」

『ああ。お前が俺の力を使いこなせるどうかの勝負だ。お前が勝てば、俺は大人しくお前に』

従おう。力の使い方も教えるし、元の世界に戻る手助けをしてやる』

「……俺が負けたら？」

『その時はお前の肉体を俺がいただく。そして、俺の肉体復活のために利用させてもらう』

「……少し考えさせろ」

『ああ』

そう言って、ミカドは考え込み始めた。

『（考え込んだところで、お前はこの勝負を受けるだろうがな……）』

口には出さなかったが、俺はミカドがこの勝負を受けると思っていた。そして、十分後……

「一つ聞かせろ」

『何だ？』

「お前の持つ力つてのはどれぐらいの力だ」

『そうだな……宇宙を破壊するぐらいの力はある』

「宇宙か……なら決まりだ。その勝負、受けて立つ」

ミカドはそう言つて俺の勝負を受けた。

『そうか！ なら、早速始めようか』

そう言つと、ミカドの前に黒いカードが現れた。

『まず、そのカードをその中に入れてろ』

「その中つて……何か名前はねえのかよ」

『元の名前は何かライザーだったな。お前が勝つたら、後でお前が適当に決めろ』

「……わかった」

ミカドは渋々納得してカードをライザーの中に入れた。

『Mikado Access Granted.』

『んじや、次はこのメダルを一番前のスリットに入れる』

そう言つて、俺は自分の顔が描かれたメダルを投げた。そのメダルをキャッチした

ミカドはスリットの中にメダルを入れた。

『これで勝負を始めるための準備は完了だ。後はお前の好きなタイミングでメダルを

スキャンしてトリガーを引け』

「ああ……」

ミカドは一度目をつぶつて深呼吸した。

「じゃあ、行くぞ」

そうやって、ミカドはブレードを動かしてメダルをスキャンした。

『BELIAL!』

そして、ミカドはトリガーを引いた。その瞬間、ミカドの身体は黒い霧に包まれた。

「ガハツ……!?!」

その瞬間、ミカドは口から血を吐いた。そして、地面に倒れ、頭を押さええて苦しみだした。

「アアアアアア?!」

『(さて……お前は耐えられるか? ミカド)』

俺は玉座に座り、ミカドの成り行きを見守った。

受け継ぐ力と共同戦線

どれぐらいの時間が経ったのか、俺はわからないほど意識が朦朧としていた。

俺は普通に考えれば死ぬほどの血を吐き、全身強烈な激痛を感じて倒れていた。

『フフフ……耐える事ができなかったか』

「(フザケンナ……！)」

俺は身体中に激痛を感じながらも、フラフラと立ち上がった。

『まだ立つか……』

ベリアルはどこか呆れたような様子で俺を見ていた。

「当たり前だ……こんなところで終わってたまるか……！」

すると、ベリアルは不思議そうにこう聞いてきた。

『一つ聞こう。何がお前をそこまで動かすんだ？』

「俺が、動く理由か……そんなの、決まってるだろ……！」

俺はベリアルの目を睨んでこう言った。

「元の世界に、恩を返したい人達がいるんだよ。それに、アイツと約束したんだよ……

絶対に、

生きて帰るって！」

そう言つて、俺は再びトリガーを引いた。

「だから……俺に力を貸せ！ ベリアル！」

『っ!? コレは……!』

そう叫んだ瞬間、俺の身体を包んでいた黒い霧は俺の身体に取り込まれていった。そして、

目の前に立っていたベリアルも黒い光の粒子に変わり俺の身体に取り込まれていった。

そして……

『はあ、はあ……この姿は……』

俺が自分の手を見ると、俺の手はベリアルと同じ鉤爪がついた手になっていた。

『ハッハッハッ！ まさか俺の力を本当に受け継ぐとはな！』

すると、突然頭の中にベリアルの声が聞こえてきた。

『この勝負、お前の勝ちだミカド！』

『……そうか』

そう呟いて、俺はライザーを元に戻してベリアルのメダルを抜いた。すると、俺の肉
体は

に
激痛が走っていた部分はなくなり、髪の毛の毛先が赤色に変わっていた。そして、腰

謎のホルダーの様なものが付いていた。

「この姿は……それにこのホルダーは……」

『お前が俺の力を引き継いだからだ。その結果、お前は人間離れた身体能力と超能力を

手に入れた。それと、そのホルダーはメダルを入れるホルダーだ。俺以外にも、色々な怪獣のメダルがこの世界にはあるからなあ』

抜いたベリアルメダルからベリアルの声を聞いて、俺がホルダーを開くと、

二枚のメダルがホルダーに入っていた。

『とりあえず、そのメダルの使い方を教えるか』

ベリアルはそう言うと、一つずつメダルの使い方を教えてきた。

くくく

『……とりあえず、メダルの使い方はそんな感じだ』

「なるほど……」

数十時間かけて、ベリアルのメダル講習は終わった。

『使い方はわかったか?』

「ああ。変身と召喚と武装と憑依だろ」

『すっかりと理解したみたいだな。じゃあ、ここから出るぞ』

そう言つて、ベリアルはホルダーの中に入ろうとした。だが、俺は入ろうとしたベリアルのを

メダルを掴んだ。

「ちよつと待て」

『……んだよ』

「お前、肉体を取り戻すつて言つてたな」

『ああ。それがどうかしたのか?』

「その野望、俺が協力してやるよ」

『は?』

ベリアルは、『何言つてんだコイツ』みたいな声でそう言つた。

「俺はお前に力を貰つた。なら、俺はお前にその分の義理を果たさないとイケねえ」

『……何だ? それは敗者である俺への情けか?』

「んなわけねえだろ。どうして俺が情けをかけなきゃならねえ。これは俺のただの自己満足だ」

『……』

「で、どうすんだ？」

『…… つくづく思うが、お前は面白い人間だな。なら、精々俺の野望のために働いてもらおうか』

ベリアルは笑った様にそう言ってきた。

「それはお前もだ。俺が元の世界に帰るまで、精々利用させてもらおうぞ」

『フハハハ！ お前の好きにするが良い！』

「ああ。そうさせてもらう」

そう言って、俺はベリアライザーのトリガーを押してゲートをくぐった。

再会

「うわっ……夜じゃねえか」

俺がゲートをくぐった先は城の庭に繋がっていた。そして、空は真つ暗で夜になつていた。

「おいベリアル。今、どれぐらいの時間が経った？」

俺はホルダーからベリアルメダルを取り出してベリアルにそう聞いた。

『さあな。最低でも五日ぐらいは経ってるんじゃないか？』

「五日か……まあまあ時間は経ってるな」

『お前が俺の力を受け継ぐのに時間がかかっていたからな』

そう言つて話していた時、剣を振る様な音が聞こえてきた。

『剣の音か……それもなかなか鋭い音だな』

「ああ」

「(多分アイツだな……)」

俺は一人の人物を思い浮かべながら剣の音が聞こえる方向に向かった。すると、そこには一人の少女が剣を振るつていた。

「夜だったのに、お前は真面目だな」

「っ、誰！」

俺は少女の背後に立ちそう言った。すると、その少女は驚いたのか

振るっていた剣を俺に向けた。だが、俺の顔を見た瞬間、剣を地面に落とすした。

「も、もしかして、帝君……？」

「ああ。約束通り帰ってきたぞ、八重樫」

そう言った瞬間、八重樫は俺に抱きついてきた。

「おっと……急に抱きついてくるなよ」

「ご、ごめんなさい。久しぶりに顔を見たからつい……」

そう言いながら、八重樫は俺から離れた。

「……帝君、何か変わってない？」

八重樫は俺の髪と雰囲気が違うのを感じ取ったのかそう聞いてきた。

「まあちよつと色々あってな。一応お前には話しておいた方が良さそうだな。なあ、ベ

リアル」

『それは知らん。お前の好きにしろ』

「メダルが喋った!?!」

八重樫は突然浮かび上がって喋ったメダルに驚いていた。

「み、帝君。そのメダルは一体……」

「少し長くなるが、それでも良いか？」

~~~~~

「……つまり、帝君は宇宙を破壊するほどの力を手に入れたって事？」

「ああ。だが、現状ではまだまだ不完全な状態らしいがな」

俺と八重樫は近くのベンチに座ってベリアルとの事を話していた。

「力の破片はこの世界の何処かにあるらしい。こんな風に、メダルとなつてな」

俺はホルダーからベリアル以外のメダルを二枚抜き取った。

「……じゃあ、帝君はこれからどうするの？」

「この世界を回るつもりだ。元の世界に帰る方法と、ベリアルの力の回収、ベリアルの肉体を復活させる為にな」

復活させる為にな

そう言つて、俺は宙に浮いているベリアルのメダルを掴んだ。

「……そっか」

八重樫は少し残念そうな表情になった。

「悪いな。お前には無駄な心配させて」

「ホントよ。こんな心配するなら、私も帝君について行った方が……」

「それは駄目だ」

俺は無理矢理八重樫の言葉を遮った。

「…… 何で駄目なの」

「悪いが、俺はもう人を殺す覚悟も、目的の為には手段を選ばない覚悟もできている。だが、

お前はどうか八重樫。お前はまだ、人を殺す覚悟ができてないだろう？」

「それは……」

「それにお前、白崎を置いていけるのか？」

「……」

そう言うと、八重樫は黙って下を向いてしまった。それを見た俺は、八重樫の頭に手を置いた。

「…… もしも、お前が覚悟を決めた時には連れて行ってやるよ」

「…… ホント？」

「ああ。だが、しっかりと考えろよ。一度殺したら、二度と元には戻れないぞ。元の世界に

戻っても、殺したっていう感覚は永遠に残るからな」

そう言いながら、俺は立ち上がった。

「さてと……」

「もう行くの?」

「ああ。ここ、あんまり好きじゃねえからな」

「そう…… なら行く前に私の部屋に寄って。帝君に渡したい物があるの」

「渡したい物?」

「ええ。ついてきて」

八重樫はそう言って城内の中に歩いていった。俺は不思議に思いながらも八重樫についていった。そして、八重樫の部屋に着くと、八重樫は銀色のプレートを渡してき  
た。

「コイツは?」

「ステータスプレート。その名の通り、自分のステータスを表すアーティファクトよ」

「アーティファクトってのは?」

「強力な魔法道具って思ってくれたら良いそうよ」

「へえ…… で、コイツの使い方は?」

「それに血をつければステータスがわかるわ」

そう言われたので、俺は爪で指を引っ搔いて血を垂らした。すると、プレートに数字  
と文字が

表示された。

月無 帝 17歳 男 レベル：計測不能

天職：闇の皇帝 レイオニクス

筋力：計測不能

体力：計測不能

耐性：計測不能

敏捷：計測不能

魔力：計測不能

魔耐：計測不能

技能：巨大化、武装、格闘術、憑依術、怪獣使役、超獣使役…… e t c

「……何、そのおかしなステータス」

八重樫は、俺のステータスを見て混乱していた。

「これ、不良品とかじゃねえよな」

「流石にないと思うけど……これはいくらなんでも異常よ」

「……じゃあ聞くが、八重樫のステータスはどんなだった？」

「私のはこれよ」

八重樫 雫 17歳 女 レベル9

天職：劍士

筋力：80

体力：90

耐性：68

敏捷：170

魔力：70

魔耐：70

技能：劍術「斬撃威力上昇」、縮地、先読み、気配感知、隠業、言語理解

「まあ、お前は劍関連だよな……驚きもねえ」

「（それと、俊敏のステが高いな。抜刀術が使えたらかなり強いだろうな）」

俺は八重樫のステータスが劍に関係する事だったので逆に安心した。

「そうよね……それよりも、これでわかったでしょ？ 帝君のステータスが異常って」

「確かにそうだな……そういえば、今の今まですっかり忘れてたが、南雲のやつはどう

だった？」

「南雲君は……」

くくく

「……檜山は殺していくか」

「気持ちには理解するけど、それはやめて。私達の行動が制限されかねないわ」

八重樫の話を聞いた俺はそう言ったのだが、その提案は八重樫に止められた。

「チツ……で、南雲は図書館でこの世界の情報を集めてたと」

「ええ。何度か様子を見に行つたけどモンスターの本や他の街の本を読んでいたわ。

おそらくだけど、戦えない分を知恵でカバーしようとしてたんだと思う」

「なるほどな……なら、アイツに情報を貰いに行くか。八重樫、南雲の部屋は何処だ？」

「……お化けと間違えられない？ 居なくなつて、10日も経つてるのよ」

「……今、10日って言ったか？」

俺は八重樫の言葉に耳を疑つた。

「え、ええ」

「(ベリアルルの野郎、大嘘つきじゃねえか……)」はあ

俺はベリアルルの適当さに呆れてため息が出た。

「まあいい……とりあえず八重樫、南雲の部屋を教えてください」

「良いわよ。というか、南雲君の部屋まで案内してあげる」

「そうか。悪いな」

俺は八重樫に感謝して、南雲の部屋まで案内してもらつた。

「南雲君、八重樫よ。少し良いかしら？」

『八重樫さん？ 少し待って』

扉の向こうから声が聞こえると、扉の鍵が解除されて扉が開いた。

「どうしたの八重樫さん？ こんな時間に」

「少し会わせたい人がいるの。ほら、来て」

そう言われて、俺は南雲の前に立った。

「よっ。久しぶりだな南雲」

「…… あの、どちら様ですか？」

南雲は俺を初めて見る人間のようにそう聞いてきた。

「…… お前、何気にひどいな」

「南雲君。彼、帝君よ」

「帝君!? それにしては髪が赤いし目つきが悪いような……」

「目つきが悪いのは前からよ」

「お前も何気にひどいな……」

俺は八重樫の言葉に少し傷ついた。

「南雲、お前に話がある。少し部屋に入っても良いか？」

「う、うん。どうぞ……」

その言葉を聞き、俺と八重樫は南雲の部屋に入った。そして、俺達は

適当に椅子に座った。

「帝君、生きてたんだね。良かった……」

俺が椅子に座った瞬間、南雲はそう言ってきた。

「それ、どういう意味だよ」

「帝君、死亡扱いになってたんだよ。初日に行方不明になったと思っただけの日に

城の庭に血の跡があったから」

「誰だよそんな面倒な事したの……」

俺はそれを聞いて呆れた。

「でも、本当に良かったよ。帝君が生きていてくれて」

「……ありがとうな南雲」

俺は口には出さなかったが、心の中で礼を言った。

「それで、僕に話して？」

「お前が調べたこの世界の情報をくれないか？俺はこれから単独行動を取ろうと思っ

てな」

「単独行動って……それ、本気で言ってるの!？」

俺の言葉に南雲は心底驚いていた。

「ああ。ここに残って他の奴らと足踏み揃えて進むより、一人で進んで帰る方法を見つ

ける方が

よっぽど楽だ。それに、俺が思うに天之河と一緒に行動してる方が危険だしな。後、単純に

死んだと思った奴が生きてたら何をされるかわかったもんじゃねえ」

「そ、それは確かにそうだけど……いくら帝君でも一人じゃ」

「これを見てもそう言えるか？」

そう言つて、俺は自分のステータスを見せた。

「な、何これ……こんなのチートつてレベルを超えてる……」

「私も見た時は目を疑ったわ……」

南雲は俺のステータスを見ると固まってしまった。

「ま、そういうこつた。もしも帰る方法を見つけたら帰つてくる。だから南雲、

お前が調べた情報を俺にくれ」

そう言つて俺は頭を下げた。すると、南雲は少し考え込んでこう言つてきた。

「……はあ。わかつたよ。僕は帝君の力に賭ける」

そう言つて、南雲は数枚のメモ用紙を渡してきた。

「僕が調べたこの世界の事。その中でも、特に重要そうな物を書いたやつだよ」

「そうか。助かる」

「それと、この世界には冒険者ギルドがあるみたい。単独行動をするなら資金も必要だと

思うから入っても損は無いと思うよ」

「そうか。何から何まですまないな」

俺はそう言つてメモ用紙に目を移した。

「(七大迷宮か…：迷宮つていうぐらいだからベリアルの方が可能性があるな。後、

ここから近い街はブルックつて所か。しばらくはそこを拠点にして動くか…：)」

俺はすぐに今後の動きを考えた。

「あ、あと帝君。10日経つたけど、僕と先生と八重樫さん、あと白崎さんしか戦うのが危険だつていう事が分かってないみたいだったよ」

「それを俺に言つてどうすんだよ…：基本的には俺は、お前と八重樫以外の人間には興味が

ないんだが…：)」

『(ちよつと待てミカド。少し面白い事を考えた)』

俺がそう言うと、突然頭の中にベリアルの声が聞こえてきた。

「(何だよ、面白い事つて)」

ベリアルはなかなかエゲツない事を言い出した。

「(お前、南雲と八重樫を殺す気か?)」

『(安心しろ。サイズがデカくても、闇の力が少なかつたらただの人間と変わらん。』

それに、憑依の練習にもなるだろ?)」

「(…それはそうだが)」

『(この先、どの道その手を使う事は増えるだろ。その練習とでも思つとけ)』

「(…それもそうだな)」

そう思い、俺は二人に向かってこう言った。

「二人とも、俺は明日、この国に面白い物を見せる。その時に現れた物をお前達二人で

倒してくれ」

「えっ?」

「それってどういう事?」

「それは明日になってのお楽しみだ。じゃあ二人とも、世話になったな」

俺はそう言うと、南雲の部屋にある窓から外に出て城を出た。

…その日の夜、ハイリヒ王国にいる一人のゴロツキの行方が消えた。

~~~~~

八重樫 side

「無事に帰って来てくれて良かった……」

私は自室のベッドでそう思っていた。帝君が単独行動をしていた10日間、私はずっと心配で

心臓が痛かった。それに、単独行動を開始した翌日に血があつた時は本当に生き心地が

しなかつた。だけど今日、彼は帰って来てくれた……。何故か途轍もなく強くなつて。

「今、帝君について行ったところで、私はただの足手まといにしかないわよね……」

彼のステータスは数字が書いていなかったが、計測不能という事はそれだけ強大な力を

持っているという事だ。今の私が、仮に彼についていったところで役にも立てず、彼の足を引っ張りかねない。

「(殺す覚悟か……)」

そう思った瞬間、私のステータスプレートが光った。見てみると、私の技能に何かを追加されていた。

八重樫 雫 17歳 女 レベル9

天職：剣士

筋力：80

体力：90

耐性：68

敏捷：170

魔力：70

魔耐：70

技能：剣術「斬撃威力上昇」、縮地、先読み、気配感知、隠業、言語理解、

??の??
??の??

「(文字が消えてる……?)」

突然現れた技能は、何故か文字化けしていた。唯一わかるのは“の”だけだった。

「(何なのかしら、この技能……)」

私はそう考えていたが、いつのまにか目を瞑って眠ってしまった。

キヤラ設定

月無 帝 17歳 男 レベル：計測不能

天職：闇の皇帝 レイオニクス

筋力：計測不能

体力：計測不能

耐性：計測不能

敏捷：計測不能

魔力：計測不能

魔耐：計測不能

技能：変身、巨大化、融合、武装、格闘術、憑依術、闇魔法、雷魔法、怪獣使役、

超獣使役、全属性耐性、魔法耐性、物理耐性、毒無効、麻痺無効、石化無効、恐慌無効、

氷結無効、状態異常無効、闇吸収、念話、超能力、透視、気配遮断、変声、浮遊、

怪力、神速、防御障壁、威圧、視覚強化、聴覚強化、身体能力強化、気配感知、

魔力感知、言語理解

元の世界で“孤狼”と呼ばれて恐れられていた不良生徒。他人に対して殆ど興味がなく、

基本的に一人で行動する事が多い。ただ、八重樫と南雲だけが例外で、この二人だけには

普通に話し、一緒に行動する事もある。

小学生の時に両親が亡くなっており、それがキツカケで性格が変わり、不良になった経緯を

持っている。現在は両親の友人のカフェで住み込みで働いている。

八重樫とは同じ小学校に通っていた。その時に、ある事件がキツカケで八重樫からは好意を

持たれている。だが、そのすぐに両親が亡くなり転校したため、高校に入るまでは八重樫の

好意に気づいていなかった。高校が一緒になってからは八重樫の好意に気づいてい

るが、ワザと知らないフリをしている。帝自身、裏で八重樫の事は何かと気にかけてはい

る。そのため、たまに買い物に付き合ったり飯にも行ったりしている。

天之河と檜山の事が嫌いで、絡もうとしてきた瞬間、睨みつけて黙らせている。

ベリアル

とある世界で死んだウルトラ戦士。だが、ある寄生生物が行った実験で魂だけが復活し、

復活した際、近くにあった物を闇で創り出しこの世界にやってきた。

その際、この世界のあちこちに創り出したメダルを落としている。唯一手元に残ったのは

ゴモラとレッドキングのメダルとベリアライザーだった。

現在は帝との勝負に負けたため、帝の協力者としてホルダーの中にいる。

一応、帝の肉体を借りて動くこともできる。

闇の皇帝

闇において最強の力を持つ者の証。闇に関する魔法は吸収し、自分の力に変換する事が

できる。さらに、自分が使う闇の技の威力を増大する事ができる。

レイオニクス

怪獣や超獣を使役する者の総称。メダルをベリアライザーにセットする事で、そのメダルに

描かれた怪獣や超獣を意のままに操る事ができる。

ベリアライザー

帝が持つ、ベリアル之力や怪獣之力を使うための装備。ライザーにアクセスカードを入れる事で、ベリアル、ベリアル融合獣、合成怪獣に変身、怪獣の武装を装備する事ができる。

ただし、一度に武装できる怪獣は一体のみ。

ライザーにカードを入れない場合、メダルに描かれた怪獣の使役、メダルに描かれた怪獣を

別の人間に憑依させる事ができる。

怪獣のサイズや強さは、全て帝が闇を入れた量に比例している。

ベリアライザーの使い方

変身する際

アクセスカードを入れ、メダルをスリットに入れてブレードを最後まで倒してトリガーを引く

武装する際

アクセスカードを入れ、メダルをスリットに入れてブレードを音声認識のところで止めてトリガーを引く

召喚の際

アクセスカードを入れず、メダルをスリットに入れてブレードを最後まで倒して召喚したい場所に向かってトリガーを引く

憑依の際

アクセスカードを入れず、メダルをスリットに入れてブレードを音声認識のところで止めて憑依させたい人間に向けてトリガーを引く

八重樫 雫

ヒロイン。小学生の時に帝に助けてもらったのがキツカケで帝に好意を抱いている。

帝と高校で再会してからは色々とアプローチをかけているが、帝が全然気付かないことに

不満を感じている。帝だけに、唯一自分の弱音を吐き出す事ができている。

天之河とは縁を切ろうと思っており、現在は形だけの関係である。

ショーの始まり

八重樫 side

「あ、おはよう八重樫さん」

「おはよう南雲君」

朝、私が自主練で剣を振りに行こうとした時、偶然南雲君と会った。

「八重樫さんは自主練？」

「ええ。南雲君は図書館へ？」

「そうだよ…… それよりも八重樫さん。昨日の帝君が言ってた事、何か分かった？」

南雲君は、帝君が去り際に言った事を聞いてきた。

「いえ、何も分からないわ」

「そっか……」

そう話していた時、突然地面が揺れた。

「っ!？」

「急に地震!？」

私と南雲君は近くの柱に捕まった。すると、窓の外を見た南雲君が驚愕の表情を浮か

べた。

「や、八重樫さん！ アレ！」

南雲君は窓の外を指差した。私はその先を見ると、何か巨大なモンスターが城に近づいているのが目に見えた。

「な、何よアレ……」

その大きさは私達がいる城と変わらないぐらいの大きさだった。

「も、もしかして、アレが帝君の言っていた面白いもの……？」

「それは分からないわ……」

そう話していた時、この城を覆っている結界の一つが破壊された。

「け、結界を破壊した!？」

「つ、マズイわね…… 南雲君！ 貴方は周辺にいる人達の避難誘導を！」

「八重樫さんはどうするの！」

「あの巨大なモンスターの足止めに行く」

「い、いくらなんでも無茶だ！」

南雲君は私を止めようとしてきたが……

「そんな事は分かっているわよ！ だけど、このままだと全員死にかねないわ。

それに、今ここでアイツに一番近いのは私よ。だから、少しでも足止めして

時間を稼ぐ。その間に、きつとメルドさん達が来てくれるはずよ」

「つ……分かったよ。避難誘導が終わったら、僕も僕にできる事をやってみる」

「ええ。お願いするわ。それじゃあ、また後で」

そう言つて私は地面を蹴り、巨大なモンスターに向かつていった。

~~~~~

帝side

『上手くいったな』

「ああ。まさか死体にも使えるとは思わなかったがな」

俺は今、ゴモラが暴れているのがよく見える所で浮いていた。

昨日の夜、俺は街で絡んできたゴロツキを一人殺した。その男から、この世界の金を根こそぎ奪い、俺は黒いフード付きのローブを買いそれを纏つてゴモラの様子を見ていた。

『これで、お前とイチャついていた女は殺す覚悟が決まるのかねえ……』

「別にイチャついてないんだが……てか、お前の本当の目的はそれか」

『ククク……あの女がいた方が面白そうだからなあ』

「……お前、嫌な奴だな」はあ

そう話している間に、八重樫がゴモラのもとに着き戦闘を始めだした。

「速いなアイツ」

『ああ。それに、ゴモラの動きをよく見て動いている。それなりに戦闘の腕はあるな。』

これなら、あの女一人で倒せそうだが…… 邪魔はいつでも来るものだな』

ベリアルはそう言うのと、城の方を見た。そこには、甲冑を装備した騎士と、バカなクラスの

連中がゴモラに向かって走っていた。

『さて、どうする?』

「決まってるだろ。せつかくのシヨウの邪魔をさせるわけにはいかないからな。あそこで何人か

足止めする」

そう言つて、俺は連中の進む道に向かって降りていった。

~~~~~

メルド side

「つ、お前達生まれ!」

俺は突然現れた巨大なモンスターに光輝達と向かっていた。だが、突然上空から強烈な

威圧を感じたため全員を止めた。そして、俺が上空を見ると、黒いローブを着た謎の存在が

俺たちの前に立ち塞がった。

「申し訳ありませんが、ここから先は通行止めです」

声を聞くに、若い女の声だった。

「何者だお前は？ あの巨大なモンスターと、何か関係があるのか？」

俺は剣に手をかけてそう聞いた。他の騎士や光輝達も、それぞれの武器に手をかけていた。

「何者かという質問は無視させていただきます。ですが、あの巨大な怪獣と関係があるかという

質問には答えさせていただきます。あの怪獣は、私の僕の様なものです」

女は随分と丁寧な口調でそう言ってきた。

「そうか…… ならば聞こう。お前の目的はなんだ」

「そうですねえ…… あえて言うならば、貴方達の力がどれ程のものかを確認しにきたとでも

申しておきましようか。特に、そこの勇者パーティーとして召喚された皆様の、ね」

「…… その言い方からするに、お前は魔人族か？」

「さあ？ それは皆様の判断に任せるとしましょう」

女は俺達を挑発する様にそう言ってきた。

「それよりも、こうして呑気に話していても良いのでしょうか？ 話している間にも、怪

獣は

どんどんと暴れていきますよ？」

「魔人族め……！ 何て非道な事を！ お前はこんな事をして心が痛まないのか！」

すると、光輝が女に向かってそう怒鳴った。

「ええ。だって、興味がありませんから」

「なっ……」

女は感情を込めずにそう言った。

「さて、くだらないお話はこの辺りで終わりにしましょう…… さあ、勇者パーティー

の

皆様に騎士団の皆様。ショーが終わるまで、私と遊んでくださいませ？」

そう言った瞬間、女から殺気が感じられた。

「この世界の罪の無い人達をよくも…… 絶対に許さない！ メルドさん！ 急いで彼

女を倒して

あの怪物を倒しましょう！」

「ああ！ お前達、陣形を組んでここを急いで抜けるぞ！」

「「はい！」」

「よし！ 光輝に龍太郎に雫は……って、雫は何処に行った？」

俺は辺りを見渡したのだが、雫の姿は何処にも見当たらなかった。

「雫……名前からして少女の様ですね。その少女の容姿は分かりませんが、黒髪ロングの

少女が先程、黒髪の少年と怪獣と戦っていましたね……」

「何っ!？」

俺は女の言葉を聞いて動揺が隠せなかった。

「さっき話していた間に、怪獣に潰されたかもしれませんか？」

「お、お前えええ！」

すると、激昂した光輝が女に向かって突進していった。

「おっと……危ないですね」

「お前だけは、絶対に許さない！」

「それはあなたのお好きにどうぞ。それよりも、皆様方も早く攻撃しなくて良いのですか？」

「このまま怪獣を無視してどうなっても知りませんよ？」

女は光輝の攻撃を躲しながらそう言ってきた。

「つ、お前達！ 急いであの女を仕留めるぞ！ 魔法を使える者は前衛のサポートだ！

前衛は

連携をとってあの女を仕留めるぞ！」

俺はそれぞれに命令を出して女に向かっていった。

ショーの終わり

八重樫 side

「近くで見ると大きいわね……」

私は巨大な怪獣の足元近くにいた。

「とにかく、あのモンスターは動きを止めないと……！」

そう思った私は剣を抜き、モンスターに一瞬で近づいて脚に一撃を入れた。

すると、私の剣はモンスターに届き、モンスターの脚からは血が出て、モンスターは

鳴き声を上げていた。

「(思ったよりも鎧は薄い……？ それに動きもそこまで速くない……)」

今の一撃から、私はその二つが思い浮かんだ。すると、モンスターは自身の腕を

振り下ろしてきた。だが、そこまで速いものでもなかったので、私は簡単に躲す事が

できた。

だが、さつきまで私がいた場所はクレーターができていた。

「(やっぱり遅い……。もしかして、あのモンスターは攻撃だけに特化しているのかし

ら……)」

そう考えていると……

「八重樫さん！ この辺にいた人達の避難は終わったよ！」

避難誘導を終えた南雲君がやってきた。

「そう。ありがとう南雲君」

「うん！ …… それよりも、あのモンスターについて何かわかった事はある？」

「…… あのモンスター、見た目通り装甲が硬いと思っただけですけどそこまで硬くなかったわ。」

それと、動きは遅い。だけど攻撃の威力はとんでもなかったわ」

「そっか……」

そう言うと、南雲君は考え込み始め、一つの家を出してきた。

「八重樫さん。僕がああのモンスターの足が入るほどの落とし穴を作る。その落とし穴に

モンスターが嵌ったら、八重樫さんはあのモンスターのうなじを斬りに行って」

「うなじを？」

「この世界の生物も、僕達の世界の生物同様、うなじに神経が通ってるんだ。だから、

うなじを斬る事ができればあのモンスターを倒せると思う」

「…… そう。わかったわ。じゃあ南雲君が落とし穴を作るまであのモンスターを足止

め

しておくわ」

「うん。お願いするよ」

そう言つて、南雲君はここから少し離れた地面に錬成で落とし穴を作り始めた。その間、

私は南雲君にモンスターが意識を向けない様に注意を引いていた。そして……

「八重樫さん！ 準備終わったよ！」

南雲君は二つの巨大な穴を作り出していた。

「わかったわ！ こっちに来なさいモンスター！」

私はそう叫び、穴の方に向かって走り出した。すると、モンスターは声に反応して私に

ついて来た。そして、モンスターは南雲君が作った落とし穴に嵌って体勢を崩して

地面に倒れた。

「今だ八重樫さん！」

「ええ！ 全てを斬り裂く至上の一閃！ 絶断！」

私はモンスターの背中に乗り、走りながらそう叫んだ。そして……

「これで、終わりよ！」

私はモンスターのうなじ部分に向かって剣を振るつた。

~~~~~

帝 side

「ゼエ……ゼエ……」

「はあ、はあ……」

「どうされましたか、勇者パーティーの皆様？ 随分とお疲れのようですが……」

俺はわざと煽るようにそう聞いた。

「くそっ……！ なんて当たらないんだ！」

「光輝！ 一度落ち着け！」

騎士の言葉も聞かず、バカ勇者は再び突っ込んできた。

「それは貴方の攻撃がワンパターンだからですよ」

そう言つて、俺は攻撃を避けて距離をとった。

「はあ…… これでは拍子抜けもいいところです。これなら騎士の皆様と戦った方がよほど」

面白かった気がしますね」

「…… その割には、一度も攻撃していないが。攻撃の手段は無いのか？」

「さあ？ どうでしょうね」

俺は隊長らしき騎士の言葉にそう返した。すると、突然地面が揺れた。

俺は周りを見ると、ゴモラが地面に倒れようとしていた。そして、ゴモラが倒れた次の瞬間、ゴモラが倒れた場所から光の粒子が出發していた。

『(帝、ゴモラがやられたようだ)』

「(そうか。なら、メダルの回収に行くか)」

「さて、どうやら私の僕がやられたようですので、一度引かせていただきますね」

ベリアルと脳内で会話した俺は連中にそう言つて、高速でこの場からゴモラがいた場所  
所に

移動した。

くくく

ゴモラがいた場所には、南雲と八重樫がいた。

「お見事お見事。敵をしつかりと分析し、状況を把握してよく倒せたな」

俺は声を元に戻して二人に向かってそう言った。

「その声……」

「帝君……」

二人は俺が現れた事に驚く素ぶりは見せなかった。

「帝君、さっきのモンスターは帝君が連れてきたの？」

南雲は俺の顔を見るとそう聞いてきた。

「少し違うな。あの怪獣は俺がこの世界の人間を依り代にして召喚したつてのが正しいな」

そう言いながら、俺はゴモラの光が収束している場所に近づいた。

すると、そこには俺が昨日殺した男と、ゴモラのメダルが現れた。

「このメダルを使って、この死体に怪獣を憑依させたんだよ」

「一体何のために……」

「お前と八重樫のためだ。南雲の場合は無能と呼ばれているのを少しでも少なくするたいめ。」

八重樫の場合は、人を殺すというのがどういいう事かを知ってもらうためだ」

「じゃ、じゃあ、そこに倒れている人は私が……」

八重樫は俺の足元で転がっている男を見て顔が青ざめていた。

「いや、こいつは昨日俺が殺した。八重樫は別に誰も殺してねえよ。」

……だが、今ので分かったか？ 人を殺すつて事が」

「つ……！」

「八重樫、お前は俺の旅について行きたいと言ったが、俺と旅をするつて事はその重圧を何度も味合わないといけないつて事だ……それでもまだ、俺の旅について行きたい

とお前は

言うか？」

「それは……」

俺の言葉に、八重樫の表情は曇っていった。

「……今一度、よく考えてくれ。出来る事なら、俺はお前に殺しをやらせたくはない」

「……」

「帝君……」

そう話していると、バカ連中がこっちに向かつて来ていた。

「南雲、八重樫。今からちよつと演技するから、上手く振舞ってくれよ」

そう言って、俺は『変声』を発動させた。

「おや、攻撃するのは遅いのに追いかけるのは速いですね」

「ハジメ！ 雫！ 二人とも無事だったか！」

隊長らしき騎士はそう言うのと、二人を庇うように前に出た。

「いやはや、たつた二人に私の僕がやられてしまうとは。どうやら警戒しておかなければ  
いけない人物を少々見誤りましたね」

「お前の僕とやらはやられた。……さあ、お前はどどうする」

隊長の様な騎士は、俺に剣を向けてきた。

「この様な場合、取る手段は一つですよ」

そう言いながら、俺は上空に浮遊した。そして、俺は両手に闇の魔力を溜めた。

「それでは、本日のショーはこれにて閉幕です。次に会った時は、もう少し強くなつていて

欲しいものですね」

俺はそう言うと、両手に溜めた魔力を一気に解放した。

「ダークバースト」

「っ、お前達！ 結界を張って全員を守れ！」

騎士の隊長のような男はそう言った。俺はその声を背中で聞きながら、この場から撤退した。

~~~~~

『はあ…… お前も甘い男だな』

城から撤退してブルックに向かっている時、突然ベリアルがそうやってきた。

「うるさい……」

『それよりも、良かったのか？ ワザとあの女から距離を取るような事をして』

「良いんだよ。手を汚すのは、俺みたい人間で十分だ。アイツの手は、あまり汚させた

く

ないからな……」

『……』

そう言うと、ベリアルはそれ以上何も言っていかなかった。

ブルックと新たなメダル

「……ここがブルックか」

数時間かけて、俺はブルックの街に辿り着いた。街の前には門番がいたが、
気配遮断ですり抜けた。

「さてと、ギルドは何処なんだか……」

俺は街をふらふらと観光しながらギルドを探していた。すると、ゲームで見る様な
ギルドっぽい建物が見えてきた。

「あそこか……？」

俺は疑問を持ちながらもその建物に近づき扉を開いて中に入った。中に入ると、中に
いた

多くの人間が俺の方を見てきた。だが、俺はその視線を無視して受付の様な場所に向
かって

歩いていった。

「すまない。少し聞きたい事があるのだが良いだろうか？」

「おっと、随分と若い子だねえ」

話しかけたオバちゃんは少し驚いたようにそういった。

「それで、少年は何を聞きたいんだい？」

「ギルドを探しているのだが、この場所で合っているだろうか？」

「ギルドかい？ それだったら運が良いね。ここは冒険者ギルド、ブルック支部だよ」

「(ここで合ってたか...)」ほっ

その言葉を聞いて、俺は内心ホッとした。

「それで、少年はギルドに何用だい？」

「冒険者登録がしたいんだ」

「冒険者登録かい？ なら、千ルタとステータスプレートを出してくれるかい？」

「ああ」

そう言っつて、俺は千ルタとステータスプレートを渡した。すると、オバちゃんは俺の

顔と

ステータスプレートを何度も見返していた。

「ちよつとアンタ...」

そして、オバちゃんは手招きして俺を小さな声で呼んだ。

「何だ？」

俺はオバちゃんに耳を近づけた。

「何だいこのステータスは」

「何だと言われてもだなあ…… 最初からそのステータスなんだが……」

「……冗談かい？」

「いや、断じて冗談なんかじゃねえ」

そう言うのと、オバちゃんは俺の目を見てきた。そして、呆れた様にため息をついた。

「嘘はついてないみたいだね…… 取り敢えず、技能欄とステータスの数値は隠しておきな。」

「このステータスが公になったら面倒に巻き込まれるよ」

「あ、ああ。てか、ステータスって隠す事ができるのか……」

「アンタ…… 知らなかったのかい？」

「ああ。これ、俺の友人から貰ってステータスの表示を教えてもらっただけだからな」

「アンタ、よくこの街に入れたね…… 門の所で何か言われなかったのかい？」

オバちゃんは呆れながらそう言ってきた。

「気配遮断で上手く抜けたんだよ」

「…… はあ、そういうことしておくかい」

そう言うのと、オバちゃんはステータスプレートのステータスの隠し方を教えてくれた。

「これがステータスの隠し方だよ。そのステータス、バレない様に気をつけなよ」
「ああ…… それよりも、この青いのは？」

俺は返ってきたステータスプレートに新たに書かれた「冒険者」の横にある青色の点を

指差してそう聞いた。

「そいつは冒険者のランクだよ。ランクは依頼をクリアして行けば上がってくんだよ。ランクが

上がればギルドと連携している宿や店は一割〜二割割り引いてくれるし、移動馬車も無料で

使えたりするからね」

「へえ…… 最高ランクの色って何色なんだ？」

「金だよ」

「なら、ついでに目指してみるか」

俺はそう言いながらプレートをポケットに入れた。そして、俺は依頼の紙が貼られているボードを見た。

「あそこの紙を取ってここで受付をしたら依頼を受けられるのか？」

「そうだよ」

俺はボードに近づいて依頼の紙を見た。依頼の紙には制限が無いものもあるが、ランク制限が

あるものもあった。

『戦えるものだったら何でもいいだろ』

「(ああ)」

ベリアルの声を聞き、俺は一枚の紙を取った。

「じゃあこれで」

「……最初に依頼する依頼がデスリザードかい」

すると、周りの冒険者達がざわざわし出した。

「……何か不味かったか？」

「別に問題は無いんだよ。ただ、デスリザードは十体程の群れで行動してるからね。これを

受けるのはパーティー組んでるのが多いんだよ。それに、この依頼は青の中でも最難関って

言われてるからね」

「そうか……ま、俺には関係ないが」

「……ま、死なない様子を気をつけるんだね。デスリザードがいるライセン大峽谷はたまに

ワイバーンが出るからね」

「……ああ。ご忠告どうも」

そう言つて、俺はギルドから出て街を出ると、浮遊を使つてライセン大峽谷に向かつた。

~~~~~

ライセン大峽谷

数十分をかけて、俺はライセン大峽谷に辿り着いた。

「さてと、討伐対象は何処にいるんだか……」

俺は空中を飛びながらデスリザードを探した。すると、小さな洞窟からデスリザードの群れが

現れた。

「……見つけた」

俺は腰に付けたベリアライザーを手に取り、目の前に現れたアクセスカードをライザーに

入れた。

『Mikado Access Granted.』

そして、俺はホルダーの中からレッドキングのメダルを取り出しスリットに入れブレードを

音声認識のところで止めた。

『RED KING!』

「武装」

そう言つてトリガーを引くと、俺の両腕は巨大な拳に変化した。

『RED KING! KNUCKLE!』

そして、俺はデスリザードの前に降り立った。すると、デスリザードは俺に敵意を向けてきた。

俺はデスリザードが敵意を向けてきた瞬間、一気に接近して一番前にいたデスリザードを

地面に叩きつけた。すると、他のデスリザード達は怒ったのか、一斉に俺に襲いかかってきた。

俺は一体一体の攻撃を避けながら、確実にデスリザードを倒していった。そして、ものの数分で

デスリザード達は全員死んでいた。

「思ったより呆気なく終わった……」

『それはそうだろう。あの程度の敵を倒せないようじゃ、俺の力なんて受け継げねえつての』

「そいつもそうか……」

そう言いながら、俺はデスリザードの残骸を見ていると、突如上の方から気配を感じた。

俺は上空を見てみると、俺に向かって銀色の龍の様なものが俺に向かってきていた。

俺は咄嗟にその場から避け、地面に降り立った龍の様なものを見た。

「アイツ……オバちゃんと言ってたワイバーンか」

俺は両腕を構え直してワイバーンを睨んだ。すると、ワイバーンは飛び、俺に向かって

突っ込んできた。俺はそれを紙一重で避け、横を通り過ぎ去ったワイバーンの尻尾を掴んで

地面に叩きつけた。そして、俺はワイバーンの背中に乗って翼を引きちぎった。ワイバーンは

鳴き声を上げていたが、俺はそれを無視してワイバーンの体にレッドキングの腕を叩き込んだ。

ワイバーンの体には巨大な穴が空き、ワイバーンは絶命した。

「……こいつ一体で終わりか」

俺は腕を元に戻して周囲に散らばっている残骸を見渡した。

「(そーいや、ギルドは魔物の素材の買取ができたな……)」

俺は南雲から貰ったメモの事を思い出した。

「なあベリアル。ゲートをくぐった先の空間に物を入れる事ってできるか？」

『別にできるが』

「そうか。じゃ、コイツら突っ込んでこの辺を探索して今日は帰るか」

そう言った俺は、ベリアライザーで作ったゲートの中にデスリザードとワイバーンの残骸を

突っ込んだ。そして、俺は周辺にある洞窟を見て回った。そのうち、見て回った洞窟の一つに

宝箱があった。俺はトラップかどうかを確認するために透視で見ると、その宝箱にはメダルらしきものが一枚入っていた。

「コレは……」

俺が宝箱を開けると、宝箱の中には金色のロボットが描かれたメダルが入っていた。

『キングジョーのメダル……こんな所に落ちていたのか』

俺がメダルを手にとると、ベリアル製のメダルはそう言いながら浮いてきた。

「落ちてたつて言うより入ってたが正しいけどな…… まあその辺はどうでも良いが……」

俺はそう言って、ホルダーの中にメダルを入れた。

「さてと、謎に収獲もあったし。今日のところは帰るとするか」

そう呟いた俺は浮遊を使ってブルックの街に向かった。

## 規格外と昇格

ブルツクの街に着いた時には、既に夕方になっていた。俺は真っ直ぐにギルドに向かつて中に入った。そして、オバちゃんのいる所に向かった。

「っ！ アンタ、帰って来たのかい」

「ああ。依頼通り、デスリザードを討伐してきた」

「こ、この短時間でかい!？」

オバちゃんの声に、周りで酒を飲んでた冒険者達は酒を吹き出していた。

「ああ。それと、魔物の素材やら魔石を買い取ってもらいたい。そのため、

一緒に外に来てもらえないだろうか？」

「あ、ああ……」

オバちゃんは顔を引きつらせながらも一緒にギルドの外に来てくれた。ついでに、ギルドに

いた何人かの冒険者も外に出てきた。そして、俺はベリアライザーを持ってトリガーを引き

ゲートを作り出した。そのゲートに周りは驚いていたが、俺はそれを無視してゲート

に入り

「デスリザードの死体や魔石を引っ張り出した。

「ア、アンタ…… これを一人でやったのかい？ それもこの短時間で」

「ああ。動きがちよつと速いぐらいだったから楽だった。あ、あとコイツもいるんだが……」

そう言つて、俺は翼が無くなったワイバーンらしき龍を引っ張り出した。

「「ワ、ワイバーン!?!」」

周りの冒険者はそれを見た瞬間、絶叫を上げていた。

「う、嘘だろ…… あんな坊主がワイバーンを……」

「ぼ、坊主！ お前どうやってワイバーンを倒したんだよー！」

「…… そんなの、突っ込んできたのを避けたのと同時に翼を引きちぎって飛行能力をなくして、

体にデカイ一撃を叩き込んだだけだ」

「「バケモノか!?!」」

周りの冒険者達は一齐にそうツッコんできた。

「あつはつはつは！ アンタ、本当に規格外だね！ 長いことギルドの人間として働いているけど、登録初日にワイバーンを倒してくるのはアンタが初めてだよ」

オバちゃんはそう言いながら大爆笑していた。

「とりあえず、魔物の素材を査定するからギルドの中で待つてな」

そう言うのと、オバちゃんはワイバーンやデスリザードを見始めた。その間に、俺はギルドに

入って受付の椅子に座って休んでいた。すると十分後、オバちゃんが受付に戻ってきた。

「待たせて悪いね。今から今回の分の報酬ときっきの魔物の素材の査定料を出すよ」

そう言うのと、オバちゃんは俺の前に八枚のルタ通貨を置いた。

「今回の任務、魔物の素材の買取全部合わせて八万コルだよ。それと、悪いんだけど

ステータスプレートを出してくれるかい？」

「……？ ああ……」

俺はポケットからステータスプレートを出してオバちゃんに渡した。すると、オバちゃんは

俺のステータスプレートを何か弄って俺に返してきた。俺は返ってきたプレートを  
見ると、

冒険者のところの青色の点が黄色に変わっていた。

「たった一日でランクが二つも上がるのは前代未聞だよ」

「良いのか？　ワイバーンを倒しただけで」

「倒しただけって……　ワイバーンは赤から黄色に上がるための昇格依頼の一つなんだよ。」

アンタは偶然とはいえ、無傷でワイバーンを倒したからね。黄色になる資格は十分すぎるほど

あるんだよ」

「……なるほど」

俺はそう眩き、プレートとルタ通貨をポケットに入れた。

「あ、それとこれをあげるよ」

そう言っつて、オバちゃんは地図の様な物を俺に渡してきた。

「この街の地図。一応、私のオススメの店とか宿を書いてるから。良かったらそこを使っておくれ」

「ああ、感謝する」

「（地図っていうかガイドマップレベルじゃねえか……）」

俺は受け取った物を見てそう思った。

「それじゃあ、今日のところは失礼する」

そう言っつて、俺は立ち去ろうとしたのだが……

「ちよつと待ちな」

俺は突然オバちゃんに呼び止められた。

「アンタ、別に無理して敬語使わなくても良いんだよ」

「っ!?!」

そう言われ、俺は心の底から驚いて声が出なかつた。

「無理して敬語使ってるのが見え見えだよ。だから、アンタが話しやすい様に話しな」

「……そうかい。だったらそうさせてもらうぜ、オバちゃん」

そう言つて、俺はギルドから出てオバちゃんがおススメする宿に向かつた。その時

に、俺は

オバちゃんに対してこう思った。

「(あのオバちゃん……地味に怖いな……)」

## 新装備とライセンス探索

「さてと……オバちゃんがオススメしてる店はここか」

オバちゃんおススメの宿で一泊した俺は、とある服屋の前にいた。俺の目の前にある服屋は、何でも冒険者用も普段着用の服も取り扱っている店らしい。

「とりあえず、黒があれば良いが……」

そう思いながら、俺はその店に入った。その瞬間、俺は謎の既視感を感じた。

「あらくん、いらっしやい??随分と若い男の子が来たわねえ??お姉さん嬉しいわあ??」

「(なんでウチの店長と似た系統の人がいるんだよ……)」

俺は店の中にいた人を見てそう思った。中にいた人は、俺が元の世界でお世話になっている

店長と似たような人だった。

『おいミカド。あの怪物はヤバイぞ……』

「(怪物って言うのはやめとけ……)」

俺は頭の中でベリアルにそう言うのと店員に近づいた。

「悪いが俺に合う装備一式を見繕って欲しい。できれば黒を基調としたものが良いんだ

が……」

「良いわよ〜ん。ちよつと待つて〜」

そう言うのと、店員は店の奥に向かつていった。

『お前、よくアレを見て平然でいられるな……』

「(まあ、見慣れてるっっちゃ見慣れてるからな……)」

そんな事を話している間に、店員は俺のところに戻ってきた。

「とりあえず、コレとかどうかしら〜?」

「試着はできるか?」

「あそこでできるわよ〜ん」

「そうか」

俺はそう言つて、店員から装備を受け取つて試着室で着替えた。

「…… なかなか良いな」

俺は試着室にあつた鏡を見てそう呟いた。店員が持ってきた装備は、回避に特化しているのか

金属が少なく、薄い長袖に長ズボン、黒いフード付きのローブ、黒のブーツだった。

「よし、これにするか」

俺は外に出て、適当に何枚か普段着を選び、店員に会計を頼んだ。

「良い装備をありがとな。かなり気に入った」

「良いのよくん??喜んでもらえたら店員冥利に尽きるわ??」

会計をしている途中に店員にそう言うのと、店員はそう言うてきた。

「いつでも待つてるから、また来てね??」

俺は背中にその声を聞き、手を振ってその店から離れた。

『お前の肝が座ってるの... 普通にすげえわ...』

ベリアルは、どこか呆れた様な声で俺にそう言うてきた。

「そいつはどうも」

そう言うて、俺はギルドに向かって歩き出した。

くくくく

「ちわーっす」

そう言いながらギルドに入ると、ギルドで酒やら飯を食っている冒険者は一斉に俺を見た。

まあ昨日のことで随分と有名にはなっているからだろうか...:

俺はそんな視線を気にせずオバちゃんの方に向かった。

「あら、いらっしやい、って... 装備を変えるだけで随分と印象が変わるねえ」

「そいつはどうも」

「それで、今日は何の用だい？」

「ちよいとばかり、オバちゃんに聞きたい事があつてな」

「私にかい？」

「ああ。オバちゃん、七大迷宮が何処にあるか知ってるか？」

その言葉を発した瞬間、周りからガラスの割れる音が聞こえた。周りを見ると、何故か

冒険者達は酒の入ったジョッキを落としていた。

「……アンタ、本当に言うことまでが規格外だね」

「そいつはどうも」

「別に褒めちやいないよ……それで、どうして私にそんな事を聞いてきたんだい？」

「オバちゃんは昨日、ギルドで長いこと働いてるって言ってたからな。もしかしたら、何か

情報を知っているんじゃないかと思つてな」

「へえ、そんな事をよく覚えてたね」

オバちゃんはどこか感心した様にそう言った。

「一応、あるかもしれないっていう場所ならいくつか知ってるよ」

「なら教えてくれ」

「まあ良いけど、一つ確認。アンタは何処の迷宮なら知ってるんだい？」

「俺が知ってるのは『グリユーエン大火山』と『ハルツエナ樹海』だけだ。まあ名前だけ知ってる

だけで場所は知らないがな……」

「その辺は適当だねえ……」

そう言うと、オバちゃんも棚の所から一冊の本を取り出し本を開いた。見てみると、それは地図の様なものだった。

「二応、場所が分かっている七大迷宮は三つ。アンタがさつき言っていた『グリユーエン大火山』と

『ハルツエナ樹海』はこことここ。そして、あと一個分かっているのが『オルクス大迷宮』って

所で、場所はここだよ」

「(王国に近いの二つもあつたのかよ……)」

俺は地図を指差した場所を見てそう思った。

「それと、残りの四つだけ場所はわからない。でも、その内二つは候補がある。その一個目が

『シユネー雪原』の奥地にある『氷雪洞窟』。そして、もう一つはアンタが知ってい

る所だよ」

「俺が？」

「ああ。アンタが昨日行った」ライセン大峽谷。ここにあるって噂だよ」

「そうか……」

「(こうなると、ライセンから探して行くのが得策だな……)」

俺は地図の場所を見ながらそう考えた。

「悪いなオバちゃん。助かった」

「なら良いんだけど……アンタ、七大迷宮を攻略するつもりかい？」

「ああ。それが俺の目的の一つだからな」

「へえ……一つって事は、他にも目的はあるのかい？」

「ああ。オバちゃんはこんなメダルを見た事がないか？」

俺はホルダーからベリアルメダルを取り出してオバちゃんに見せた。

「メダルかい？」

「ああ。それを集めるのが、俺の本来の目的だ」

「……にしても、こんなメダル初めて見たねえ」

オバちゃんは興味深そうにメダルを見ていた。その間に、俺は依頼ボードから依頼の

紙を

持ってきてオバちゃんに渡した。

「そんなじゃ、依頼ついでに迷宮の入り口でも探してくる」

そう言つて俺はメダルを返してもらい、「ライセン大峽谷」に向かった。

~~~~~

「さてさてさーて、迷宮を探すのは良いがその前に……」

「ライセン大峽谷」に着いた俺はベリアライザーを手に持ち、昨日手に入れたキングジョーの

メダルをスリットに入れ音声認識のところで止めた。

『KING JOE!』

「来い、キングジョー!」

そう叫んで俺がトリガーを引くと、俺の身長より少し高い金色のロボットが目の前に現れた。

「コイツがキングジョーか……」

俺はキングジョーに近づき装甲を触った。

「(硬いな……)」

俺はキングジョーを触つてそう思い、こう命令した。

「キングジョー、この辺にいるモンスターを倒してこい」

そう言うのと、キングジョーは突然四つに分離し、モンスターがいる方向に飛んで行った。

「アイツ分離すんのかよ……」

『それがアイツの強みでもあり弱点だけどな』

「弱点？」

『分離すると中の精密な部分が露出するからな。そこを狙われたら一瞬で終わりだ』

「そうか……」

そう話していると、分離したキングジョーの一体から光線の様なものが発射された。光線が

発射された場所は大爆発を起こしていた。

「…… 殲滅に良さそうだな」

俺は光線の威力を見てそう呟いた。すると、分離していたキングジョーが俺の元に戻ってきて

元の姿に合体した。

「……苦労さん」

そう言うのと、キングジョーは光の粒子となって消え、スリットの中にメダルとして戻ってきた。

「さてと、俺は迷宮探しと行きますか……」

俺は浮遊を使ってライセンにあると噂されている迷宮を探し始めた。

情報入手と衝撃発言

「まあそう簡単には見つからねえわな……」

日が暮れるまでライセンスを探索していた俺はブルックに戻ってきていた。

ライセンスにある洞窟を色々と探したのだが、何処も途中で行き止まりになるので迷宮と呼ばれる様な場所は一つもなかった。

『あんな広い所、ちまちま探してたら時間はかかるぞ。ここは少し、搜索範囲を絞って探せ』

「(絞ってって…… ああ、そういうこと)」

俺はベリアルが何を言おうとしたのかを察した。そして、俺はギルドに戻り、オバちゃんに

素材の鑑定をしてもらっている間、酒を飲んでいる冒険者に話しかけに行った。

「そこのおっちゃん、少し良いか？」

「ああ……？ って、ワイバーンのボウズ!？」

おっちゃんは俺が話しかけて来たのが意外だったのかもものすごく驚いていた。周りにいた

冒険者も、俺がおっちゃんに急に話しかけていた事に驚いていた。

「ボ、ボウズが俺に何の用だよ……」

「ちよつとばかり話を聞きたいんだよ」

「話？」

「ああ。おっちゃん、ライセンには行ったことあるか？」

「ライセン？ そりゃ、依頼で何度も行ったことはあるが……」

「じゃあ聞くけど、七大迷宮らしき迷宮は見たことあるか？」

「いや、そんなもん見たことねえよ……見てたら俺、こんな所で酒を飲んでねえつての」

そう言うのと、周りで酒を飲んでいた冒険者は大笑いしていた。

「そっか……じゃあ最後に一つ」

俺はここに来る途中で買ったこの世界の地図のライセンのところを開いた。

「おっちゃんが今まで行ったことがあるライセンの場所をペンで塗りつぶしてくれ」

「場所を？ 何のために？」

「搜索範囲を絞るためだよ。あんなただっ広い所、ちまちま探してたら時間と金がかかって

仕方ねえんだよ」

「なるほどねえ……ま、良いぜ」

そう言うと、おっちゃんはライセンの手前の方を塗りつぶした。

「おいお前ら！ 話しは聞いてただろ。ボウズに協力してやれ！」

「えっ……？」

すると、おっちゃんは周りにいた冒険者達にそう言った。

「このボウズはいつか七大迷宮を攻略する男だ！ 今のうちに恩を売っておけば、

俺達の名前もきつと世界中に広がるぞ！」

おっちゃんがそう言うと、他の冒険者達は納得したのか、俺も書かせろと言って

地図を塗りつぶしていった。

「感謝しろよボウズ」

俺が地図が塗りつぶされているのを眺めていると、おっちゃんは俺にそう言ってきた。

「ああ。ありがとなおっちゃん」

「フツ…… 迷宮攻略すんの、楽しみにしてるぞ…… あと、俺の名前はガラッドだ。

迷宮攻略した時は、俺の名前を広めてくれよ？」

「ああ。約束する」

そう話している間に、ライセンの地図の七割が黒いペンで塗りつぶされていた。

「どうやら、残った部分はこれだけだな」

「ああ。アンタらもありがとな。お陰で助かった」

俺はそう言って、開いていた地図を閉じ、ベリアライザーで作る空間に入れた。

「アンタも随分と人気者だね」

すると、後ろからオバちゃんがそう言ってきた。

「人気なのは微妙な気がするけど……」

「そうかい。ほら、今回の分の報酬と素材の査定料だよ」

そう言って、オバちゃんは俺にルタ通貨を渡してきた。

「どうも」

「ま、死なないように気をつけるんだよ。昔、ライセンの七大迷宮を攻略しようとした

冒険者がいたけど行方不明になったからねえ」

「そうか。肝には免じておくよ」

そう言って、俺はギルドから出ていつもの宿に向かった。そして、宿のベッドに寝転がり、

俺はホルダーからキングジョーとベリアル medals を手に取った。

「ベリアル、キングジョーと相性が良いメダルはあるのか？」

『ああ。それも何枚かな』

「そうか……」

『そういえば…… お前に言うのを忘れてたが、この街にメダルの気配が二つほど感じたぞ』

「へえ…… ちよつと待て。お前、今なんて言った？」

俺はベリアルルの唐突の発言を聞きそう言った。

『ああ？ だから、この街にメダルの気配が二つするって言ったんだよ』

「お前…… メダルがある場所がわかるのか？」

『まあな。流石にこの姿だからか、近づかないと正確な場所まではわからねえがな』

「そういう事はもつと早く言え！ 他の人間に持つてかれたらどうすんだ！」

『持つてかれたところで使えねえんだから心配はいらねえ。それに、持つてかれたところまで
ろで

バレずに盗めば良いだけの話だろ』

「他人事みたいに言いやがって……」はあ

俺はベリアルルの呑気そうな様子にため息が出た。

『それと、ライセンとかいう所でも何枚か気配を感じたから回収しておけよ』

ベリアルルはそう言うのと、さっさとホルダーの中に戻っていった。

「(コイツ…… いか絶対ぶん殴る……)」

俺はそんな事を考えながら、キングジョーのメダルをホルダーに戻して眠りについ

た。

迷宮発見

「……それで、一枚はここにあるのか」

朝起きた俺は、ベリアルがブルックでメダルの気配を感じたという場所に来ていた。

『ああ。それも、店の手前の方だ』

「なら、とつとと回収するか……」

そう呟き、俺は店の中に入った。そして、店の手前の方のテーブルを見た。すると、テーブルの上に、一枚のメダルがあった。

「コレか……」

『ほお、エレキングか。なかなか使い勝手が良いのがあったな』

ベリアルは俺の頭の中に直接そう言ってきた。

「(そうなのか?)」

『ああ。コイツは電撃を操る怪獣だ。敵の拘束をするのには便利だろうな』

「(そうか)」

俺はエレキングのメダルを店員に渡して百ルタで買った。

「(安……)」

そんな事を思いながら、俺は店を出た。

「で、もう一枚は？」

『ここから反対側にある店だ』

「めんどくせえな……」

そう呟きながらも、俺は店がある場所に向かって歩き出した。

~~~~~

「エレキングとエースキラーか……」

もう一つの店でメダルを買った俺はライセンスを歩きながらそう呟いた。俺の手の中には

エレキングのメダルと、もう一つの店で買ったエースキラーのメダルがあった。

『これで二体目の融合獣か』

「二体目？」

ベリアルの言葉に俺はそう返した。

『ゴモラ、レッドキングでスカルゴモラになるだろ。その二体を使えばサンダーキラーっていう

融合獣になれるんだよ』

「へえ……」

そう話していると、突然前から魔物が現れた。

「丁度いいところに……こいつらの力、試してみるか」

そう呟いた俺はベリアライザーを取り出しスリットにメダルを入れた。

『ELEKING! ACE-KILLER!』

「行け、エレキング! エースキラー!」

俺はそう叫びトリガーを引くと、人間大サイズのエレキングとエースキラーが現れた。

「奴等を蹴散らせ!」

そう命令すると、二体は魔物に向かっていった。エレキングは口から出す衝撃波と尻尾を

と魔物に巻きつけて電撃を流して魔物を蹴散らし、エースキラーは右手に持ったナイフ

左手の鉤爪で魔物を斬り裂いていた。

「(ゴモラとレッドキングと比べると動きが速いな……その分、二体よりも破壊力は劣るか)」

俺は後ろで二体の動きを観察しながらそう思った。そう観察しているうちに、魔物達は

全て倒されていた。

「戻ってこい」

そう言つてトリガーを引くと、エレキングとエースキラは光になって消滅した。

「(…… ついでに武装を試してみるか)」

そう思つた俺は一度メダルを抜き、アクセスカードをライザーに入れた。

『Mikado Access Granted.』

その音が鳴ると、俺はエースキラのメダルをスリットに入れ、ブレードを音声認識の

ところで止めた

『ACE-KILLER!』

「武装」

そう呟いてトリガーを引いたが、俺の腕は何も変化が起こらなかった。

「不発か……？」

『違う。単純にそいつは武装ができないだけだ』

「武装ができない？」

『全部が全部武装できるわけじゃねえ。できねえ奴も何十体っているぞ』

「そういう事は先に言えよ……」

『聞いてこなかったお前が悪い。後、エレキングは武装できるぞ』  
「……はあ。そりやどうも……」

呆れながらそう言った俺は、エレキングの尻尾を武装してオルクスにある七大迷宮を  
探し始めた。

~~~~~

探し始めて数十時間が経ち、辺りは真つ暗になった。俺は雷の魔法で自分の周りを照
らしながら

周辺にある洞窟を見ていた。

「(こ)もハズレ……全然見つからねえな」

俺はポケットに入れた地図に印を付けながらそう呟いた。

「(て)か、腹も減ってきたし一度帰るか……」

そう思った俺がホルダーからキングジョーのメダルを取ろうとしたその時……

『ミカド、少し止まれ』

突然ベリアルが俺にそう言ってきた。

「何だよ急に」

『……今、微弱だがメダルの気配を感じた。それもかなりの枚数だ』

「何?」

『あっちの方角からだ。ちよつとついて来い』

そう言うと、ベリアルはメダルは浮き上がりメダルの気配を感じたという方向に飛んで行った。

俺はベリアルはメダルについて行くと、ベリアルはメダルはある壁の前で止まっていた。

『この奥だ』

「奥つて…… ただの壁じゃねえか」

『見た目はな。だが、そこをよく見てみる』

「そこ?」

俺はベリアルが言った方向を照らすと、そこにはこう書かれていた。

『おいでませー! ミレディ・ライセンのドキワク大迷宮へ♪』

「……」

『な?』

「いや、『な?』じゃねえよ! 何さりげなく迷宮らしいの見つけてんだ!」

俺はベリアルは言葉にそう言わざるを得なかった。

『俺に聞くな……。だが、メダルがあるのはほぼ確定だな』

「…… まあそうだな……。一先ず、今日のところは引くぞ。食料が何も無い状態で行く

のは

流石にごめんだ』

『その辺はお前の好きにしろ』

ベリアルはそう言ってホルダーに戻って来たので、俺はキングジョーを呼び出してその上に

乗り、ブルツクに戻った。

ライセン大迷宮

「さてと……」

次の日の朝、俺はベリアルが見つけた迷宮らしきものがある壁の前に来ていた。俺は透視を使って壁の方を見ると、壁の奥には謎の空間が広がっていた。

「空間が広がってるのはわかったが入口が見当たらねえ……なら」

俺はベリアライザーにアクセスカードとレッドキングのメダルを入れた。

『Mikado Access Granted.』

『RED KING!』

「武装」

『RED KING! KNUCKLE!』

「オラッ!」

俺はレッドキングの腕を武装すると、目の前にある壁を殴って壁を破壊した。俺は壁の奥に

現れた謎の空間に足を踏み入れた。その瞬間、目の前から矢が数本飛んできた。

「邪魔くせえ……」

俺は腕を振るって、風圧で矢を弾き飛ばした。

「おいベリアル。メダルの反応はするのか？」

『…… ああ。それもそこそこ深いところにある』

「そうか」

俺は辺りを見渡した。辺りには、たった一つだけ道があった。

『で、どうすんだ？ あのだ道に沿って進むのか？』

「普通だったらな……だが、そんなちまちまやんのはめんどくせえ。だから、コイツらで

道を開く」

俺はそう言つて腕を元に戻すと、アクセスカードを抜き、ホルダーから二枚のメダルを

手に取りスリットにメダルを入れた。

『GOMORA! RED KING! KING JOE!』

「行け! ゴモラ! レッドキング! キングジョー!」

俺がトリガーを引くと、二体の怪獣と一体のロボが現れた。

「お前達! そこら辺の壁と床を破壊しろ!」

そう言うと、三体はそれぞれ自分の武器で俺が指示した方向の壁や床を破壊していっ

た。

『おおお、随分と派手にやるじゃねえか』

「利用できるものは利用した方が良いだろ」

『はっ、違いねえ』

俺はベリアルとそう話しながら、ゴモラ達が破壊した道を進んで行った。

~~~~~

「(長い……それに色々と鬱陶しい……)」

ゴモラ達が破壊した道を歩きながら俺はそう思った。この歩いている間に、俺は鉄球やら

ノコギリやら落とし穴といったトラップにあった。そんな中、迷宮内を歩いていたら……

『ミカド、アイツらを止めろ』

「何だよ急に」

『良いから。さっさと止めろ』

「……？ お前ら！ 一回止まれ！」

俺は不思議に思いながらも、三体に止まるように命令した。三体は俺の声を聞くと、大人しくその場で止まった。

「……で、何で急に止まれって言った？」

『メダルの場所が変わりやがった』

「はあ？」

『さつきまで進んでた方向と逆からメダルの反応を感じた』

『んなバカな……他のメダルとかじゃないのか？』

『いや、さつき感じたメダルと同じものだ』

「……まあ、お前がそう言うならそうなんだろうな。お前達！ さつきとは逆方向の壁と

床を破壊しろ！」

俺はベリアルという言葉を信じ、三体にそう命令した。

くくく

「何だこゝは……」

壁やら床やらを破壊していくと、俺達は開けた所に着いた。そこには、ゲームとかで見えるようなゴーレムが大量に並んでいた。すると、突然ゴーレム達の目が光り出した。

「げっ……」

俺は面倒な予感がしてそう呟いた。すると、ゴーレム達は動き出し、俺や三体に向

かって

攻撃を仕掛けてきた。

「最悪だ……」

俺はそんな事を眩きながらも、ゴーレム達の攻撃を避けながらゴーレムを蹴り飛ばしたり

殴り飛ばしたりした。ゴモラ達も自分達の武器でゴーレムを倒していくが、ゴーレムの数は

なかなか減らなかった。

「鬱陶しい……ベリアル！ めんどくせえから俺達で一氣に潰すぞ！」

『ああ』

ベリアルはそう言ったので、俺はゴモラ達を一度戻し、アクセスカードをライザーに入れた。

『Mikado Access Granted.』

「ベリアル！ ゴモラ！ レッドキング！」

俺はホルダーからベリアルのメダルを取り、ライザーのスリットに三枚のメダルを入れた。

『BELIAL! GOMORA! RED KING!』

「三つの闇の力！ いただきます！」

俺は腕を高く掲げてそう叫び、ライザーのトリガーを引いた。すると、俺の周りにベリアル、

ゴモラ、レッドキングの透明な姿が現れ、俺の身体に集まり一つになった。

『SKULL GOMORA！』

そして、俺の姿はベリアル融合獣の一体、"スカルゴモラ"の姿に変わった。

『ゼンイン、マトメテシネ！』

俺は腕を大きく振りかぶって地面を殴った。すると、地面が揺れ、ゴーレム達の周りを

地面から飛び出た巨大な岩の楔が覆った。その楔は俺の周りにも出現し、俺はその楔一本一本に炎を纏わせてゴーレム達がいる場所に向かって投げ飛ばした。すると、楔で

覆った場所は巨大な爆発音や真つ赤な炎に包まれた。俺は楔の中の気配を感じ取り、ゴーレム達の反応が消滅したのを確認すると、楔を全て消滅させた。

『ベリアル、メダルノハンノウハマダオナジカ？』

『ああ』

『ダツタラコノママススムゾ』

『お前の好きにしろ』

そう言われたので、俺は周囲に“スカル超振動波”を放ちながらメダルのある方向に向かった。

## 巨大ゴーレムとベリアル

? side

「な、何なのさアイツ!？」

私は手元にあるアーティファクトを見てそう叫んだ。

私が見ているのは、今日この迷宮に入ってきた冒険者だった。その冒険者はこの迷宮に

入って来た時に謎の腕をしており、私が仕掛けた矢を風圧で吹き飛ばした。

そして、何かしらのアーティファクトらしき物を使ったと思えば、巨大なモンスターを

呼び出して迷宮の中を破壊し始めた。しかも、いやらしい事に私がいる場所に向かつて

床やら壁を破壊していた。終いには、私が迷宮に置いているゴーレム達を

巨大なモンスターに変身して一瞬にして消し炭にしてしまった。

「(あ、あんなの冒険者じゃなくて破壊者じゃん：：魔人族って言ってもおかしくないし……)」

そんな事を考えていると、モンスターとなった冒険者は何かの扉の前で止まっていた。

「(ちよ、ちよつと待つて…… その扉つて……!?)」

そう思った次の瞬間、私がいる部屋の扉が爆発した。そして、そこから現れたのはモンスターとなった冒険者だった。

「(も、もう来たああああ!?)」

~~~~~

ミカド side

スカルゴモラとなった俺は、周囲に“スカル超振動波”を撒き散らしながら迷宮を進んでいた。

そして、俺はある扉の前にいた。

『コノオクカ?』

『ああ。間違いねえ』

『ソウカ』

そう言うのと、俺は“スカル超振動波”で扉を破壊した。俺は扉を破壊した部屋に入ると、

そこには謎の巨大なゴーレムがいた。そのゴーレムは先程までのゴーレムと違い、

相当な魔力を持っていた。そして、その周りには謎の騎士の様なゴーレムが立っていた。

『見たところ、コイツがこの迷宮のボスカ』

『ミタイダナ。ソノマワリノハボスヲマモルヘイツテトコロカ』

そう言いながら、俺は地面を殴り、周りに現れた岩の楔に炎を纏わせて騎士の様なゴーレムと巨大なゴーレムに向かって殴り飛ばした。だか、巨大なゴーレムに向かって

殴り飛ばした岩の楔は、全て騎士のゴーレムによつて防がれた。

「あ、危ないなあ!?! 普通、急に殺そうとする!?!」

『『はあ（ハア）?』』

俺とベリアルは、突然喋り出したゴーレムに向かってそう言った。

『アイツ喋りやがったぞ』

『オイキヨダイゴーレム。オマエガコノメイキユウノボスカ?』

俺は周囲に岩の楔を並べてそう聞いた。

「そ、そんな殺意増し増しで聞かないでくれる!?! いくらミレデイさんでも怖いんだけどー!」

『シルカ。テキナラメツサツスル』

「ひ、人の話し聞く気ないし……何か本格的にムカついてきた……！ ミレディさんが創った迷宮を

めちやくちやにしてくれちゃって！」

『コノメイキュウハオマエガツクツタカ……』

『てことは、アイツがボスなのが確定したな』

俺は岩の楔に炎を纏わせて巨大ゴーレムに向かって殴り飛ばした。だが、その攻撃は周りにいる

騎士のゴーレムに防がれた。

『チツ……ジャマガオオイ』

『ここは戦術を変えろ』

『ワカツテイル』

俺はそう言って、一度スカルゴモラから人間の姿に戻った。そして、ライザーからカードを

抜き、ゴモラ、レッドキング、キングジョーのメダルをスリットに入れた。

『GOMORA！ RED KING！ KING JOE！』

「行け！ ゴモラ！ レッドキング！ キングジョー！」

俺はゴーレムの1、5倍サイズにした三体を呼び出した。

「お前達！ あの雑魚どもを潰せ！」

そう言うと、キングジョーは分離し、分離したパーツにゴモラとレッドキングを乗せて

騎士のゴーレムを破壊し始めた。

『おいミカド。少し俺にも遊ばせろ』

「…… 肉体のダメージは最小限にしろよ」

そう言つて、俺は意識をベリアルと交代した。

くくく

ミレディサイド

三体のモンスターを呼び出した冒険者はモンスター達に私のゴーレムを倒す様に命令していた。

すると、突然冒険者は眼を閉じた。そして、すぐに眼を開いたかと思うと、さつきまでとは

別人の様なオーラを纏っていた。

「おい岩人形。お前がこの迷宮のボスつてなら、俺を楽しませてくれるよなあ！」

『Mikado Access Granted.』

『BELIAL!』

「ハアアアア！」

そう言った冒険者は、謎のアーティファクトを使うと、アーティファクトから溢れ出した

闇の魔力に覆われた。そして、次の瞬間、闇の魔力を振り払って謎の異形が姿を現した。

「な、何なのアイツ……!?!」

その異形は全身真っ黒で、身体の所々に赤い線が入っており、両手は鋭い鉤爪になっていた。

『俺を楽しませろよ…… 岩人形!』

そう叫ぶと、謎の異形は私に向かって飛んできた。

陛下の実力（本気では無い）

『ゼアー！』

「っ!? 嘘でしょー!」

俺は岩人形に殴りかかった。すると、岩人形は腕でガードしたが、腕の装甲はヒビが入った。

『どうしたあ! ボスって割にはそんなもんかあ!』

俺は攻撃を繋げながら、岩人形に反撃の隙を与えなかった。だが…:

「このっ!」

岩人形は突然、周りにあつた岩を動かして俺に攻撃してきた。俺はそれを飛び回って躲し、近くにいたキングジョーのパーツに乗った。

『岩を動かしやがるか…:』

そう考えている間にも、岩人形は俺に向かって岩を飛ばしてきた。

『そんな岩ごとときで、俺を止められると思うなアアア!』

俺は飛んでくる岩を避けたり、破壊したりして岩人形に接近した。そして、俺は腕を大きく

振りかぶって殴ろうとしたが、岩人形は突然真横に移動していった。

『チツ…』

『おいベリアル。あのゴーレム、動きがおかしくないか？』

すると、岩人形の動きを見ていたミカドがそう言ってきた。

『ああ。普通の動きじゃねえし、空気抵抗も無視してやがる』

『てことは魔法か…可能性としては、重力系つてところだな』

ミカドは冷静に分析した結果を話してきた。

『ハッ、だからどうした！あの程度の魔法で俺を止められると思ってるなら、随分と

舐められたもんだなア！』

俺はそう叫ぶと、闇の力を少し解放して身に纏った。

『チヨロチヨロ逃げてんじやねえぞ！岩人形如きがア！』

俺はさつきよりも速度を上げて、岩人形に接近した。

「っ?! 速っ…?!」

岩人形は周辺の岩を落とし、その隙に上空に逃げようとしていた。

『遅えんだよ！』

俺は先程の数倍の速さで岩を躲し、逃げようとしていた岩人形の腕を掴んだ。

「嘘っ?!」

『落ちやがれっ!』

俺はかかと落としを叩き込んで岩人形を地面に叩き落とした。すると、岩人形は落ちていき、

俺がかかと落としを叩き込んだ部分は砕けていた。

「グフツ!」

『(まだまだ力は戻ってねえか……)』

俺は落ちた岩人形を見てそう思った。全盛期であれば、さっきの攻撃で岩人形の鎧は粉々に砕けているはずだった。

『まあ良い…… ついでにコイツもくらつとけ!』

俺は腕に闇の魔力を溜め、右腕を縦に、左腕を横にして十字の形を作った。

『デスシウム光線!』

すると、右腕から闇の魔力を持った巨大な光線が発射された。その光線へ真っ直ぐに岩人形に

向かっていき、岩人形に直撃した。

「う、嘘でしょおおお!?」

その叫び声とともに、俺が光線を放った場所は大爆発を起こした。そして、爆発で起こった煙が

晴れると岩人形はその場から消滅していた。

『チツ……今のが現状での最大出力か……』

『お前の本気、アレよりヤバいのかよ……』

ミカドはどこか呆れた様子でそう言ってきた。

『当たり前だ。あの威力じゃ全盛期の10%も無いわ』

『化け物かよ……いや、化け物だったな。お前は』

『よくわかってるじゃねえか……それよりも、奥の扉が開いたみたいだ』

俺はこの部屋の奥にあった扉の方を見た。

『そろそろお前に身体は返すぞ』

『ああ』

『メダルは全部回収しろよ』

『わかっている』

俺はミカドにそう言って、意識をミカドと交代した。

ミレデイ・ライセン

「お前達、戻って来い！」

俺はベリアルから人間の姿に戻ると、大暴れしていた三体にそう言っただけで戻した。

そして、俺は扉に向かって歩き出し扉の奥に入った。扉の先は一本道で、少し先に光が見えた。

俺はその光に向かって歩くと、俺は謎の部屋に出た。

「(真っ白だな…。それに、ここにあるのは扉と謎の魔法陣だけか…。)」

俺は部屋を観察しながら、ライザーにカードとキングジョーのメダルを入れた。

『Mikado Access Granted.』

『KING JOE!』

「武装」

俺はそう呟いてトリガーを引いた。

『KING JOE! LAUNCHER!』

そして、俺は右腕に装備したペダニウムランチャーを背後に向け、威嚇のつもりで一

発放った。

「そこにいるのはわかっている……大人しく出てこないっていうなら、もう一発撃とうか？」

そう言うと、俺の目の前の壁にある影から黄色いカツパのような物を着た白い顔の何かか

が現れた。

「あ、あの……出てきたから、それを下げてくれない？ この身体を壊されたら本当に

マズイから……」

出てきた何かはビビリながらも俺にそう言ってきた。それを聞き、俺はペダニウムラ
ンチャーの

銃口を下に向けた。

「お前は何者だ？ さっきのデカイゴーレムと声と一緒にだ……」

俺は警戒しながらそう聞いてみた。

「私の名はミレディ・ライセン。この迷宮を創った解放者だよ。それと、さっきのゴーレムは

私が遠隔操作していたものだよ」

「てことは、テメエがこの迷宮のボスカ」

俺はミレディの話しを聞き、ペダニウムランチャーを構えた。

「ちよ、ちよつと待って！ 君はさつき、私のゴーレムを破壊した！ だから、君はこの迷宮を

攻略した事になつてるよ！ それに、この身体の私に戦う力はほとんど無いから！

ここに居るのは君に神代魔法を渡すためだから！」

「神代魔法？」

俺は聞いたことがない言葉に思考が一瞬止まった。

「え……？ もしかして、神代魔法を知らない？」

「ああ」

「じゃ、じゃあ！ エヒトがこの世界の人類を駒としたゲームをやっているって事も……？」

「(……何か聞き捨てならん事が聞こえたな)」

「ミレディ・ライセン、それは一体どういう意味だ？」

「本当に知らないみたいだね……なら仕方ない。迷宮を攻略したご褒美に、ミレディさんが

特別にこの世界の真実を教えてあげよう！」

そうやって、ミレディ・ライセンはこの世界の真実について話し始めた。

くくく

「なるほど…… 大体わかった」

俺はミレディ・ライセンにこの世界の真実を聞かされた。

「つまり、この迷宮や他の七大迷宮を攻略すればその神とやらを殺す神代魔法が貰える」と

「まあ、そういう事になるかな」

「そうか…… だったらその神代魔法とやらを寄越せ。その神とやらはぶっ殺してやる」

「…… 随分とあつさり信じるんだね」

ミレディ・ライセンは意外そうにそう言ってきた。

「これでも人を見る目はあるんでな。お前の目を見れば、嘘じゃない事がわかる」

「…… フフフ。そっか。なら、その魔法陣の上に立って」

ミレディがそう言うので、俺はこの部屋にある謎の魔法陣の上に立った。すると、ミレディは

詠唱を始めた。詠唱を唱えていると魔法陣は光り輝き、俺の頭の中に何かの魔法の構築式が

入ってきた。

「はい！ これで私の神代魔法を君は使えるようになったよ！」

「…… 重力魔法か」

俺は頭の中に入ってきた構築式を整理してそう呟いた。

「おっ！ なかなか鋭いねえ」

「そいつはどうも……。それよりも、いくつか聞きたい事があるが良いか？」

「何かな？」

「これと似たようなメダルはこの部屋にあるのか？」

俺はホルダーからゴモラのメダルを取り出してそう聞いてみた。

「…… あるよ。それに、別に君にあげても構わない。だけど、それには条件があるよ」

「条件？」

「そ！ 君が滅茶苦茶にした私の迷宮を元に戻すのを手伝う事！ それと、君のその力

について

教える事！ それがメダルをあげる条件だよ！」

「つて言ってるが、どうする？」

「えっ？」

ミレディの言葉を聞き、俺はホルダーにいるベリアルに聞こえる声でそう聞いた。

『お前の好きにしろ』

そう言ってベリアルはホルダーの中から飛び出て来た。

「メ、メダルが喋った!？」

「(アイツと同じ反応だな……)」

俺はミレディの反応を見てそんな事を思っていた。

幕間 奈落

帝がゴモラを暴れさせた数日後……

~~~~~

雫 side

「このバカども！ メルドさんの言う通り、さっさと撤退しなさいよ！」

帝君のショーが終わって数日後、私達はオルクス大迷宮にいた。ここには、実戦訓練の

一環として来ていたのだが、あるバカがトラップを発動させたせいで私達は窮地に立たされていた。

「(こんな時に帝君がいたら……！)」

私は目の前にいるモンスター、ベヒモスを見てそう思っていた。そう思っていると、突然私達の前に南雲君が走ってきた。そして、南雲君は天之河の胸ぐらを掴んで必死な

形相で後方の状況を説明していた。そして、その説得が効いたのか、天之河は後方に向かおうとしたのだが、一箇所に固まっていた私達はベヒモスの攻撃の余波を受け

吹き飛ばされた。私は剣を地面に突き刺して風圧に耐えたが、それでもかなりの攻撃の余波を身体に受けた。

「一体どうすれば……」

私は頭をフル回転させたが、これといった方法が思いつかなかつた。すると、南雲君が

メルドさんに何かを言っていた。耳をすませて聞いてみると、どうやら南雲君は一人で

ベヒモスの足止めをしようと saying していた。そして、メルドさんは南雲君の覚悟を聞いて南雲君の策に許可を出した。

「南雲君。その策、私にも手伝わせてくれない？」

許可を出すのを聞いていた私は、気づけば南雲君にそう saying していた。

「八重樫さん？」

「雫!？」

「ベヒモスを引きつけるのは私がやるわ。メルドさん達以外の中だったら、私が一番俊敏が高いわ。攻撃を引きつけて回避するぐらいならまだできるわ」

「で、でも……」

「それに、勇者がああ様子じゃ後方は危険なままよ。ここはメルドさんに後方を頼んだ

方が

生存率は上がるはずよ」

私はそう言いながらも、剣をベヒモスに向けて構えた。

「それに、ここであなたを死なせたら帝君に合わせる顔がないのよ。だから、断られても私はそれを無視するわよ」

「……わかったよ。メルドさん、ここは僕達二人に任せて後方をお願いします！」

そう言つて、私と南雲君は一步前に出た。そして、私はベヒモスの攻撃をギリギリまで

引きつけると、その攻撃をギリギリのところで躲した。

「南雲君！」

「錬成！」

そして、私と入れ替わるように南雲君はベヒモスの角が突き刺さった地面を固めた。そして、

私は脚や腕の筋の部分を斬りつけた。

そこまで深い傷にはならなかったが、それでも少しはダメージが入り血が流れていった。

そして、それがしばらく続くと南雲君が声をかけてきた。

「八重樫さん！ そろそろ退避を！ 僕の魔力も次で尽きる！」  
「わかったわ！」

南雲君の言葉が聞こえた私はベヒモスから距離を取り、南雲君が最後の錬成を発動した瞬間、

南雲君とともに階段のある方に一気に駆け出した。そして、ベヒモスから三十メートル程の

場所に離れた時、突然前方から嫌な気配を感じた。私はその気配の方を見ると、私達に

向かって火球が飛んできた。

「っ！ 南雲君！」

私は咄嗟に南雲君を突き飛ばした。南雲君は火球から回避したが、その代償に私は火球の

衝撃波を受け、さつきまで走っていた道に吹き飛ばされた。私はすぐに立ち上がろうと

したのだが、平衡感覚が狂い、身体に力が入らなかった。

「っ…… 一体誰が……！」

私は階段の方を見ると、とある男が私達の方を見て笑っていた。

「つ！ アイツが……！」

私とその男の顔を見ていたその時……

「八重樫さん！ 逃げて！」

突然南雲君の叫び声が聞こえてきた。だが、その声に気付いた時には既に遅く、ベヒモスの

怒りの一撃が私と南雲君のいる橋を襲った。そして、橋はその強大な一撃で崩壊を始めた。

私は何とか掴める岩などを探したのだが、その岩ですら崩壊していき、私は奈落に落ちていった。

「(ここで、私は死ぬの……?)」

私は奈落に落ちていく時、帝君との思い出が頭の中に思い浮かんできた。

「嫌だ…… まだ、死にたくない……！」

そして、私は地上に手を伸ばしながらこう呟いた。

「助けて……！ 帝君……！」

~~~~~

? side

『……』

『(何故この様な所に人間の娘が……)』

俺はある迷宮の様な所で一人の人間の娘を見つけた。その人間の娘は身体中に傷を負っており、血を流して地面に倒れ伏していた。

『(……既に息絶えているのか)』

そう思いながら娘に近づくと、娘は閉じた瞳から涙を流しながらこう呟いた。

「死にたく、ないよ……」

『……』

『(死にたくないか……仕方あるまい)』

そう思った俺は娘を抱きかかえ、側に落ちていた剣を持って自分が作った住処に向かった。

幕間 弟子入り

「(暖かい……)」

私は身体を包む暖かいものに気づいて目が覚めた。目を開くと、私の身体には掛け布団の様な物がかけられており、背中には敷き布団の様なものが敷かれていた。そして、近くの壁には私の剣が立てかけられていた。

「(い)は……」

『……起きたか、娘』

「っ!?!」

すると、突然声が聞こえてきた。その声が聞こえた方向を見ると、そこには謎の甲冑を纏い、

背中に一本の刀を差した何かが焚き火をしていた。

「だ、誰!?!」

私は起き上がろうとしたのだが、身体に激痛が走って起き上がれなかった。

「っ……!」

『無理に動こうとするな娘。無理に動くとは傷の治りが遅くなるだけだ』

そう言いながら、謎の甲冑は私の方を見た。その甲冑の顔は一言で言い表すのなら怖い
一言だった。

「あ、あなたは……？」

『我が名はザムシャー。ただのしがない宇宙剣豪だ』

「宇宙、剣豪……」

「(もしかして、ベリアルと関係が……?)」

私は宇宙剣豪と聞いてベリアルと関係があるのかと思った。

『我は名を名乗った。娘、貴様の名は?』

すると、ザムシャーさんは私の目を見ながらそう聞いてきた。

「わ、私は八重樫 雫です」

『雫か。良い名だな』

「あ、ありがとうございます……あの、あなたが私をここまで運んでくれたんですか?」

私は名を名乗り、疑問に思った事を聞いた。

『そうだ。道の真ん中で意識を失って倒れていたからな』

「そうですか……助けていただきありがとうございます」

『気にするな。生きる事を諦めぬ人間を見捨てるほど、我も落ちぶれてはいない』

そう言いながら、ザムシャーさんは焚き火に木を入れていた。

『それで、何故お前はあの様な場所で倒れていた。ここはただの人間が来るような場所
ではないぞ』

「その、実は……」

私は自分が別世界からやって来た人間で神の使徒として戦わされている事を話した。

『なるほど……つまりお前は巻き込まれてここに来た』

「はい……あの、私以外に男の子を見ませんでしたか？」

『見ていない。我が見つけたのは、お前一人だ』

「っ……！　そう、ですか……」

「（もしかして南雲君はもう……いえ、それか落ちていない可能性も……）」

私は数少ない希望を持ちながらそう考えた。そして、私は名前を聞いた時に思った事を

聞いてみた。

「あの、ザムシャーさん」

『何だ』

「ベリアルって宇宙人を知っていますか」

そう言った瞬間、ザムシャーさんが纏っていた気配が変わった。

「っ!？」

『……その名をどこで知った』

「そ、その、私の友達がベリアルをを引き継いだって言って……」

『…… 奴の力を引き継いだ、か。面白い事を言う人間だな』

ザムシャーさんはどこか笑った様な表情を浮かべてそう言った。

『それで、そのベリアルをを引き継いだって言う人間はお前の思い人か?』

「…… へっ!？」

私は突然の言葉に変な声が出た。

『お前から見えるオーラ、先程話していた時とは違い美しいオーラをしているぞ。』

その人間は、お前にとって大切な人間なのだな』

「う、うう……」

私はザムシャーさんの言葉を否定できず、顔を真っ赤にするしかできなかつた。

『恥じることはない。大切な人間がいるというのは、時に大きな力に変わる。とある男からの』

受け売りだがな……』

ザムシャーさんは誰かを思い出す様な表情をしてそう言った。

『だが……』

ザムシャーさんは真剣な表情で私を見てきた。

『今のお前では、仮に大きな力になったとしてもベリアル力の力を受け継いだ人間にとつては

あまりにも小さなものだ。それぐらい、今のお前は弱い』

「つ……それは……」

ザムシャーさんの真剣な言葉に、私は何も言い返せなかった。

『それに、今のお前ではこの場所にいる怪物どもにも勝てない。我なら簡単に倒せるが、ずっと一緒にいるほど我も暇ではない』

「……」

『我がお前に提案できるのは二つだ。ここでその人間が助けに来てくれるのを待つか、

我が修行を受けてここから這い上がるか』

「修行……？」

『運が良いことにお前は剣士だろう。剣だけの指導なら我はできる。ただし、命をかけるの

修行だな』

「命を……」

『それほどの覚悟がなければ、その人間には近づけんという事だ。それに、力を受け継いだ時に』

その人間もそれほどの覚悟はあつただろう』

「っ……！」

そう言われ、私は再開した時に帝君に言われた事を思い出した。

「(帝君、覚悟を決めたら連れて行つてくれるつて言つたわよね…… なら、今がその時なんじゃ……)」

私は自分の手を見た。

「(強くないと何も守れない…… このままだと、何もできずに死んで後悔をするだけね……)」

だつたら……)」

私は身体を起こしてザムシャーさんに頭を下げた。

『決めたのか?』

「はい…… お願ひします、私に修行をつけてください」

『…… 良いだろう。ならば我の全力を持って修行をつけてやる。一切の弱音は聞かんぞ』

「はい……！」

こうして、私は一時的にザムシヤーさんの弟子になった。

帰還

迷宮を攻略して三週間が経った。この三週間、俺はミレディの迷宮の復旧作業を手伝い、ようやく今日、その復旧作業が終わり別れの挨拶をしていた。

「いや、ありがとね！ お陰で迷宮はグレードアップしたよ！」

「そいつはどうも。それで、約束のメダルは？」

「はいはい。ちよーつと待っててね」

そう言つてミレディは魔法陣を展開すると、そこからケースの様なものが出てきた。

そのケースには、七枚のメダルが並べられていた。

「メダルはこれで全部だよ」

「そうか」

『(ゴルザにメルバ、超コツヴ、リトラ、パンドン、サドラ、ベムスターか……)』

「(使えるのか?)」

『(まあな)』

俺は脳内でベリアルと話すときメダルをホルダーの中に入れた。

「それと、これもどうぞ」

そうやってミレディは指輪の様な物を投げってきた。俺はそれをキャッチして光にかざした。

「コイツは？」

「この迷宮を攻略したっていう証。失くさないでよ」

「わかった」

俺はそうやって指輪を右手の中指にはめた。

「それじゃあお別れだね。君が進む道とやら、私も楽しみに傍観させてもらうよ」

ミレディはそう言うと、天井に巨大な穴を開いた。

「ああ。世話になった」

俺はそう言って、浮遊を発動させて穴の外に出ると、ブルツクの街に向かって飛んだ。

くくく

ブルツクの街

俺はブルツクの街に着き、ギルドの前にいた。

「(すごい久しぶりな気がするな……)」

そんな事を思いながら、俺はギルドの扉を開き、中に入った。そしてそのままオバちゃんがいる机に向かった。すると、俺の姿を見たオバちゃんは驚いた表情をした。

「ア、アンタ……」

「よっ、オバちゃん。ライセン迷宮、攻略して来た」

そう言つて、俺は指につけた攻略の証である指輪を見せた。それと同時に、ギルド内は

急に静かになった。

「ホ、ホントに攻略して来たのかい？ あのライセン大迷宮を……」

「ああ。いくつか証拠になりそうなものも持つて帰つてきた」

俺はそう言つて、ベリアライザーを起動させてゲートの中にある宝石やら魔石やらを取り出して机に置いた。すると、オバちゃんは宝石の一つを手を取った。

「……な、何て純度だい。こんな宝石、滅多にお目にかかる事ができないよ……」

「そりや七大迷宮とか呼ばれるの危険地帯から取つてきたからな」

「はあく…… 何だか頭が痛くなってきたよ…… これは全部買取で良いのかい？」

「ああ、この宝石以外は全部買取で」

そう言つて俺は蒼い宝石を手を取つてゲートの中に宝石を入れた。

「あいよ。しばらく時間はかかるから酒場でご飯でも食べてな」

「わかった」

〜一時間後〜

「…… 買取は500万コルだね」

「(そんなに高いのかよ……!)」

酒場で色んな冒険者に話しかけられた俺はオバちゃんに呼ばれてそう言われた。

「中央だったらもう少し高いけど、これで良いかい？」

「ああ。十分すぎるぐらいだ」

そう言つて一万コルを500枚、目の前に置かれた俺は480枚をゲートに入れて20枚を

酒場の店主に持っていた。

「これでここにいる冒険者に酒やらを提供してくれ」

「おいおいおい! 良いのかよボウズ!」

すると、冒険者達にライセンの地図を塗りつぶす様に言つてくれたガラッドがそう言つてきた。

「ああ。これは俺からの感謝のしるしだ。ここにいる冒険者達で好きに飲み食いに

使つてくれて構わない」

「…… ハツハツハ! コイツは太っ腹だな! じゃあありがたく飲ませてもらうぜ!」

ガラッドがそう言ったことで、他の冒険者達も次々と酒を頼んでいた。そんな様子を

見ながら俺は……

「この金、何に使おうか……」

俺は急に入った取入の使い道を考えていた。

次なる迷宮へ

ブルツクに戻ってから一ヶ月後、この一ヶ月間で俺は新たに四枚のメダルを手に入れていた。

そして今日、俺はブルツクの街に別れを告げるためにギルドに来ていた。

「よっ、オバちゃん」

「おや、今日は依頼じゃないのかい？」

この一ヶ月、俺がギルドに来た時は必ずと言っていいほど依頼を受けていた。なので、

依頼の紙を持っていない事が意外だったのか不思議そうな表情をしていた。

「ああ。今日にでも街を出て次の迷宮に行こうと思ってるな」

「…… つ！ そうかい…… そりゃ寂しくなるねえ」

「もともと二週間滞在したら行こうと思っただけだな。ガラッドや他のオツさんどもに

色々な依頼に関わってたらこんな時間に時間が経ってた」

「…… アンタがいてギルドの雰囲気も賑やかだったんだけどねえ」

「賑やかというか騒がしいの方があつてると思うがな……」

「ハハハ！ それもそうだね。それで、次の目的地は決まってるのかい？」

「ああ。シユネー雪原にある氷雪洞窟。それが俺の次の目的地だ」

そう言うと、オバちゃんは呆れた様な表情をした。

「魔族がいるって所によく一人で行くもんだね…… ホント、規格外って言葉が似合ってるよ」

「俺にとつては褒め言葉にしか聞こえねえよ」

「はあ、全く……」

そう言いながらオバちゃんは、突然一通の封筒を俺の前に置いた。

「この手紙を持って行きな」

「コイツは？」

「中身は秘密さ。アンタがどつかの街で面倒ごことに巻き込まれた時、ギルドのお偉いさんに

見せな。ちよつとは役に立つからね」

「……？ わかった」

俺は不思議に思いながらも、封筒をゲートの中に入れた。

「さ、それじゃあ行きな…… あんたの旅の無事を祈ってるよ」

「ああ。何から何まで世話になった」

そう言つて、俺はギルドから出て街の入り口に向かった。すると、入り口の所にガラッドや

俺が一緒に依頼を受けたオツさん達がいた。

「よつ、ボウズ」

「ガラッド……それにオツさんども……」

「今日ここを出るんだろ。見送りに来たぜ」

「……わざわざ見送りになんて来なくて良いのに」

「そう言うなよ。ボウズには随分と世話になったからな」

そう言いながら、ガラッドは俺に近づいてきた。

「それに、ボウズに渡す物があるんだよ」

「渡す物？」

「ああ」

ガラッドはそう言うと、一枚のメダルを渡してきた。ガラッドが渡してきたメダルには、
は、

黒い恐竜の様な怪獣が描かれていた。

「っ！これは……」

「ボウズが探してるメダルだろ。偶然見つけて拾ったんだよ」

「そうか…… わざわざありがとな」

「気にすんな…… なぁボウズ」

「何だ？」

「何かあったらいつでもこの街に戻って来い。飯でも奢ってやるからよ」

「…… ああ。ありがとな」

そう言つて、俺はベリアライザーを使いリトラを呼び出した。

「それじゃ、あんた達にも世話になった！」

「おう！ 絶対に迷宮、攻略して来いよ！」

「ああ！」

俺がそう言うと、リトラは飛び上がり南側に向かって飛び始めた。

氷雪洞窟へ

「(ここは真冬の北海道か……)」

ブルツクを旅立って二日後、俺はシュネー雪原の空をファイヤーリトラに乗って、氷雪洞窟[〃]を

探していた。俺とリトラは防御障壁を張っていたため、シュネー雪原の吹雪を全て無効化に

していた。

「おいベリアル。メダルの反応は？」

『もうちよつと待って。あと少してメダルの気配が……』

ベリアルは俺にそう言いながら空中でメダルの姿で浮いていると、ある角度で動きを止めた。

『……見つけた。ミカド、東に三キロだ』

「東か……リトラ！」

俺がリトラの名前を叫ぶと、リトラは東に向かって飛び始めた。

~~~~~

『ミカド、メダルの気配はこの谷の下だ』

東に三キロほど進むと、何やら大きめの谷があった。

「下か。だったら… リトラ！ ご苦労さん」

そう言つて、俺はリトラをメダルに戻し、そのまま谷の方に飛び降りた。そして、谷底の

地面が見えると、重力魔法を使ってゆっくり地面に降り立った。

「さてさてさーで、迷宮の入り口は…」

俺は周囲を見渡すと、右側から強力な魔力を感じ取った。

「あっちか」

俺はその強力な魔力の方に向かって歩き出した。そして、しばらく歩くと行き止まりの

先に洞窟の様なものが見えた。

「(あそこだな)」

そう思つて進もうと思つたのだが、その洞窟の方からモンスターがこちらに向かってくる気配を

感じた。

「(モンスターか…)」

俺は腰に装備しているベリアライザーを手に取り、ホルダーからメダルを取ろうとした。

「(どいつで行こうか……)」

そう考えながらメダルを見てみると、ガラッドから貰ったメダルが目に残った。

「(そーいや、この怪獣は名前を知らねえな……)」

「ベリアル、コイツの名前は？」

『ああ…… そいつは“ゼットン”。今お前が持つてるメダルの中では最強格の怪獣だ。』

まあ俺には及ばないがな』

「へえ…… 最強か。面白そうだ」

そう言つて、俺はゼットンのメダルをスリットに入れた。

『ZETTON!』

「行け、ゼットン！」

俺がそう叫びトリガーを引くと、俺の前に黒いカミキリムシを彷彿させる怪獣が現れた。

「ゼットン！ 前からくるモンスターを蹴散らせ！」

『ピポピポピポ。ゼットン』

すると、ゼットンは鳴き声をあげると腕を胸の前に持つて行き、巨大な火球を作り出

した。

そして、その火球を前からくるモンスターに向かって放った。

その火球はモンスターがいる付近に落ちると、大爆発を起こし、周りの氷や氷の床を消滅させていた。

「……マジか」

俺は想像していたよりも威力のある一撃に言葉を失った。

『だから言っただろ。最強格だつて』

「これは調整必須だな……」

俺はそう呟くとゼットンを一度メダルに戻し、洞窟の中に入っていった。

くくく

洞窟内はまるでミラーハウスの様だった。

「にしても、随分と死体が多いな」

俺は周りの壁に埋まっている人間や魔族らしきものを見てそう言った。

『そりゃあんな装備でこの寒さをしのぐのは無理だろう。お前みたいに常に自分の周りに』

結界を張れたら話しは変わるがな』

「そうだな」

俺はベリアルがメダルを感じる方向に歩きながらも、周囲を見渡していた。そして、十字路の

真ん中に着いた時、俺は足を止めた。

「……ベリアル」

『……ああ。四方からか』

俺はベリアライザーを持ち、ホルダーからメダルを四枚手に取り三枚をスリットに入れた。

『ZETTON！ PANDON！ BIRDON！』

俺は三枚のメダルをスキャンすると、一度トリガーを引き、再びメダルをスリットに入れた。

『VEROKRON！』

「行け、お前達！」

俺はトリガーを引き、ゼットンを進捗方向に、パンドンとバードンを左右に、ベロクロンを

さつきまで歩いてきた方向に召喚した。

「パンドン！ ベロクロン！ バードン！ 敵を焼き尽くせ！ ゼットンは前進しながら

ら全てを

焼き尽くせ！」

そう叫んだ瞬間、俺の周りは炎と爆発音に包まれた。その間に、俺はゼットンが攻撃を

放つ方向に走り出した。ゼットンの炎は地面に着弾すると、モンスター達を炎で包んでいた。俺はその燃えているモンスター達を踏み台にしながら先に進み続けた。すると、俺は広い空間に出た。

「……何だここは」

俺がそう呟いた瞬間、突然上空から何かが接近する気配を感じた。俺が上空を見ると、

上空からは氷のイーグルの様なものが俺に突進しようとしていた。だが、氷のイーグルは

俺に突進する前に俺が張った結界によって粉々に砕け散った。しかし……

『おいおい、随分と大所帯だな』

上空には三桁を超えるほどの氷のイーグルが、地面には氷の狼達が、一体の巨大な氷の

亀が現れた。

「めんどくせえな……ベリアル、一気に燃やすぞ」

『はいよ』

そう言うのと、俺の目の前にアクセスカードが現れた。

『Mikado Access Granted.』

「戻って来い、ゼットン！」

俺はそう叫び、ゼットンをメダルに戻してホルダーからベリアルとベムスターのメダルを

手に取りスリットに入れた。

『BELIAL! ZETTON! BEMSTAR!』

「三つの闇の力！ いただくぞ！」

そう叫んで、俺はライザーのトリガーを引いた。すると、俺の周りに透明なベリアルと

ゼットンとベムスターの姿が現れ、俺の身体に集まり一つになった。

『BEMZADE!』

そして、俺の姿は“ベムゼード”に変わった。

『モエツキルガイイ!』

俺は一兆度の火球を放ちながら、左腕で接近してくるモンスターやモンスターの攻撃を吸収していた。そうしている間に、俺の身体の中に大量の魔力が溜まった。

『ミカド、溜まった魔力を全部あのデカブツにぶつけてやれ』

『イワレナクテモ!』

そう言つて、俺は右腕を巨大な氷の亀に照準を合わせた。

『クラエ、トリリオンインフェルノ!』

すると、俺の右腕からさつきまで吸収していたモンスター達の魔力が塊になった物が現れ、

その塊に一兆度の火球をぶつけて氷の亀に向かって飛ばした。その巨大な炎の塊は氷の亀に

当たると、この空間全てを巻き込んだ大爆発を起こした。俺は自分の周りにゼットンバリアを

張っていたため爆発には巻き込まれなかったが、この空間はどこもかしこも穴だらけに

なっていた。そして、周辺にいたモンスターも全て消滅していた。

『全部消えたみたいだな』

『アア』

俺はそう言いながら変身を解除し、パンドンとバードンとベロクロンを自分の元に呼び戻して、メダルをホルダーの中にしまった。

「さて、さっさと先に進むか。ベリアル、道案内は頼むぞ」  
『はいよ』

俺はベリアルにそう言って、迷宮の奥に向かって歩き出した。

## 氷の迷宮

迷宮を進んで行くと、俺は巨大な迷路の様な場所に出た。

「広っ……」

『どうすんだ？ スカルゴモラかベムゼードで道を作るか？』

「いや、ここは大人しく迷路を進んだ方が良さそうだ。あれ見ろよ」

そう言いながら、俺は近くの氷の壁を指差した。俺が指差した先にある氷の壁には何かに殴りかかろうとした魔人族が数十人いた。

『……なるほど。壁をぶっ壊そうとすると氷の中に閉じ込められるか』

「みたいだな。一々氷の中に閉じ込められるのも面倒だ。ここは大人しく行く方が時間短縮になるし、魔力の節約にもなる」

『そうか。ならさっさと抜けるぞ』

「ああ」

そう言っつて、おれはベリアルが感じるメダルの気配を頼りにして迷路を進んだ。

そして、ある程度進んだ時……

「「グオオオオオー！」」

突然壁から鬼のような形をした氷の像を飛び出してきた。

「……ウゼエ。闇の雷」

俺がそう呟いて氷の像に手を向けると、氷の像を全て包むほどの巨大な黒い雷が氷の像に降り注いだ。雷が当たった氷の像は一瞬にして消滅し、氷の像がいた所には何かが焦げたような跡が残っていた。

「邪魔くさい毘だな……」

そんな事を呟いた瞬間、今度は上の天井から氷の鳥が俺に向かって突っ込んできた。

だが、突っ込んできた鳥達は俺が自分の周りに張っていた結界に当たった瞬間、粉々に砕け散っていった。

『脆い連中だな』

「邪魔くさいから走り抜けるか……」

『好きにしろ』

くくく

迷路の中を一気に走り抜けた俺はある巨大な扉の前にいた。

「……」

『無駄にでかい扉だな』

「ああ」

そう呟きながら、俺はベリアライザーを手に取った。

『Mikado Access Granted.』

『RED KING!』

「武装」

『RED KING! KNUCKLE!』

俺は腕にレッドキングナックルを武装させると、本気の力で扉を殴った。

扉は一瞬にして砕け散ったのだが、砕け散った瞬間扉は元通りに戻ってしまった。

「ダメか……」

『どうするんだ?』

「……」

俺は腕を戻して扉に近づくと、扉に何かを嵌め込めるような窪みが四つあった。

「大人しく嵌め込める物を探すか……」

そう呟き、俺はベリアライザーにメダルをセットした。

『ZETTON! PANDON! RED KING!』

「行け、ゼットン、パンドン、レッドキング」

俺は本来のサイズの三体召喚すると、再びメダルを三枚セットした。

『KING JOE! ACE—KILLER! VEROKRON!』

「お前達も行け、キングシヨ、エースキラ、ベムクロン」

そう言うのと、新たに三体の怪獣が俺の前に現れた。

「お前達、この窪みに嵌め込めるような物を探してこい」

すると、六体はそれぞれ鳴き声をあげて近くの通路を歩いて行った。

「……俺も行くか」

そう呟き、俺は六体が行かなかった通路に向かって歩き出した。

~~~~~

通路をしばらく歩くと、突然周囲の冷気の気配が変わった。

「……」

俺は違和感を感じ足を止めると、突然歩いて来た道が氷の壁で塞がれた。そして、

目の前の氷の壁から巨大な氷のマンモスの様なものが現れた。

「ちよつとは強そうなのもいるんだな」

『みたいだな。どうする？ 俺がやろうか？』

「いや、今回は魔法だけでどうにかしてみよう」

俺はベリアルからの提案を断り、地面に手をついた。

「影の鎖シャドウ・チェイン」

そう呟くと、氷のマンモスの影から無数の鎖が飛び出し氷のマンモスの身体を縛つ

た。

「ダークサンダーバースト」

そう言つて氷のマンモスに手を向けると、俺の目の前に魔法陣が現れ、

その魔法陣から黒い稲妻が現れ氷のマンモスに直撃した。黒い稲妻は氷のマンモスを

包み込み、そこにいた氷のマンモスを粉々に砕いていた。そして、砕け散った氷のマンモスがいた所には宝玉のような物が落ちていた。

「……こいつか鍵か」

俺は落ちていた赤い宝玉を拾つて光に当てた。

「(あと三つ……先に戻つて待つておくか)」

そう思い、俺は来た道に向かって歩き出した。

俺とオレ

扉の前に戻ってきて少しすると、六体の怪獣達が俺の元に戻ってきた。

怪獣達の手には俺と同じ形の宝玉を持っていた。そしてその宝玉を地面に置くと、怪獣達はメダルとなって俺の手元に戻ってきた。

「お疲れさん」

俺はメダルに向かってそう言うのと、ホルダーに入れて地面に置かれた宝玉を拾って扉の窪みに嵌めた。すると、扉は勝手に開いていった。

『さて、ミレディの迷宮のことを考えたらそろそろゴールが見えそうだな』

「ああ。だが、もう一つぐらい何かありそうだな」

そう話しながら、俺は扉の向こうに進んでいった。

~~~~~

十五分後

『見たところ、コイツが最後っぽいな』

「ああ」

道を進み続け、時折現れた氷のゴーレムを潰した俺達は謎の光の門の前にいた。

『……この先、何かいるな』

「何か？」

『ああ。どうも変な気配だが……』

「……そうか。まあ、ここまで来たんだ。何がしようと思っただけだ」

『そいつはそうだ』

そう言っつて、俺は謎の光の門に足を踏み入れた。

光の門の先はミラーハウスのようなもので、四方八方に俺の姿が映っていた。

「道はその一本だけか……」

『みたいだな。それに、変な気配を感じるのはその先だ』

「わかった」

俺はそう言っつて、警戒しながら一本道を進んだ。すると、俺達は謎の氷柱がある部屋に着いた。

「……ベリアル」

『ああ。そこにいる奴、隠れてないで出て来い』

部屋に入った瞬間、謎の気配を感じた俺はベリアライザーを手に握りベリアルにそう言った。

すると、ベリアルは部屋全体に聞こえるぐらいの声でそう言った。

『… 気づかれたか。まあ、それもそうか』

すると、氷柱からそのような声が聞こえてきた。そして、氷柱から俺が現れた。

「っ！ お前、何者だ」

『オレはお前だ、月無 帝。正確に言えば、お前が目を逸らしている部分が形になったと

言うべきだな』

『なるほど… 変な気配の正体はお前か』

『その通りだ』

そう言いながら、偽物のオレは氷柱の近くに座った。

『さて、本来なら迷宮のルール通りオレはお前と戦わなければいけないんだが… わざ

わざ

負ける戦いに挑むほどオレは馬鹿じゃない』

「… なら、大人しく通してくれるのか？」

『そうしたいが、それじゃあつまらない。だからまあ、お前には一つ質問に答えてもらい

たい』

「質問だと？」

『ああ。お前が、唯一目を逸らしていることにな』

そう言って、オレは俺に向かってこう言ってきた。

『お前、雫のこと好きだろ?』

「つ……!」

『お前は過去を受け入れ、己の負の部分を認めて未来に進んでいる。だが、何故かお前は  
その事についてだけはずっと目を逸らしている。何故だ?』

「…… 答えなくても、お前はわかってるだろ?」

『ああ。だが、オレはお前の口から聞きたいんだよ』

「…… 嫌な奴だ」チツ

『そう言うが、オレはお前だぜ?』

笑いながらそう言ってきたオレに対して、俺は舌打ちをした。そして……

「八重樫が俺のことを好いてくれているのはわかっている。それに、俺だって八重樫の  
ことは

一人の女として好きだ。だが、人を殺した俺が八重樫の隣にいていいのか?」

『……』

「俺が人を殺した事を八重樫は知らない。だから今はこうして接してくれているが、も  
し

この事を八重樫が知ったらどうだ? きつと八重樫は俺から離れていくだろ。だか  
らずっと

目を逸らしているんだよ。そうすれば、俺のことが八重樫にはバレずに済むからな……」

『……随分と弱気なことだ。そんな俺に、一つだけアドバイスをしてやるよ』

そう言つて、オレは真剣な表情でこう言つてきた。

『雫の事、あんまり舐めるんじゃないぞ。アイツは、ああ見えて誰よりも強い女だ。それに、

それを知つたところでアイツが離れていくかはわからねえだろ。最初から諦めんな』

「……勝手なことを言つてくれる」

『それがオレだからな……ま、ここから先を決めるのはお前だ』

そう言うと、オレの姿はどんどん透明になつていった。

『精々後悔すんなよ俺。お前の決断、楽しみにさせてもらうぜ』

その言葉を最後に、オレは姿を消した。すると、部屋にあつた氷柱が割れ扉が現れた。

「……」

『ミカド』

「…… ああ」

俺はオレ自身に言われた言葉を考えながらも扉の方に歩を進めた。

## 幕間 覚悟と別れ

「はあっ！」

『…… ふむ。良い太刀筋になったな零』

「ありがとうございます、師匠」

私がザムシャーさんの弟子になり約二ヶ月が経とうとしていた。ザムシャーさんの修業は

私が思っていた修行の何百倍も厳しく、この二ヶ月間で私の心は何百回と折れそうになった。

だが、そのたびに帝君の思い出し何とかここまでやってこれた。そのお陰で、私とステータスと

技能はとんでもない事になっていた。

『…… これなら、最後の修業をつけても良いな』

「っ！ 最後の修業ですか？」

『…… ああ』

そう言った瞬間、私が修行の間に手に入れた技能の一つ、”先読”が発動し頭の中に

私に向かつて

ザムシャーさんが斬撃を放つ未来が見えた。私は咄嗟に刀を抜刀して斬撃が来る方向に斬撃を

放つて斬撃を打ち消した。

「……一体、何の真似ですか」

『言っただろう。最後の修業だ雫……この我を殺してみろ』

「っー」

私はザムシャーさんの言葉に言葉を失った。

『お前が足りないもの……それは人を殺す事に迷いを感じないという事だ。この事に迷いが

あれば、お前はすぐに死ぬだろう。だから、我自身の存在をかけてお前に足りないものを

埋めてやる』

そう言いながら、ザムシャーさんは接近して刀を振り下ろしてきた。咄嗟に私は刀で受け止めたが、壁まで蹴り飛ばされてしまった。

「ぐっ……！」

『悪いが……我も殺す気で行くぞ』

ザムシャーさんはそう言って一瞬で近づいてくると、連撃を放ってきた。

「……やるしかない」

そう思い、私は連撃を躲して態勢を整え刀を構えた。

『……それで良い』

「……行きます！」

そこからは刀と刀のぶつかり合いだった。私もザムシャーさんも一瞬の隙を狙いながら

刀をぶつけ合っていた。そして、先に動いたのはザムシャーさんだった。

『星斬丸 閃』

「っ……」

咄嗟に躲したのだが、私の頬からは少し血が流れた。

『星斬丸 乱』

「（この技……あの隙間を切り開けば！）」

私は飛んでくる無数の斬撃を見てそう思い、隙間を目掛けて走り出した。その途中、飛んできた斬撃は全て打ち消し、私は小さな隙間を作り出した。そして、その中を抜けて

ザムシャーさんの懐に入り込み一撃お見舞いした。

『っ！……やるな』

そう言いながら、ザムシャーさんは刀を逆手に持ち直して構えをとった。

「あの構えは……！」

『これならどうだ……？ 星斬丸 奥義惑星断！』

そう叫びながら刀を振ると、地面を抉りながら巨大な斬撃が私に向かって放たれた。

「避けることはできる……でも、それじゃあ何も変わらない。だったら……！」

私はそう思いながら刀を納刀して、居合の構えをとった。

「私の……私だけの技で、あなたを倒す！」

「劍技 彼岸花—絶—！」

私はそう叫び、刀を抜き斬撃に向かって赤い斬撃を放った。赤い斬撃は惑星断を弾き

飛ばし

そのままザムシャーさんに直撃して吹き飛ばした。

『がはっ……!?!』

「(っ……マズい……今の一撃で刀に負荷がかかり過ぎた……)」

私は自分の持っている刀にひびが入っているのがわかった。そんな事を考えている

間に、

ザムシャーさんはふらつきながらも立ち上がった。

「っ……」

『ここまで強くなったか…… 見事だ』

そう言いながら、ザムシャーさんは刀を構えた。

『雫。これが、私の最後の技だ。この技を打ち破り、我を超えてみせろ！』

「……はい！」

『行くぞ！ 星斬丸秘奥義 銀河断！』

「劍技 彼岸花—滅—！」

くくくく

『…… 見事だ』

勝ったのは私だった。そして、私の技はザムシャーさんの技を打ち破りザムシャーさんの  
鎧を破壊していた。

「ザムシャーさん……」

ザムシャーさんの身体は、何かの光に包まれて身体が透けていた。

『良いか雫。今、お前の手の中にある感覚を忘れるな。その感覚を忘れれば、それはただ  
の  
異常者だ』

「…… はい」

『なら良い…… 少し手を出せ』

そう言われ、私は手を出すとザムシャーさんは私に星斬丸という刀と一枚の青い着物を渡してきた。

渡してきた。

「これは……」

『我からの餞別だ……。見失うなよ、お前自身が信じる道を』

「っ、はいー」

『…… そろそろ限界か。ではな、雫。お前の旅路に、幸多からんことを』

そう言つて、ザムシャーさんは光の粒子にとなつて消えた。

「…… ありがとうございます、師匠」

私はザムシャーさんがいた場所に一礼した。そして、私は星斬丸を腰に差し、小さいが

ザムシャーさんの墓を建てて、変な気配を感じた方へ歩き出した。

「……は……」

着いた場所は、人が住めそうな隠れ家みたいな所だった。そこには、お風呂場やキッチン、

大量の本が揃っていた。

「(人や魔法の気配もない……取り敢えず、一度お風呂に入って今後の動きを……)」

そう思い、私は本棚から何冊かの本を取り出してお風呂場に向かった。

→十数分後→

「なるほどね……」

お風呂に入りながら本を読んだ私は、着物に着替えてそう呟いた。本にはこの世界の真実が書かれていた。

「(一先ず、七大迷宮を攻略してエヒトつてのを殺せば良さそうね)」

そう思いながら本を閉じ、私はこの隠れ家の中を歩き回った。すると、魔法陣が光っている

部屋を見つけた。

「(何かしら、この部屋……って、アレは!)」

私は魔法陣に興味を示すより、別の物に興味に向かった。それは、帝君が持っていたメダルと

似たような物だった。

「(これって、帝君が持ってた……)」

落ちていたメダルは六枚で、それぞれ別々の絵が描かれていた。

「きつと、帝君が必要よね」

そう思い、私はメダルを懐に入れて辺りを見渡した。

「(出れそうな所は無いか……なら……)」

私は自力でここから出ようと思ひ、星斬丸を抜いて逆手に持った。

「お借りします……星斬丸 奥義惑星断！」

私はそう叫んで、天井に向かって十字型の惑星断を放った。すると、惑星断は天井を貫き、

地上に繋がる巨大な穴が形成された。

「さて、使えそうなものを持って出ましようか」

そう呟き、私は隠れ家から地図や小さな鉱石を袋に入れてここから脱出した。

## 幕間 ブルック

「地図を見る感じ、ここがブルックね……」

そう言いながら、私はある町の前にいた。

「おーい嬢ちゃん。町に入ろうとしてるのか？」

すると、町の門番のような人が私にそう聞いてきた。

「え、ええ……」

「そうかい。んじや、ステータスプレートを見せてくれるか？」

「わかったわ」

そう言ってプレートを見せると、門番のような人は目を見開いて驚いた。

「こいつはマジか……！ あのボウズと良い勝負だな……」

「ボウズ……？」

「あ、ああ気にしなくても大丈夫だ！」

そう言いながら、私にプレートを返してきた。

「取り敢えず、町の事を知りたいなら町の中心にあるギルドに行きな。簡単な地図をくれるはずだ」

「そうですか。ありがとうございます」

私は門番の人にそう言つて、町の中に入った。そして、言われた通りギルドと呼ばれる場所の前まで向かった。

「( )かしら…。」

そう呟きながら、私は建物の中に入った。中は意外と綺麗で、受付のような所や、居酒屋の

ような所があった。そして、お酒を飲んでいる冒険者の人達は入ってきた私をじっと見ていた。

「(場違い感がすごい…。)」

そう思いながらも、私は受付の様な場所まで歩いていった。そして、私はこの中で一番偉そうな

女の人に声をかけた。

「あの、すみません」

「おや、女の子が一人でどうしたんだい？」

「( )でこの町の地図を貰えると聞いたのですが…。」

「地図かい？　じゃあこれだね」

女の人はそう言いながら手書きの地図を渡してくれた。

「ありがとうございます」

私は地図を受け取ってこの町にある物を確認した。そして、私は一つ疑問に思った事を聞いた。

「あの、こういう物つてこの町だったらどこで売れますか？」

そう言いながら、私は隠れ家の様な場所で拾った鉱石をテーブルに出した。すると、女の人の

目が変わった。

「これは……アンタ、これを何処で？」

「えっと……オルクス大迷宮って言う所からです」

そう言った瞬間、後ろの方でお皿や瓶が割れる音が聞こえた。

「オルクス大迷宮ね……まさか、こんな短期間に二人も七大迷宮を攻略する人間が現れるのは

予想外もいところだね……」

女の人はそう言いながらため息をついていた。

「他に七大迷宮を攻略した人がいたんですか？」

「ああ。一ヶ月前ぐらいに若い男が一人でライセン大迷宮を攻略したんだよ」

「(それってもしかして……!)」

「あの! その男の人って帝って名前でしたか!」

「知ってるのかい?」

「はい! それで、彼は今どこに……!」

「あの子なら、数日前に氷雪洞窟に行くって町を出ちまったよ」

「つ……! それ、そうですか……」

女の人の言葉を聞いて、私は内心シヨックを受けた。

「ま、そんなにシヨックを受けなさんな。あの子の事だ、そのうちひよっこりこの町に帰ってくるかもしれないよ」

「…… そうですか」

「…… そうだね。どうしても行方が知りたいなら占ってあげようか?」

そう言いながら、女の人は水晶の玉を取り出した。

「占い、ですか?」

「そ。意外と当たるんだよ? お代は鉱石を買い取ってからでも良いかい?」

「あ…… じゃあ、お願いします」

「あいよ。冒険者登録もしとくかい? 買い取り金額が上がるよ」

「お願いします」

「じゃ、ステータスプレートを出しておいておくれ」

そう言われ、私はテーブルにステータスプレートを置いた。すると、女の人は驚いた表情を

浮かべたかと思うとため息をつき、私のステータスプレートに何かしていた。そして、

鉱石を鑑定すると、私の目の前に一万ルタを三十枚、千ルタを四枚置いた。

「冒険者登録と占い料金を差し引いて三十万四千ルタだよ」

「ありがとうございます」

「じゃ、占うからそこに座っておくれ」

「はい」

私は女の人の前に座った。

「じゃ、水晶の上に手を翳して探したい人のことを想像して遅れ」

「わかりました……」

「(帝君……)」

そうしていると、女の人も水晶に両手を翳していた。

「……見えるのは吹雪だね。だけど、見る感じ空を飛んで動いてるね」

「吹雪ですか……？」

「そうだね。かなり強い吹雪だからどこに向かつてるかはちよつと時間をもらわないとわからないね」

「そうですか……」

「ま、ちよつと時間つぶしでもしてきな。町には来たばつかなんだろう？」

「はい……」

「だったら町を観光するなり依頼に行つてみると良いよ。依頼を受けるならそのボードの

紙を持ってきな」

「わかりました」

そう言つて、私は依頼の紙が貼られているボードを見に行つた。すると、近くにいた男の人が

私に話しかけてきた。

「嬢ちゃん、依頼を受けるのか？」

「え、ええ。でもどれを受けようか……」

「そうか。だったらこれはどうだ？ 嬢ちゃんが探してるボウズもこれを受けてたぞ」

そう言つて、男の人は一枚の紙を渡してきた。

「デスリザードですか……」

「ああ。報酬金も良いからおススメだぞ」

「そうですか…… ありがとうございます」

そう言つて、私は依頼の紙を渡しライセン大峽谷に向かつて走り出した。

~~~~~

ライセン大峽谷

「……」

ライセン大峽谷に來た私は開けた所を目をつぶつて周囲の音を聞いていた。

「(…… 來た)」

そして、私は左から走ってくるモンスターの気配を感じて刀を抜いた。その瞬間、刀からは

三つの斬撃が飛び、私の方に走ってきていたモンスターの首は飛んだ。

「ふう…… これで目標は討伐完了ね」

そう呟きながら私は刀を鞘に納めて転がっているデスリザードを紐で縛つた。

「(ザムシャーさんに教えてもらった縛り技がこんな所で役立つなんて……)」

そう思いながら、デスリザードを引きずつて町に戻ろうと思つた時、上空から何かの鳴き声が

聞こえた。上を見ると、上空に三体ほどの銀色の龍の様なモンスターがこちらを見て

いた。

「あのモンスター……デスリザードを食べるのが目的ね」

私は先読でデスリザードの動きを予測できた。

「悪いけど、渡すわけにいかないわよ」

そう呟き、私は龍の様なモンスターに向かって斬撃を放った。すると、一体は真つ二つになって

地面に落ちてきた。それを見てか、残りの二体は私に向かってきた。

「……遅い」

私は居合の構えを取り、二体が目の前に来た瞬間剣を抜き真つ二つに両断した。

「……荷物は増えたけど、これで終わりね」

そう呟き、私は三体のモンスターを縛って倒したモンスターを引き摺りながら町に戻った。

幕間 一時の休息とフューレンへ

「あの、すいません」

町に戻ってきた私はギルドに入りさつき話した女の人に声をかけた。

「おや、もう帰って来たのかい」

「はい。あの、ここってモンスターの素材も買い取ってもらえますか？」

「ああ。買い取れるよ」

「あの、じゃあ買い取りをお願いしても良いですか？」

「あいよ。で、素材は？」

「外にあります」

そう言つて外に出てモンスターの死体を見ると、女の人はため息をついた。

「ワイバーンを三体も……全く、最近の若い冒険者は凄いな」

「あ、ありがとうございます……？」

「取り敢えず、鑑定に時間がかかるから中で食事でも取っておきな」

「はい」

そう言われ、私はギルドの中に入り魚料理とサラダ的な物を注文した。

「久しぶりに魚と野菜は食べるわね……」

修行中、私が食べていたのはほとんどが魔物の肉で、肉以外の物を食べるのは随分と久しぶりだった。

「おつ、随分といい食いっぷりだな」

すると、背中に大剣を背負った男の人がそう言ってきた。

「ど、どうも……」

「ああ、そんなに警戒しなくても大丈夫だ。嬢ちゃんに手を出すような真似はしねえよ。少し話しをしてみたいと思っただけだ」

男の人は私が警戒しているのに気づいてそう言ってきた。

「は、はあ……」

「まあ食いながら適当に聞いてくれたら良いからよ……で、嬢ちゃんはボウズとどういう

関係だ？ 恋人か？」

そう言われた瞬間、私の手は止まった。

「……まだ、恋人ではないです。今は、ただの友達といったところですよ」

「へえ……なるほどな。確かにボウズは良い男だな。強いし頭は回る。それに何より周りを

よく見てやがる。あれに惚れないほうがおかしいか。ま、少し近寄りが見たい雰囲気は漂ってるがな」

「それは確かに…。」

男の人が笑いながら言った事に、私は同意してそう言った。

「だよな。ま、その分面白いけどな」

そう話していると、受付の女の人が私を呼んだ。

「すみません。もう行きますね」

「ああ。急に話しかけて悪かったな嬢ちゃん。ポウズにあつたらよろしく言つといてくれ」

男の人は手を振りながらそう言ってきた。私も一礼して女の人のもとに向かった。

~~~~~

「買い取り金額は全部でこれぐらいだね」

「わかりました」

そう言いながら、私は買い取り金額分のルタを受け取った。

「それと、あの子の居場所がわかったよ」

「つ!? それ、本当ですか!」

女の人の言葉に私は驚いて前のめりになった。

「ああ」

女の人はそう言うのと水晶を私の前に置いた。

「場所の風景を見る感じ、あの子がいるのは中立商業都市のフューレンだね」

「フューレン……」

女の人は世界地図の様な物を取り出してある場所を指で丸を書いた。

「場所はここになるね。一時間後にフューレン行きの馬車は出るけど、どうする？」

「馬車だとどれくらいかかりますか？」

「そうだね……早くて六日ぐらいだね」

「（走っていった方が断然早いわね……）」

「そうですか…… だったら今から走って行きます。短い間でしたがお世話になりました」

た」

そう言って、ギルドから出ようとした時……

「ちよいと待ちな」

女の人に私は呼び止められた。

「何ですか？」

「この手紙を持って行きな。何か面倒ごとが起きたらギルドの職員に渡しな。アンタの力に」

なれると思うからね」

「っ！ ありがとうございます」

「頑張んなよ」

私は女の人に一礼してフューレンの方向に向かって走り出した。

## 迷子と再会

「……着いたか」

氷雪洞窟のメダルと神代魔法を手に入れた俺は大陸一の商業都市と言われているフューレンにいた。

「ベリアル、気配は？」

『そうだな…… あ……？』

「どうした？」

『動いてやがるな…… メダルが一枚』

「メダルが？ つてことは誰かが持つてるって事か？」

メダルの気配を探していたベリアルに俺はそう聞いた。

『ああ。それに…… 動いてるメダルがあるのはこの下だ』

「下つて…… 下水道の方か」

『ああ。どっかに流される前に回収しろ』

「はいはい……」

そう言つて、俺は頭の中にベリアルに送られたメダルの気配がある場所に向かった。

く下水道く

「マジか……」

下水道にやってきた俺の目に入ったのは、幼い小さな女の子だった。ただ、見た感じ人間の

女の子ではなかった。

「ベリアル、空間に死んでない生物を入れても問題なかったよな？」

『ああ』

「そうか」

そう聞いて、俺はベリアライザーでゲートを作り、その中に女の子を入れた。そして、地上に

上がり女の子に着せる服を買って宿の一室を借りて部屋に入った。部屋に入った瞬間、俺は

部屋の鍵を閉めてベリアライザーで作ったゲートの中に入った。ゲートに入ると、中に

入っていた女の子は目を覚ましていた。

「起きたか」

「……誰？」

「お前を助けたお兄さんだ。取り敢えず……」

俺はそう言いながら、俺はベリアライザーにレイキュバスのメダルを入れ、レイキュバスの

力で女の子の身体の汚れを落として服を着させた。

「これで良いか」

「……ありがとう？ お兄ちゃん」

「その年で礼を言えるか……しつかりしてるな。お前、名前は？」

「ミュウ……お兄ちゃんは？」

「俺は帝だ。で、ミュウ。お前何であんな所にいた？」

「わからない……変な人に捕まって檻に入れられて、逃げたらいつの間にか……」

ミュウは頑張つて思い出したことを俺に教えてきた。

「檻か……」

「あと、お金の声がうるさかった……」

「金……」

「(ベリアル、これって……)」

『(十中八九、オークションだろうな)』

「(だよな……どうしたもんか……)」

そうベリアルと話しながら考えていると、突然ミュウからお腹が鳴る音が聞こえた。

「お兄ちゃん。ミュウ、お腹減った……」

「(……一先ず、どうするかは後だな)」

「そうか……じゃ、何か食べに行こうか」

そう言つて、俺はミュウを肩車して繁華街の方に向かった。

~~~~~

「お兄ちゃん！ ミユウ、今度はアレ食べたい！」

「はいはい」

？華街に來ると、ミュウは目に入った食べ物をもたすら欲しいと言つてきた。

「(よく食う事で……)」

そう思いながらも、俺は出店で買った串焼きを食べていた。

「(……それよりも)」

俺は外を歩いてる時に感じる視線を鬱陶しく感じていた。その視線は、どうもミュウを

見ているものだった。

「(オークションの人間か……視線の数的に十ぐらいか)」

そう思いながらも、俺は気づいていないふりをしながらミュウにレイキュバスのメダ

ルを

見せてこう聞いた。

「なあミュウ。お前、こんなメダル持つてないか?」

「……? 持つてるよ。パパから貰った宝物なの!」

そう言つて、ミュウはリユウの絵が描かれたメダルを見せてきた。

『(見たことがない怪獣だな……)』

「(そうなのか?)」

『(ああ。多分だが、伝説か幻の類の怪獣だな)』

「(そうか……)」

「ミュウ。そのメダル、俺が探している物なんだ。良かったらそれ、俺に譲つてくれない

か?」

「ダメ! これはパパから貰ったものな!」

そう言つて、ミュウは俺の上で暴れ出した。

「お、おいミュウ! 暴れるな!」

俺はミュウにそう言つたがミュウは暴れることをやめず、俺は地面に倒れてしまつた。その隙を

狙つてか、ミュウは俺から降りて走つて行つてしまつた。

「おいミュウ待てー！」

俺はすぐに起き上がり、ミュウが走っていた方に走り出した。

~~~~~

雫 side

「…… 広すぎて探すのも大変ね」

フューレンの街に着いた私は人ごみの少ない所を歩きながら帝君を探していた。すると、

曲がり角の所で私の足に誰かがぶつかった。見ると、私にぶつかったのは小さな女の子だった。

「っ！ だ、大丈夫!? 怪我してない?」

私は咄嗟に女の子と同じ目線に座ってそう聞いた。

「うん…… 大丈夫」

「そう…… なら良かった。それよりも、あなた一人なの? 親御さんは……」

そう言って話しかけていた時……

「ミュウー！」

彼女が走ってきた方向からそんな声が聞こえてきた。その声には聞き覚えがあり、声の方を

見るとそこには……

「っ!? 帝君!?!」

「お前…… 八重樫か!?!」

私の顔を見た瞬間、帝君は驚いた声を上げた。その時、突然帝君を背後からナイフで襲おうと

した男が十人ほど現れた。

「っ、帝君伏せて!」

そう叫び、私は刀を抜いて斬撃を飛ばした。それと同時に帝君は身体を伏せ、斬撃はナイフを

持った男達を真つ二つに斬り裂いた。

「っ!?!」

帝君は一瞬の出来事に目を見開いて驚いていた。

「…… 帝君、取り敢えず場所を変えない? 色々と聞きたいことがあるの」

「…… 奇遇だな。俺も聞きたいことができた」

そう言って、私と帝君は女の子を連れてこの場から離れた。

## 合流

「……取り敢えず、久しぶりだな」

「ええ……久しぶり。元気そうで良かったわ」

「それはお互い様だ」

私と帝君はミュウちゃんという女の子を連れて繁華街の喫茶店にいた。

「……まあ、それは置いておいて……何でここにいる？ それにその着物に刀にその殺気……」

「一体何があつた」

「……実はね」

帝君にそう聞かれた私は今まであつた事を全て話した。

「……そうか。南雲とお前が……」

「ごめんなさい。帝君に南雲君の事を頼まれていたのに……」

「いや。お前に丸投げした俺にも責任はある。謝るのは俺の方だ」

そう言つて、帝君は頭を下げて来た。

「やめてよ。帝君は帝君でやらなきやいけない事があつたんだから……それよりも、

そこに

いるミュウちゃんはどうかしたの？」

「ああ……この町の下水道に流れ着いてるのを拾ったんだよ。どうやらオークション会場から

抜け出して下水道に流れ着いたみたいだ。お前がさつき殺した連中は恐らくオークションの

人間だ」

そう言いながら、帝君はミュウちゃんの頭を撫でていた。

「そうなのね……それで、ミュウちゃんはどうかするの？」

「故郷に返してやるのが正解だろ。ま、そのためにはミュウの故郷が何処か分からないと

ダメだな」

「確かにそうね。でも、どうやって探すの？」

「ミュウを連れ去った連中に聞けばわかるだろ。ついでに連中も全員殺す。人身売買してる

連中なんて碌な奴がいらないだろうからな」

「……それは否定しないわ」

「だろ？」

そう言いながら、帝君はカップに入った飲み物を飲み干した。

「なら、私もついて行っても良いわよね？」

「…… お前がか？」

「ええ。帝君言ったわよね。殺す覚悟ができれば私を連れて行ってくれるって」

「…… 確かにそうは言ったが、っ！」

私は星斬丸を抜いて帝君の首筋に切っ先を当てた。

「それに、戦力になるわよ。今の攻撃、躲しきれなかったのが証明してるわ」

「それを言われたら何も言えないな……」 はあ

帝君はため息をつきながら首筋に当たっていた剣を抜いた。

「仕方ねえ…… 約束は約束だ。ついてくるなら好きにしたらいい」

「ええ、そうさせてもらうわ」

「…… そうか。んじゃ、とっとと行くぞ」

「行くって、何処に？」

「オークションの奴らがいる所。そこに行けばミュウの住んでた場所がわかるだろ」

「なるほど…… でも場所は？」

「八重樫が殺した奴の頭を覗いたから場所は大体わかる」

「そ」

そう言うのと、帝君は腰に付けてある謎の機械を手を取った。

「よし。ミュウ、少しの間この中にいてくれ。俺とこのお姉ちゃんは今からちよつと危ない事をするからな。ミュウが一緒にいると巻き込まれるかもしれない。

だからここの中でおとなしくしていてくれ」

そう言いながら、帝君の前に謎のゲートが現れた。

「中には食べ物入れといたから好きに食べて良いぞ。寝るんだつたら布団の中で寝ろよ」

「うん！ お兄ちゃん！」

そう言うのと、ミュウちゃんはゲートの中に入っていった。

「さて、これで遠慮なく暴れても問題はないな。行くぞ八重樫」

「ええ」

私はそう言って、屋根の上に跳んだ帝君を追いかけた。

~~~~~

「ハハハ」

着いた場所は、住宅街の少し大きな建物だった。

「ああ。連中、少しは頭が回るみたいだな。普通はこんな所に人身売買の組織があると

は

「思わないからな」

そう言いながら、帝君はゲートを出現させた機械を手にとってカードを入れていた。

『Mikado Access Granted.』

『SUPER C. O. V!』

「武装」

『SUPER C. O. V! SICKLE!』

「八重樫、格下は殺しても良いがリーダー格は殺すなよ。聞きたいことがあるからな」

「わかったわ」

「よし、じゃあ殴り込みだ」

「そう言うと、帝君は両腕の鎌で扉を斬り裂き中に入っていった。私も追いかけて中に入ると、

中には人相の悪い男がうじゃうじゃいた。

「テ、テメエ等一体何者だ!？」

「ここがどこか分かって……!」

「うるさい。とつとと死ね」

中の男達はそう叫んだが、帝君は一切耳を傾けず男達を殺していった。

「私も殺らないと……」

そう思い、私は刀を抜いて一瞬にして十人の男の頭を斬り落とした。そして、一分程で

リーダー格以外の人間は全て死に、リーダー格の男も帝君に片足と片腕を奪われていた。

「テ、テメエ等……！ フリートホーフに喧嘩売りやがって！ どうなつても知らねえぞ！」

「減らず口が減らない口だな。もう一本腕を奪えば静かになるか？」

そう言いながら、帝君は鎌を男の腕に当てた。鎌を当てられた男は叫び声をあげていた。

「うるさい…… てか、さっさと答えてもらうぞ。水色の髪の女の子、テメエ等どこから攫つてきた？」

「み、水色の髪の女……？」

「ああ。五歳の女の子だ。とつと吐け」

「し、知らねえよ！ 攫つてきたのは俺達じゃなくてリーダーが……」

「そうか。で、そのリーダーは何処にいる」

「た、多分オークション会場に……」

「そうか。じゃあお前は用済みだ」

そう一言言うと、帝君は男の首を刎ねた。

「八重樫、その辺にこいつ等の情報は無いか？」

「情報っていわれても……あ」

私は近くにあつた机を調べていると、「フリートホーフ全施設場所」と書かれた紙とオークション

会場の場所が書かれたチラシがあつた。

「帝君、これ」

「……なるほど。オークションは後三十分後か。その間に施設を全部殴り込みに行くのは

効率が悪いな……」

そう呟き少し考えていると、帝君は何かを思い付いたのか腰に付けてある機械を手にとった。

「八重樫。俺達はオークション会場に向かうぞ。施設はコイツ等に任せる」

そう言つて帝君が見せてきたのは怪獣の絵が描かれたメダルだった。

「……怪獣達に施設は任せるって事？」

「そういう事。その間に俺等はさっさとリーダーの男にミュウの居場所を聞けばいい」

「なるほどね…… あ、そういえばこれ」

私はオルクス大迷宮で拾ったメダルの事を思い出して帝君に見せた。

「っ！ それ、何処で拾ったんだよ」

「オルクス大迷宮で拾ったの。帝君が集めてるって言ってたから」

そう言つて、私は六枚のメダルを帝君に渡した。

「すまん、助かる」

帝君はメダルを受け取ると、そのうちの三枚を機械にセットし、起動音が鳴つてメダルが

消えると残りの三枚のメダルも機械にセットした。

『GATANTHOR! ZOG FIRSTFORM! ZOAMURUCHI
!』

『MIZUNOE NO RYU! VARAVA! ALIEN EMPEROR
!』

「行けお前達！ 敵は全て殺せ！ ただし、民間人や奴隷は殺すな！」

帝君がそう叫ぶと、六つの黒い光はそれぞれ別の場所に飛んでいった。

「さて、俺達も行くぞ八重樫」

「ええ」

そう言って、私達はオークション会場に向かった。

フリートホーフ壊滅

「はあ……この辺にいるのは全員殺したか」

オークション会場に着いた俺と八重樫はオークション会場の地下室に侵入して周辺にいた

男達を全て殺していた。

「そうみたいね。それよりも……」

八重樫も刀に付いていた血を振り払ってそう言うと、近くにあつた牢獄を見ていた。八重樫が

見ている牢獄には若い女や子供たちが鎖で繋がれていた。牢獄にいた女や子供たちは

俺達の姿にどこか怯えているようだった。すると、八重樫は牢獄に近づき牢獄の柵を人が

通れるぐらいの広さに斬り裂いた。そして、牢獄の中に入っていき繋がれていた鎖を全て斬り裂いていた。

「帝君。この人達は私が外まで連れ出すわ。その間に早くリーダーから情報を

聞いてきて」

「わかった。んじゃ、そっちは任せたぞ八重樫」

そう言つて、俺は少し騒がしくなっている場所に向かつて走り出した。

くくく

走り続けていると、俺はどでかいホールのような場所に着いた。周りを見ると、仮面を

付けた貴族のような連中が大勢いた。

「(胸糞悪い場所だな……)」

そう思いながら、俺はホールの真ん中でマイクを持った男に近づいた。

「お前、フリートホーフのリーダーか？」

「ああ？ 誰だおま……」

俺は舐めた口を聞いてきた男の首を右手で絞めた。

「がっ!？」

「もう一度聞く。フリートホーフのリーダーか？」

「お、お前ら！ この侵入者を殺せ！」

首を絞めている男は苦しみながらそう叫ぶと、客席の方にいた男達がこちらに向かつて

走って来た。

「ジェノサイドサンダー」

俺は左手を客席の方に向けてると、こちらに向かってくる男達全員に黒い雷が降り注いだ。

雷が当たった男共はチリとなって消滅し、客席の貴族からは悲鳴が上がった。

「最後にもう一度聞く。フリートホーフのリーダーか？」

俺は左手に黒い雷を纏わせながらそう聞いた。

「あ、ああそうだ！俺がフリートホーフのリーダーだ！」

すると、ようやく状況を理解したのか声を震わせながらフリートホーフのリーダーはそう言った。

「そうか。なら聞くが、水色の髪をした五歳ぐらいの女の子、何処から攫ってきた？」

「水色の髪のがき……海人族の事か！」

「ああ。何処から攫ってきた。さっさと吐け」

そう言いながら、俺は手に力を加えた。

「あ、あのがきならエリセン近くの湖で攫った！」

「それは本当か？」

「ほん、本当だ！嘘じゃねえよ！」

「嘘についてはなさそうだな……」

そう思い、俺はフリートホーフのリーダーの男を地面に投げた。

「そうか。それを聞けたらお前は用済みだ」

そう言つて、リーダーの男にも雷を落として男の存在を消滅させた。そして、俺は天井を

破壊して天井から施設の上空に飛んだ。すると、施設から少し離れた場所の建物上に八重樫が

いるのが見えた。

「誘導は終わったみたいだな。んじや、一気に破壊するか」

そう思い、ベリアライザーを持った瞬間、俺の目の前に一枚のメダルが現れた。それは

ミュウが持っていたメダルだった。

「急になんだ……？」

そう思っていると、突然頭の中に龍の様な鳴き声が聞こえた。

「(コイツの声か?)」

「何だ? 力を貸してくれるのか?」

そうメダルに聞くと、再び頭の中に龍の鳴き声が聞こえた。

「そうか。んじゃ、一緒にやるか」

そう言つて、俺はベリアライザーにカードを入れベリアルと雫から貰つたメダルとミュウが

持つていたメダルをベリアライザーにセットした。

『Mikado Access Granted.』

『BELIAL! MIZUNO NO RYU! NATSUNOMERYU!』

「三つの力、いただくぞ!」

『ANCIENT LEGEND DRAGON!』

三つの力は俺に重なり、俺の姿は九本の首を持つた龍に変わった。そして、九本の首から

炎と雷が放たれた。放たれた攻撃で施設は跡形もなく無くなり、巨大なクレーターが出来上がっていた。

『(ケツカイヲハツテオイテセイカイダツタナ)』

俺は施設周辺に張つておいた結界を解除させてそう思った。すると、俺のもとに六枚の

メダルが飛んできた。六枚のメダルは龍の身体に吸い込まれていきホルダーの中に自動的に入っていった。

『サテ…』

俺は八重樫がいる方向に向かって飛んでいき、八重樫のいる屋根の近くで急降下した。すると、

八重樫は俺の背中に飛び乗って来た。

「場所は分かったの？」

『アア。エリセントイウマチダソウダ。ナビタノムゾ』

「了解」

そう言って、俺は八重樫のナビを聞きながらエリセンに向かった。

母と娘としばしの別れ

空を飛び続けて一時間後、俺と八重樫はエリセンという町の上空に着いた。

『ココカ?』

「ええ。地図の場所的にここで間違いないわ」

『ソウカ。ジャアオリルゾ』

そう言つて、俺はエリセンの町に向かつて降りていった。すると、下の方では人が慌ただしく動いているのが見えた。その中には騎士の様な鎧を纏つた人間もいた。

『シタガアワタダシイナ』

「……いきなり九本首の龍が現れたら慌てるでしょ」

『……ソレハ、タシカニソウダナ』

そう言いながら、俺はエリセンの町に降り立った。すると、騎士の様な男達が俺の周りを

囲んだ。そして……

「総員攻撃開始!」

突然団長のような男がそう叫ぶと、騎士達は一斉に俺に襲い掛かって来た。

「…… どうするの？」

『スコシミミフサイデロ』

俺は八重樫にそう言うのと、九本の首から叫び声をあげた。向かってきた騎士達は全て、

吹き飛ばされ全員気絶していた。

『コレデヨシ』

そう言いながら、俺は姿を人に戻しベリアライザーでゲートを開いた。そしてゲートの中に

入りミュウに呼びかけた。

「ミュウ」

「あつ！ お兄ちゃん！」

ミュウは俺の方に向かって飛びついてきた。

「おっと」

俺はミュウを抱きとめて頭を撫でてやった。

「良い子にしてたか？」

「うん！」

「そうか。ならミュウに朗報だ。お前の故郷に今着いた。ママに会えるぞ」
「ホント！」

「ああ」

そう言つて、俺はミュウと共にゲートを出た。

「どうだ？　ここはお前が住んでた場所か？」

「うん！　ミュウが住んでた場所なの！」

「そうか。じゃ、ママに会いに行くか。ミュウ、案内よろしくな」

そう言つと、ミュウは人がいる方向に向かつて走り出していった。

「じゃ、俺達も行くか」

「ええ……でも、アレはどうするの？」

八重樫は気絶している騎士達を見てそう言った。

「……縛つて放置だな」

俺はそう言つて影シャドウ・チェインの鎖で騎士達を地面に縛り付けてミュウの後を追つた。

くくく

「お兄ちゃん！　お姉ちゃん！　こつちななの！」

俺と八重樫はミュウの後を追いつながら辺りを見渡していた。

「……人がいないな」

「帝君の龍の姿を見て慌てて隠れたんでしようね……」

俺と八重樫はミュウに聞こえないぐらいの声でそう話していた。すると、ミュウは少し

大きな家の前で止まった。

「お兄ちゃん！ お姉ちゃん！ ここがミュウの家なの！」

「ここか……」

「結構大きい家ね……」

そう呟いていると、ミュウは家の扉を開けて中に入ってしまった。

「ママ——！」

「っ！ ミュウ……！ ミュウ!？」

すると、家の中にはミュウが美しく育ったような綺麗な女性がいた。

「あの人がミュウちゃんの母親みたいね……」

「みたいだな」

俺と八重樫はミュウの母親に聞こえないようにそう言った。そして、ミュウとミュウの母親が

抱き合っていると、ミュウは驚いた声を上げた。

「ママ！ 足どうしたの！ けがしたの!？」

ミュウがそう叫んだ通り、ミュウの母親の足には包帯が巻かれていた。「お兄ちゃん！ ママを助けて！ ママの足が！」

ミュウは俺の足にしがみついてきてそう言ってきた。

「（治療は専門外なんだがな……）」

そう思いながら、俺はミュウの母親の足を透視で見た。

「（コイツはかなり酷いな……俺達の世界だったらしばらく入院しないと駄目なヤツだな……）」

ベリアル、これってどうにかできるか」

俺は頭の中でベリアルにそう聞いた。

『（無理だ。治療は俺の専門外だ）』

「（だよな……）」

俺はあまり期待していなかったので特に気にせずそう言った。

「ミュウ悪い。俺の力じゃお前のお母さんの怪我を治してやれそうにない」

「そんな……」

「悪いな……八重樫、お前ならどうだ？」

「帝君で無理なら私でも無理よ。でも、一人だけ回復魔法を使える人なら知ってるわよ」

「そいつは誰だ？」

「香織よ。香織の天職、治療師だったから。．．．だからミュウちゃん。今度私の友達を連れてきてお母さんの足を治すように頼んでみるわね」

そう言いながら、八重樫はミュウの頭を撫でながらそう言った。

「お姉ちゃんありがとう！」

そう言つて、ミュウは八重樫に抱き着いた。すると、ミュウの母親は不思議そうに首を傾げて

こう聞いてきた。

「あの．．．先程から気になっていたのですがあなた達は誰ですか？ ミュウからはお

兄ちゃん、

お姉ちゃんと呼ばれているようですが．．．」

「俺達は．．．」

「お兄ちゃんとお姉ちゃんはね！ ミュウを悪い人から助けてくれたの！」

それで、ミュウをここまで送ってくれたの！」

「あなた達がミュウを．．．！」

「まあ．．．」

「そういう事になりますね」

「そうですか．．．娘を助けていただきありがとうございます。何とお礼を申したら良

いか……」

「別に気にしないでくれ。こつちも成り行きで助けたただけだ。それに、アンタが思ってるほど、

俺は良い人間じゃないんでな」

そう言いながら、俺はドアの方に身体を向けた。

「さて、これでミュウは自分の家に帰ることができた。俺達も行くぞ、八重樫」

「ええ」

「お兄ちゃん！ お姉ちゃん！ もう行つちやうの……？」

すると、ミュウが上目遣いでそう聞いてきた。

「悪いなミュウ。俺と八重樫にはやらなければならない事があるんだ。それは俺と八重樫に

しか出来ない事だな。だけど安心しろ。お前のお母さんの足を治せるヤツを連れてきたら

また会える。だから、ミュウも自分ができる事をするんだ」

「ミュウが、できる事……？」

「ああ。お前がお母さんを守ってやるんだ。ミュウが持っていたこのメダル、さつきミュウを

守るために戦ってくれた。きつと、ミュウやお母さんがピンチになったら助けてくれる」

そう言いながら、俺はナツノメリユウのメダルをミュウに手渡した。

「良いかミュウ。どんなに辛くても諦めるな。諦めなかつたら、きつとその龍も力を貸してくれるはずだ。良いな？」

「うん！ わかつたよお兄ちゃん！」

「良い子だ」

そう言つて、俺はミュウの頭を撫でてやった。

「んじや、そういうわけだ。ミュウのお母さん、治療できるヤツを連れてまた来る。

それまでは大人しくしてろよ」

「お邪魔しました」

俺と八重樫はそう言う外に出て、リトラに姿を変えて八重樫を背中に乗せて空を飛んだ。

「さて、これからどうするの？」

『メイキュウニイクカ、ボウケンシャトシテランクヲアゲルカノドツチカダナ』

「……帝君は、今ランクどれぐらいなの？」

『オレハミドリダ』

「そう…… だったら、少しランク上げでもしない？ ついでに、色々とお互いにできる事を」

把握して連携を考えない？」

『…… ソウダナ。ジャアアソコニムカウカ』

「あそこって？」

『ブルツクダ』

そう言って、俺はブルツクの方に向かって羽をはばたかせた。

現在のステータスと所有メダル

月無 帝 17歳 男 レベル：計測不能

天職：闇の皇帝 レイオニクス

筋力：計測不能

体力：計測不能

耐性：計測不能

敏捷：計測不能

魔力：計測不能

魔耐：計測不能

技能：変身、巨大化、融合、武装、格闘術、憑依術、闇魔法、雷魔法、怪獣使役、

超獣使役、全属性耐性、魔法耐性、物理耐性、毒無効、麻痺無効、石化無効、恐慌無効、

氷結無効、状態異常無効、闇吸収、念話、超能力、透視、気配遮断、変声、浮遊、

怪力、神速、防御障壁、威圧、視覚強化、聴覚強化、身体能力強化、気配感知、

魔力感知、重力魔法、変成魔法、雷魔法超強化、闇魔法超強化、言語理解

所有メダル

ベリアル、ゴモラ、レッドキング、エレキング、エースキラー、キングジョー、ゼットン、

パンドン、ベムスター、ペロクロン、ゴルザ、メルバ、超コッヴ、リトラ、サドラ、
 バードン、ガタノゾーア、ゾグ第一形態、ゾアムルチ、ミズノエノリユウ、エンペラ
 星人、

バラバ、?、?、?、? (ナツノメリユウはミュウの手元に)

合体怪獣

スカルゴモラ、ベムゼード、古代の伝説龍

武装

レッドキングナツクル、キングジョーランチャー、超コッヴシツクル

装備

ベリアライザー 黒夜のロープ

八重樫 雫 17歳 女 レベル：???

天職：剣豪

筋力：1000000

体力：2500000

耐性：3000000

敏捷：計測不能

魔力：100000

魔耐：1200000

技能：剣術【極】、抜刀術【極】、見切り【極】、神速【極】、物理耐性、魔法耐性、
威圧、全属性耐性、状態異常耐性、毒耐性、麻痺耐性、視覚強化、聴覚強化、感覚強
化、

身体能力強化、気配遮断、気配感知、魔力感知、言語理解、神速の一閃、武術、

剣技【彼岸花】、??の??の??

技能の進化

(剣術↓剣術【極】 縮地↓神速【極】 先読み↓見切り【極】 隠業↓気配遮断)

装備：星斬丸 海神の着物

【極】：技能を究極まで高めた者に現れる技能。本来の技能の10倍の能力になる
神速の一閃：防御不可の一閃を放つ。ただし、放つには極限まで精神を集中させる
必要がある

【彼岸花】：雫がザムシャーとの修業の際に編み出した剣技。剣技を放つ際に刀と
自身の周りに彼岸花の花弁が舞う。花弁自体も触れると鉄や鉱石を斬るほどの

斬撃能力がある

星斬丸：かつてザムシヤーが振るっていた刀。使い手次第では斬れない物は無い程の刀。

現在は雫に引き継がれおり、本来の80%の力で振るわれている

海神の着物：ザムシヤーから貰った青色の着物。海神の加護を宿しており、水を自在

に

操ることができる

成就

リトラの姿で飛び続けて30分ほど、俺と雫はブルツクの街に着いた。

「到着つと」

「結構暗くなってるわね」

「だな。取り敢えず、泊まる宿探しに行くか」

「ええ」

そう話し合い、俺と八重樫は泊まる宿を探しに向かった。

〜1時間後〜

「1部屋だけか…。」

「はい。申し訳ありませんが」

1時間宿を探し続けてようやく泊まれる宿を見つけたのだが、その宿の空きは一部屋しか
なかった。

「八重樫、取り敢えずお前はここで…。」

俺は取り敢えず八重樫にここに泊まるように言おうとしたのだが…。

「わかりました。じゃあこれで」

八重樫は料金を払って鍵を受け取ると、俺の腕を掴んで部屋まで引つ張っていった。

「お、おい八重樫！ お前何考えてんだ！」

俺は部屋に着くとまず八重樫にそう言った。

「仕方ないでしょ。何処も宿が空いてなかったんだからここに二人で泊まるしか

方法がないじゃない」

「おまつ……！ 自分が何言ってるのかわかってんのか!？」

「ええ」

「つ……！ 馬鹿言ってるじゃねえよ！ 俺は外で野宿するぞ！」

「じゃあ私も野宿するわ」

「だから何で……！」

「私を、また一人にするの？」

「つ……」

八重樫のその言葉に、俺は何も言えなくなってしまった。

「……私、ひとりぼっちはもうごめんよ」

「……はあ。分かった」

俺は八重樫のその寂しそうな表情を見て折れた。

「じゃあ決まりね」

そう言った八重樫の表情はさつきまでの寂しい表情とは違い嬉しそうな表情をしていた。

「その日の夜」

「ねえ帝君。熱風を出せる怪獣っている？」

シヤワーを浴びてきて寝巻に着替えた八重樫は俺にそう聞いてきた。

「熱風か？」

俺は腰のホルダーを開き、炎と風の怪獣を探した。

「取り敢えずコイツだな……」

そう呟き、俺はほとんど魔力を込めずにリトラとのメダルをベリアライザーに

セットした。

『LITRA!』

すると、俺の右手に手のひらサイズのリトラが現れた。

「リトラ、八重樫の髪を乾かしてやれ」

そう言うと、リトラは八重樫の髪に熱風を当て始めた。そして、八重樫は手で髪を

梳いていた。そんな中、俺は八重樫の長くて綺麗な髪をじつと見ていた。

「……じつと見てるけど、髪に何か付いてる？」

「っ！ いや、別に何も付いてないが…… その、改めて八重樫の髪が綺麗だなと思って
な」

「っ！ ありがと…… 帝君にそう言ってもらえると嬉しいわ」

八重樫は頬を染めながらそう言った。

「駄目だ…… 何か調子が狂う……」

俺は八重樫のそんな様子を見てそう思っていた。そして、八重樫の髪が乾きリトラが
メダルに

なつて戻つて来た数十分後、俺と八重樫はそろそろ眠りに就こうとした。

「その、ベッドは私が使つて良いの？」

「当たり前だ。お前を椅子で寝かして俺がベッドで寝るのは流石に俺が嫌だわ」

「それを言うなら私だつて…… ベッド、結構広いんだから帝君も一緒に……」

「…… 八重樫、修行の時に何かブレーキ壊れたのか知らないがもう少し考えてから

もの言えよ？ 自分が何言つてるか本当にわかつてるか？」

「ええ。だって、私は帝君の事が好きだから。好きでもない人に、私はこんな事言わない
わ」

「……っ」

俺はまっすぐに俺の目を見てくる八重樫の目を見れずに視線を逸らした。

「帝君は、私の事が嫌い？」

「……嫌いなわけねえだろ」

「そんな濁さないで、ハッキリ言って」

すると、いつの間にか八重樫は俺の目の前におり、俺の肩を掴んで目をまつすぐ見て
そう言ってきた。

「……」

「……」

しばらくお互いに沈黙が続いたが、俺はただまつすぐに見てくる八重樫の目に負けて
ここう眩いた。

「……好きだよ、八重樫の事」

「そう……なら、私とお付き合ひしてくれませんか？」

「……それはできない。俺じゃあ、八重樫の恋人に相応しくない」

「どうして？」

「……八重樫。お前は、俺の過去の事を知らないだろ？ きつと過去を知れば、お前は

俺のことを軽蔑して……」

「それって、もしかしてご両親を殺した男を殺した事？」

「っ!?! 何でそれを……」

俺は八重樫が言った言葉に身体が固まった。

「実はね、帝君がご両親を殺した男を殺すのを私の家族が見ていたの。それを、私は偶然聞いてしまつてね」

「何で……何でその事を知つて俺が好きつて言えるんだよ！」

~~~~~

八重樫 side

「俺は元の世界で人を殺してるんだぞ！ それがどういう事かわからないお前じゃないだろ！」

帝君の表情は普段の様な落ち着きは無く、どこか困惑や様々な感情が入り混じった表情になっていた。

「……だって、帝君は悪くないじゃない。悪いのは全て帝君の両親を殺した男。帝君は、

ただ巻き込まれただけ。そんな帝君を嫌うわけじゃない……それにね、私にとって

帝君はたった一人の私のヒーローだから」

「俺が、八重樫の……？」

「覚えてる？ 小学生の時、いじめられて校舎裏で泣いていた私にかけてくれた言葉」

~~~~~

「……大丈夫？」

『どうして誰も助けてくれないの…… 私は何も悪い事はしてないのに……』

『そっか…… なら、僕が君を助けるよ！』

~~~~~

「あの後すぐに帝君は転校しちゃったけど…… あの時言ってくれた言葉は、本当に嬉しかったの」

「八重樫……」

「帝君。あの時、あなたは私の希望になってくれた。だから、今度は私があなたの希望になる番」

「……」

「だからお願い。もっと私を頼って。私が、あなたの希望になれるように」  
そう言うのと、帝君は顔を伏せてこう言ってきた。

「…… 八重樫。お前、本当の大馬鹿者だよ」

そして、帝君は私を抱きしめてきた。

「み、帝君!？」／／／

「悪い…… 少しだけ、抱きしめさせてくれ」

そう言った帝君の声は、どこか弱々しいものだった。

「…… わかったわ」

「ありがとな……」

~~~~~

しばらく私を抱きしめていた帝君は私から離れてベッドの隣に座った。その時、帝君の目は

赤く腫れていた。そして、帝君は私にこう聞いてきた。

「なあ八重樫。俺はお前が思ってるよりも弱い人間だ。そんな俺でも、お前は良いって
言ってくれるか？」

「…… もちろんよ」

「…… そうか。なら、改めて俺の方から言わせてくれ」

そう言うのと、帝君は立ち上がって私の前に膝をついた。

「八重樫。一度断ったが……俺とお付き合ひ、していただけですか？」

「…… はい。こんな私でよければ、よろしくお願ひします」

こうして、彼を思い続けて七年。私の恋は成就したのだった。

初デート

「……ん」

帝君と恋人になれた次の日の朝、私は窓から入ってくる陽の光で目が覚めた。

私は起き上がって部屋の椅子を見ると、帝君は机の上にメダルを並べて何かを
していた。

「…… おはよう、八重…… 雫」

「おはよう、帝君」

帝君は私が起きたのを見てそう言ってきた。昨日まで帝君は私の事を名字で呼んでいたが、

せつかく恋人になれた事なので名前で呼んで欲しいと私は言ったのだった。その時、

帝君は

良いと言ってくれたのだが、どこか今まで呼び方が抜けていないように見えた。

「(きつと、すぐ慣れてくれるわよね)」

「随分と早起きなのね」

「まあ、少し眠りが浅かったからな」

「そう……なら、今日は一緒のベッドで寝る？」

「……考えておく」

「っ！……そっか」

私は昨日の様子から随分と変わった帝君に驚いていた。

「……取り敢えず、朝飯食へに行くか。八……雫。何が食べたい？」

「そうね。できればサンドイッチの様な軽いものが良いわ」

「そうか……じゃああそこだな。雫、俺は先に宿の外で待ってる。着替えたら来てくれ」

そう言つて、帝君はメダルをケースに直して部屋から出ていった。

「別に、いてくれても良かったのに……」

そんな事を呟きながら、私は服を着替えて部屋から出た。

~~~~~

「おまたせ」

「じゃあ行くか」

そう言つと、帝君は手を差し出してきた。

「手、繋いでいくか？」

「……ありがとう。でも、手を繋ぐよりも……」

私は差し出ししてきた手ではなく、腕に抱き着いた。

「私はこっちの方が良いかな……」

「……そうか。コケないように気をつけてくれよ」

そう言つて、帝君は歩き出した。その時、帝君の耳は真っ赤に染まっていた。

~~~~~

しばらく歩いて着いたのは私がブルックに入つて来たギルドだった。

「ハハハ？」

「ああ。ギルド内の飯屋にサンドイッチ的な物はあつたからな。でもその前に、少し

挨拶に行つても良いか？」

「挨拶？ 誰に？」

「少し世話になつた人にな……」

帝君はそう言いながらギルドに入ると、真っ直ぐに受付の机に向かつて歩いていった。

そして、帝君は私が占いをしてもらった女の人の前に立った。

「おばちゃん、久しぶりだな」

「アンタツ……!!? 帰つてきてたのかい！ それに隣のお嬢ちゃんは……」

「……その、俺の恋人だ」

「昨日はお世話になりました」

「…… どうかい！ どうかい！ これはめでたいね！ アンタ等！ 朝からそこで酒飲んでないで

席空けな！」

帝君がおぼちゃんと言った人はギルド内のご飯屋でお酒を飲んでいる人達に向かつて

そう言っていた。

「ささっ！ 取り敢えず席に着きな」

女の人は私と帝君の背中を押して席に座らした。

「ちよつと待つてなよ！ 良い物を持ってきてあげるよ！」

女の人はそう言つてご飯屋の厨房の中に入っていった。

「帝君…… さっきの人と仲良いの？」

私は女の人が見えなくなるとそう聞いた。

「あの人はブルックにいた時に世話になつた人だな。色々と宿とか店を教えてもらったんだよ」

「へえ…… そうなんだ」

「ああ。あ、すみません。これとこれと俺はいつもので」

帝君は近くを通った店員の人にそう言っていた。すると、私達に昨日会った大剣の男の人が

近づいてきた。その後ろには似たような服装の男の人達がいた。

「よおボウズ。久しぶりに帰ってきたら美人な恋人連れてきたな！」

「うるせえよガラッド……それに後ろのオツさん共もうるせえぞ。どっか行け」

帝君は男の人にそう言いながら向こうに行くように手を振っていた。その時、再び帝君の

耳と、今度は頬も赤くなっていた。

「バツカ野郎！ こんな良いイジリ……じゃなかった。良い事があつて祝福しないわけには

いかないだろ！」

「今イジリつて言つただらう……」

帝君はどこか諦めたような表情をしていたが、少しだけ嬉しそうな様子だった。

「(帝君、嬉しそう……)」

そう思っていると、厨房に行った女の人が何かの釜の様な物を持ってきた。

「ほらほら！ ときなアンタ等！ 邪魔になつてんよ！」

女の人はその言いながら私達の前に釜を置いた。

「おばちゃん、これは？」

「祝いの時のご飯だよ！」

そう言つて女の人が開けた釜の中には赤飯の様なお米の様な物が入つていた。

「赤飯か……？」

「キハンセつていう料理だよ。お祝い事の際に作られる料理なんだよ。これからの未来に

良い事がたくさんあるように願つた料理さ」

「良いんですか？ 私達が頂いても？」

「良いんだよ！ この子、お嬢ちゃんの事に関して色々悩んでたからね……付き合
えた

みたいで私達の肩にも降りたよ」

「っ！ おいおばちゃん！ 余計なこと言わないでくれよ……」

「おっと。口が滑つちやつたね。ま、後はお若いお二人で。アンタ等も少し二人に
してやりな」

女の人がそう言うと、周りにいた男の人達も少し離れていった。

「はあ……何か疲れた」

「お疲れ様……それよりも帝君。私の事で悩んでくれてたの？」

私は女の人が言っていた事を帝君に聞いた。

「まあ…… その…… 色々と悩むことが多くてな。俺の過去とか、雫の気持ちとかを考えたらどうしたら良いのかとかを少し相談に乗ってもらってたんだよ……」

「そうなんだ。そんなに私の事を考えてくれて嬉しい……」

「…… それは俺も同じだ。雫だって、ずっと俺の過去を知りながらも色々と考えてくれていたんだろ。それを聞いて…… まあ、その…… すごく嬉しかったぞ……」

帝君は少し歯切れが悪そうだったがそう言ってくれた。

「そっか…… ありがとう」

そう言つて、私は帝君の頬にキスをした。

「なっ!?」／／／

すると、その様子を見ていたギャラリィの人達は口笛やひゅーひゅーと囃し立てていった。

「くくくくっ! 今こつちを囃し立てた奴…… 全員表出るやアアア!」／／／

帝君は顔を真っ赤にしながらも、囃し立てた人は全員黒い鎖の様な物で捕まえて外に出ていった。

「(流石に人前ではまずかつたかな……)」／／／

私は衝動的にキスをしてしまった事を今更ながら少し恥ずかしくなってしまった。

~~~~~

「酷い目にあつた…。」

食事の後、帝君はどこか疲れた表情をしていた。

「外にいた人達、皆黒焦げになつてたけど何したの？」

「知らん。そんな事は忘れた」

「そう… それよりも、これからどうする？」

「そうだな… せっかく恋人になれたし、デートでもするか？ 雫さえ良かった

ら…。」

「行くわ！ すぐにでも行きましょう！」

そう言つて、私は帝君の両手を力強く握つた。

「お、おうわかつた。おぼちゃん、代金はツケといてくれ。今日の夜に一括で払う」

「はいよ！」

「よし。そういうわけだから、じゃあ行くか」

「ええ！」

帝君は私の手を引いてギルドの外に出て何処かに向かつて歩き出した。しばらく歩いて

着いたのは服屋だった。

「雫。せっかくだから、服見ていかないか？　雫の持つてる少女漫画に出てくるフリフリのリの

スカートとか好きだったよな？」

「え、ええ。というか、何でその事を？　帝君に言った事あった？」

「……少女漫画を見てた雫の顔を見ればわかる。すごく憧れているような目をしていたのを

よく覚えてる」

「そう、なんだ……」

「それによ……好きな女には、好きな服着てもらいたいしな」

帝君はどこか緊張した様子でそう言った。

「……そっか。ありがとう、帝君」

「つ……さっさと入るぞ」

帝君は私から視線を外すと店の中に入っていった。

くくく

「……結構恥ずかしいわね」／／／

私は試着室で着た服を鏡で見てそう呟いた。

「（……スカート短くて中が見えそうだし。それに肩も丸見えで……あの漫画のヒロ

イン、

「凄いわね」

私は少女漫画でヒロインが着ていた服を思い出しながらそう思った。

「(帝君、喜んでくれるかしら……)」

「雫、着替えたか?」

「っ! ちよ、ちよっとだけ待って!」

「(……うん。大丈夫)」

私は心を落ち着けて試着室のカーテンを開けた。

「着替えたか……っ!」

「その……どう、かしら?」

試着室から出て帝君の前に立つと、帝君は目を見開いていた。

「似合ってる……?」

「……ああ。凄く似合っていて、その……見惚れてた……」

「ほ、本当?」

「ああ」

「そ、そう……!」／／／

「(そんなにハッキリ言われるとにやけちゃう……)」／／／

私は自分の顔がにやける事に気づいて顔を背けた。

「帝君、着替えるから少し待ってて」

私は帝君にそう言うのと逃げるように試着室の中に入った。

「うふふふ… 似合ってる、か」

私は試着室に入ると、帝君に言われた事を思い出しながら笑った。

~~~~~

「ありがとう帝君」

「気にすんな。少しは彼氏らしいことをさせてくれ」

あの後、私は着ていた服とは別に二着のスカートと服を帝君に買ってもらった。

「さて、じゃあ次の場所に行くか」

「ええ」

そう言って、私達は次の目的地に向かった。

プレゼント／好きだからこそ

あの後、観光名所のような所を回って私と帝君はギルドに戻ってきていた。

「おかえり…… って、随分色々買って来たねえ」

「まあな。雫、晩飯何にする？」

帝君は天井に吊るされているメニュー表を見てそう言った。

「帝君、あの料理って何なの？」

「アレか…… アレは確かアクアパツツアみたいな料理だったな」

「そうなのね…… じゃあ私はアレにするわ」

「そうか。じゃあ俺はアレにするのか…… すんません！」

帝君は店員の人を呼ぶと注文をして受付の女の人がいるテーブルの前の椅子に座った。私も

帝君の隣の椅子に座った。

「で、デートはどうだったんだい？」

「…… 俺は楽しかったが、雫はどうだった？」

「もちろん、すごく楽しかったに決まってるじゃない」

「……そうか。なら良かった」

帝君はそう言いながら笑みを浮かべていた。

「何だい。良いカツプルじゃないか。私達の心配はいらなさそうだね」

「ああ。おぼちゃんもありがとな。色々な意味で本当に世話になった」

「良いんだよ。若い子らには幸せになってほしいからね」

「おぼちゃん……」

帝君は女の人と話していると、料理が運ばれてきた。

「あ、食事の後お嬢ちゃんと話させてもらっても良いかい？」

「俺は別に良いが……良いか雫？」

「え、ええ……」

「そうかい。じゃあ後で受付裏に来ておくれ」

そう言うと、女の人は受付の方に戻っていった。

「何だったんだろうな？」

「さあ……？」

そんな事を話しながら、私と帝君は晩ご飯を食べた。

~~~~~

「じゃあ、少し行ってくるわね」

「おう」

「よっしや！ ボウズは俺達と飲むぞ！ 今日ば宴だ！」

「俺は飲めねえつての……」

すると、帝君は冒険者の男の人達に広いテーブルの方に連れて行かれた。私はそれを見届けて

受付裏に向かった。受付裏に入るといくつかの個室があり、そのうちの一つの扉の前に

女の人がいた。

「来たね。こっちだよ」

女の方は個室の扉を開けて私に中に入るように言った。私は個室に入ると、椅子に座るように

促された。

「悪いね。急に呼んじやって」

「いえ……その、私に話していうのは何ですか？」

「ちよつと渡したい物がってね。人前で渡すとちよいと面倒になりかねない物だからね」

そう言うと、女の方は机の上に一枚の商品券の様な紙を置いた。

「これは……？」

「フューレンにあるランジェリーショップで使える商品券さ。私が若い時にあるイベントで

貰った物なんだけど使う機会が無くてね。せつかくだからお嬢ちゃんにあげるよ。きつと

必要になってくるだろう？ 勝負下着」

「っ!?! しよ、勝負下着って……」／／／

「恋人とのそういう事をする初めての夜は大事なのは女の私がよくわかるからね。

私としては、お嬢ちゃんとあの子には幸せになってもらいたいんだよ」

「…… どうして私達にそこまで」

「…… さあね。異世界から来たお嬢ちゃん達にどうしてそこまで肩入れしてるのか、

自分でもよくわからないんだよ。でも、強いて言うなら少しでも良い思い出を作ってもらいたいっていう年寄りのエゴだよ」

「っ!?! 私達が異世界人って気づいていたんですか……」

私は女の人が私達を異世界人だという事に気づいていた事実を驚いた。

「まあね。これでも長いこと生きているんだ。異世界人がギルドに来ることはあつたらね。

何となくわかるようになってるんだよ。安心しな。その事を言うつもりはないよ」  
「…… ありがとうございます」

「良いんだよ。それで、これ受け取ってくれるかい？」

「…… じゃあ、ありがたく受け取らせていただきますね」

そう言つて、私は商品券を受け取つた。

「そうかい。なら良かったよ」

「このご恩は、別の形で返させていただきます」

「そうかい。なら楽しみにしているよ…… さ、そろそろ戻つてやんな。あの子も

寂しがつてるはずだよ」

「はい。失礼します」

私はそう言つて頭を下げて個室から出て帝君がいる所に戻つた。戻ると帝君は何か飲み物を

飲みながら周りの男の人達と話していた。

「帝君」

「雫。話しは終わったのか？」

「ええ」

「そうか。んじゃ、そろそろ帰ろうか。ガラッド、これで俺の分も払つといてくれ。余り

は

「酒代にでもしてくれ」

帝君は十数枚の一万ルタを置いてそう言った。

「サンキュ！ おっしお前ら！ 今日飲むぞ！」

「じゃあ雫、帰ろうか」

「ええ」

帝君は私の手を握ると、ギルドの外に出て宿の方に歩き出した。

~~~~~

「なあ雫」

「何？」

「その……今日は一緒にベッドで寝るか？」

「えっ……？」

宿に戻ってお風呂に入りのんびりしていると、突然帝君は私にそう言ってきた。

「今日の朝、一緒に寝ないかって聞いただろ。雫が良かったらで良いんだが……」

「良いに決まってるじゃない。じゃあ今日は、一緒にベッドで寝ましょうね？」

「っ！ ああ……」

そんな事を話して数時間後、そろそろ眠りに就こうと思った。

「じゃあ、お邪魔します……」

「そんなに遠慮がちにしないで大丈夫よ」

「と言われてもだな……女子と一緒にベッドで寝るなんて初めてなんだよ……」

「そんな事を言ったら私だって男の人と一緒に寝るなんて親以外にないわ」

「親は別だろ……」

帝君はそう言いながら、私と少し距離を空けて私とは反対側の方を向いていた。

「ねえ……どうしてそつちを向くのよ」

「普通に恥ずいからだだよ……」

「……」

私は少し帝君に不満に思うところがあり、後ろから帝君に抱き着いた。

「おまつ……!？」

「(凄い……背中越しからでも帝君の心音が聞こえる……)」

「……本当に緊張してくれてるのね」

「……当たり前だろ。好きな女なんだから」

「そつか……今日はこのままでも良い？」

「……ああ……明日は、もう少し頑張るな」

「……うん。楽しみにしてる」

そう言って、そのまま私は眠りに就いた。

守るべきもの／氷の魔物

次の日

「……ん」

窓からの朝日で私の目は覚めた。私は身体を起こそうとしたのだが、何故か私の身体は

重く動きにくかった。何故かと思い、重くなった原因を見ると、私は帝君の胸元に抱きしめられていたからだ。

「いつの間にも……」

帝君の手は私の頭と腰にあり、優しく私を抱きしめてくれていた。

「……帝君の匂い」

私は帝君の背中に手を回して帝君の胸元に顔を埋めた。

「(落ち着く……)」

私はそんな事を考えながら帝君の心音を聞いていた。その心音に落ち着いたのか、私は再び眠りに就いてしまった。

くくく

帝 s i d e

「……」

「すう……」

「(どうしてこの状態に……)」

目が覚めると、何故か雫は俺の胸元に顔を埋めていた。

「(……綺麗だな)」

そう思いながら、俺は雫の頭を撫でた。

「守るからな。お前だけは、絶対に……」

そう言っつて、俺は雫をやさしく抱きしめた。

くくく

「さて、今日はどうする?」

あれから一時間が経ち、俺と雫はギルドに来ていた。

「そうねえ……じゃあこれとか……」

そう言っつて雫が依頼書を取ろうとした時、突然入り口の扉が大きな音を立てて開かれ

た。

振り向くと、そこにはガラッドとよくいるおっさんが倒れており、右腕が全て氷漬け

に

されていた。

「おいおっさん！ 大丈夫か！」

俺は急いで駆け寄り、おっさんの身体を壁にもたれさせた。

「……ボウズか。ああ、ギリギリ何とかな……」

「どうしたんだよその腕……」

「ライセンに見た事のない変な魔物が二体いたんだよ…… そいつらを奇襲して倒そうと

したんだが全く歯が立たなくてな…… 殺されはしなかったんだがこのざまだ……」

「そうだったのか……」

そう話している間に、周りの冒険者たちも集まり、中にはギルドの医療班もいた。そして、

おっさんそのままギルドの医療班に運ばれていった。

「……」

『(あの氷…… まさか……)』

俺が運ばれていくおっさんを見ていた時、突然頭の中でベリアルがそう呟いた。

「(何か知ってるのか?)」

『まあな。もしも奴ならちようどいい。そいつがいる所に向かえミカド』

「(わかった。だが、お前が命令するなんて珍しいな……)」

そう頭の中で言いながら、俺は雫の元に戻った。

「雫、ライセンに向かうぞ。ベリアルから命令だ」

「わかったわ」

そう言つて、俺と雫はギルドを出てライセンに向かった。

　　↳ライセン大峽谷

「そういえば、何処にその魔物がいるか聞いたの？」

「あ……」

ライセン大峽谷に着いてから、俺は雫にそう言われた。

「何やってるのよ……」

「返す言葉もないわ……」

雫は呆れた表情をしており、俺は頭を抱えた。

「めんどくさいが魔力感知で探すか……」

『その必要はねえ。もうどこにいるか見つけた』

俺の言葉にかぶせるように、ベリアルのメダルはそう言つて俺と雫の前に浮きあがった。

「嘘（だろ）……」

『んなわけあるか。とつとつについてこい』

そう言うと、ベリアルルのメダルはどこかに向かつて飛び始めた。

「取り敢えず追うか……」

「そうね」

~~~~~

ベリアルルを追いかけて数分、着いたのは障害物の多い道だった。

『お前ら、あそこだ』

そう言ったベリアルルの視線の先には銀色の怪物と、赤と銀色が混ざった怪物がいた。

「あれがおっさんを倒した奴か……」

「（強いな…… 今まで戦った奴等とは比じゃないぐらいに……）」

「気配で分かるけど、強いわね……」

隣で見ていた雫も二体を見てそう呟いていた。

「さて、じゃあどうする……」

そう言つて次の一手を考えようとした時、俺と雫はその場から飛び退いた。俺と雫がいた

場所には巨大な氷柱が落ちていた。

『おく、今のを避けるか。なかなか勘が鋭い奴等じゃねえか』

そう言ったのは、銀色の怪物だった。そして、銀色の怪物と赤と銀色の怪物はこちらに

歩いてきた。

『これなら少しは楽しめそうじゃねえか。デスローグ、俺は男の方と遊ぶぜ？』

『グオオオ』

二体の怪物はそう言うと、俺と雫に向かって攻撃を仕掛けようとしてきた。

「(おいベリアル。どうすりゃいいんだよ)」

『(死なないように倒せ。できるよな？ 俺の力を持つてるお前なら)』

「(めんどくせえな！)」

「雫！ そっちは任せるぞ！」

そう言って、俺はベリアライザーで銀色の怪物の攻撃を受け止めた。

『良い反応してるじゃねえか！』

「やかましいわ！ 悪いがとつとどぶつ飛ばさせてもらおうぞ！」

そう言って俺は銀色の怪物から離れてベリアライザーにカードと一枚のメダルをセツトした。

『Mikado Access Granted.』

『ALIEN EMPEROR!』

「武装!」

そう叫びトリガーを引くと、俺の手には黒い剣が握られていた。

『おいおいおい……その剣つてまさか……!』

「悪いが、一気に行かせてもらおう!」

俺は剣を構えると、一瞬で怪物の背後に回り剣を振り下ろした。振り下ろした剣は怪物を

真つ二つに斬り裂いたのだが、斬り裂いた怪物は氷で作られた偽物だった。そして、氷で

作った偽物の背後に移動していた怪物は俺に冷凍ビーム的な物を放ってきた。

「(ダメー作るのが速いな……)」

『お、お前なあ! んな危ない剣振り回してんじゃねえよ! てかなんだ! お前何者だ!』

俺がそんなことを考えていると、怪物はどこか困惑した様子でそう叫んできた。

「俺か? 俺は、そうだな……闇の皇帝の継承者とも言うっておこうか」

『闇の、皇帝だと?!』

そう呟いた瞬間、怪物は武器を下ろすと俺に走って近づいてき肩を掴んできた。

『お前！ 陛下の継承者って本当なのか！』

「あ、ああ……」

『陛下は！ 陛下は今どこに！』

『うるさいぞグロツケン！ そんなにデカイ声で叫ぶな！』

すると、ホルダーにいたベリアルが飛び出してきて銀色の怪物にそう叫んだ。

『へ、陛下あああ！』

『だから叫ぶなって言っただろうが！』

そうベリアルが叫んだ瞬間、銀色の怪物には紫色の雷が落ちた。

『あばばばば！』

紫色の雷が当たった怪物は断末魔を上げながらその場で倒れた。

『おいデスローグ！ お前も戦うのをやめてこっちに来い！』

ベリアルは雫と戦っていた怪物にもそう叫んだ。すると、雫と戦っていた怪物も腕を下ろし

雫から距離を取った。

『おいミカド。コイツ起こせ』

「あ、ああ……」

俺はベリアルにそう言われてグロツケンと呼ばれた怪物を起こしてこの場から移動

した。

## 氷結のグロツケン・炎上のデスローグ／ウルハ

雪side

「雫！・ そつちは任せるぞ！」

そう言うのと、帝君は謎の黒い剣を持って銀色の怪物に向かつていった。

「（じゃあ、私はこつちね……）」

そう思いながら、私は赤と銀色の怪物の方を見た。すると、怪物は武器の様な左腕を私に向けてきた。私は警戒して星斬丸に手を置いたのだが、左腕からは何も攻撃が来なかった。不思議に思っていた私のだが、突然上空から私に向かつて何か

飛んでくる気配がした。私は気配の方向を見ると、そこには巨大な炎の塊のような物が

あり私に向かつてきていた。

「彼岸花——閃——！」

私は刀を抜き、炎の塊に斬撃を放った。斬撃は炎を真つ二つに斬り裂き、私の背後に落ちていった。私はすぐに刀を納刀して怪物の懐に潜り込み、刀を抜いた。

「彼岸花——壊——！」

だが、私の攻撃を怪物は左腕で防いでいた。

「つ、硬い……」

私はすぐに距離を取って刀を構え直した。すると、怪物は自身の周囲にさつきよりも小さい炎の塊を出して私に放って来た。私はそれを一つずつ確実に落としながら次の一手を

考えていた。すると……

『おいデスローグ！ お前も戦うのをやめてこっちに来てい！』

突然背後からベリアルが叫ぶ声が聞こえてきた。その声を聞き、私と戦っていた怪物は

武器である左腕を下ろした。そして、怪物はそのまま私の横を通り帝君のいる所に歩いていった。

「雫。お前も剣を納めてこっちに来てくれ」

すると、いつの間にか黒焦げになっている怪物を叩いていた帝君が私にそう言うてきた。

「え、ええ……」

私は困惑しながらも刀を納めて帝君のもとに急いで向かった。

~~~~~

帝 side

「さて……ベリアル、この二体はお前の知り合いって事で良いのか？」

黒焦げになった怪物を起こし、俺は空中に浮いているベリアルのメダルにそう聞いた。

『ああ。コイツ等は俺の部下だ。グロツケン、デスローグ、コイツは今の俺の依り代の

ミカドだ。俺の新しい身体を探させている。で、この女はシズク。ミカドの女だ』

「もうちよつと言い方あるでしょ……」

『俺に指図するな。お前らも自己紹介しろ』

雫の言葉を横に流し、ベリアルは二体の怪物にそう言った。

『う、うつつす！俺は氷結のグロツケン！陛下に仕えるダークネスファイブの一人だ！』

急に襲い掛かって悪かったなミカド！で、コイツが……』

『グオオオオ。グオ、グオオ』

『炎上のデスローグ。コイツは喋れなくな。俺が通訳やつてるんだよ』

『そうか……。一応俺達も挨拶をしておくか。月無 帝。この世界とは別の世界から

連れてこられた人間だ。今はベリアルの相棒をやっている』

「私は八重樫 雫。彼と同じようにこの世界に連れてこられた人間よ」

『そうか。ミカドとシズクだな』

『グオグオ』

『終わったか？ それよりも、テメエ等なんでこの世界にいる』

黙って自己紹介を聞いてきたベリアルはグロツケンとデスローグにそう聞いた。

『それが分かんないんすよ。俺達陛下の魂がどこかに流れ着いていないか宇宙を探して
いたんすけど突然変な何かに呑み込まれたんすよ。で、気づいたらここに。元居た場
所に

戻れないんでここでどうしようかって話してたんすよ』

『残りの奴等はどうした？』

『さあ？ 二人一組で探してたんで分かんねえつす』

『…… そうか。まあ良い。お前らはこれからどうするつもりだ？』

『それはもちろん陛下について行かせてもらいますよ！ ようやく陛下とお会いできて

ついて行かないなんてダークネスファイブ失格つすよ！』

『グオオ！』

『つて言ってるが、お前らは良いか？』

俺達の方を見てベリアルはそう聞いてきた。

「私はどっちでもいいけど…… 帝君は？」

「別に良いんじゃないやねえか？ 戦力増えるし」

俺と雫はベリアルにそう言った。

『……だだよ。ま、ついて来るなら好きにしろ』

『ありがとうございます陛下！ ミカドもありがとな！ これからよろしく頼むぜ！』
そう言つてグロツケンは手を差し出してきた。

「ああ、（こちらこそ）」

俺がグロツケンと握手をしている時、デスローグも雫と握手をしていた。その時、デスローグは何か言っていた。

『攻撃して済まなかつたつてよ』

グロツケンはデスローグの言葉を翻訳して雫にそう言った。

「いえ、気にしていないから大丈夫よ」

雫はデスローグにそう言っていた。

『さて、やる事も終わったし帰るぞお前ら。デスローグとグロツケンは人間の姿に化けておけ。その姿だと人間に攻撃されて面倒だ』

『了解っス』

『グオオ』

そう言うのと、二人の姿を光り出し人間へと姿が変わった。

「こんなもんか」

グロツケンの姿は銀髪のチャラそうな男に、デスローグの姿は寡黙な表情の硬い男に姿を変えた。

「喋り方との親和性が凄いな」

「だろ？ じゃあ行こうぜ」

そう言われ、俺達はブルックに向かって歩き出した。

~~~~~

「森で迷っていた人間、ねえ……」

ブルックに戻り、俺はギルドのおばちゃんに二人の事情を話していた。

「ああ。ステータスプレートも紛失したみたいだなあ。プレートと違ってどこかで

貰えないか？」

「…… 一応ギルドで買えるよ」

「じゃあ二つくれ。代金は俺が払う」

そう言つて、俺は代金を払つてステータスプレートを二つ買い二人に渡した。

「変に厄介ごとを起こすんじゃないよ」

おばちゃんは明らかに怪しんだ様子でそう言つてきた。

「わかつてるつての。この町では問題を起こさないようにするつて」

「そうしておくれ」

「あいよ。んじゃ」

俺はおぼちゃんにそう言つて雫達と一緒にギルドを出た。

「怪しまれてた？」

「確實にな。頼むから二人とも、あまり厄介な事は起こさないでくれよ」

「わかつてるわかつてる。陛下の迷惑になる事はしねえよ」

「グオオ」

「なら良いが……」

　　（それから数日後）

「ありがとうデスローグ。おかげで早めに退院できたぜ」

「グオオ」

「相変わらず良い飲みっぷりだなグロツケン！」

「ははは！ それはテメエもだろ！」

「……二人ともすごく馴染んでるわね」

「だな……」

デスローグとグロツケンはギルドの冒険者と上手くやっていた。デスローグは冒険者達と

共にクエストに行ったりしており、グロツケンも毎日飲み会をやっていた。そんな中、

俺と雫はクエストの攻略を進めており、ランクは黒になっていた。

「そろそろ町を移動するか……」

「どこに移動するの？」

「それはまだ決めてないんだよな……」

そう話していると、ジョッキを持ったグロツケンがこつちにやって来た。

「おいおい帝！ 移動するんだっつらこの町に行こうぜ！」

そう言つて、グロツケンも一枚の紙を見せてきた。

「……ウル？」

「ああ！ 何でも酒にあう料理が山ほどあるんだとよ！ それに米に似た料理もあるぜ

！」

グロツケンもそう言いながら別の紙を見せてきた。

「っ！」

「へえ……！ それは良いな。どうする雫？」

「行きましよう」

「即決かい。じゃ次の目的地はここにするか。取り敢えず、明日には出発するか」

「OK!」

そう言うのと、グロッケンは飲み席に戻っていった。

「さて、雫。出発の準備しに行くぞ」

「ええ」

俺と雫はそう言うてギルドから出て出発の準備をしに買い出しに出かけた。

「次の日」

「んじゃ、また来るぞおばちゃん」

「お世話になりました」

「グオオ」

「お前ら! また飲みに行こうぜ!」

「元気でやりなよあんた達。それと、あんた。これ持って行きな」

俺達の出発には多くの冒険者が集まっていた。そして、おばちゃんは一枚の封筒を

渡してきた。

「また封筒か?」

「前のやつは捨てて良いよ。何か面倒があったらそれをギルドの職員に見せな」

「わかった。…じゃ、そろそろ行く。本当に世話になった」

そう言うて手を振りながら、俺達はエリセンに向かって歩き始めた。

## ベリアルの面影

エリセンに向かって歩き続けて一週間程が経った。

「いや、キャンプするのも悪くないな！」

「グオオ」

「そうだな。移動は基本飛んでばっかだったからな」

「そうね。私も走ってばかりだったからこうしてのんびり歩くのは久しぶりかも」

俺達は焚火の周りに座りながらそう話していた。

「それにしても、ミカドの使ってるそれすげえ武器だな」

グロツケン俺の腰に装備してあるベリアライザーを見ながらそう言った。

「ああ。何でもベリアルが作った物らしいぞ。なあベリアル」

俺はホルダーの中からベリアルのメダルを取り出してそう聞いた。

『ああ。そいつは俺が闇の力で作った物だ。俺の魂が復活した時に近くにあつた物を

コピートした物だな』

「さすが陛下！　じゃあもしかしてメダルも陛下が？」

『まあな。俺の記憶から作ったが、メダルはこの世界のあちこちに散らばったがな。そ

れを

探すのもコイツの使命だ』

「使命だなんて初めて聞いたがな……」

そう話していた時、俺達四人は全員それぞれの武器を展開した。

「……グオオ」

「数50つてところか？」

「囲まれてるわね……」

「ああ。だが、蹴散らせば関係ねえ！」

『Mikado Access Granted.』

『VEROKRON!』

「武装！」

俺はベロクロンのメダルをベリアルライザーに入れて武装をした。すると、俺の背中に

無数の

ミサイルの発射口が現れた。

「全員殺すな！ 何人か残せよ！」

「グオオオ」

「あいよ！」

「ええー！」

そう言った瞬間、俺の目の前では俺が放ったミサイルの爆発が、雫の目の前では雫が放った

無数の斬撃が木々をなぎ倒しており、グロッケン目の前の森は氷漬けにされており、

デスローグの目の前の森は炎に包まれていた。俺はそんな惨劇と化した森の中に入っていくと、

三人の鎧を装備している人間を見つけた。

「テメエ等か。俺達に殺気に向けてきた人間は」

「な、何だよ……！」

「何なんだよお前ら！」

「俺達帝国兵に手を出してただで済むと……！」

俺は最後に喋った人間にミサイルを放ってこの世から消滅させた。

「口の利き方に気をつけろよ雑種。質問したのは俺だ。テメエ等は俺の質問に答えて

いれば良いんだよ」

「ヒュ〜！ おつかねえな」

すると、燃えている部分を凍らせながらグロッケンがやって来た。

「大人しく話しておいた方が身のためだぜく？　コイツ、意外と沸点が低いからよ」  
「余計なお世話だ……　それで、テメエ等何者だ？　何で俺達を困んで殺気を向けた。答えないって」

「いうなら、さっきの人間と同じように消すぞ？」

「そう言いながら、俺はミサイルの発射口を男達に向けた。」

「しよ、正直に話したら殺さないか……？」

「……　真実を話せば考えてやらんことは無い」

「お、俺達はお前達と一緒にいた女に用があつた……　あ、あの女はかなりの上物だ。」

「奴隷商に売ればかなりの大金が……」

「……　わかつた。もう良い。口を開くな」

「そう言つて、俺は男の一人をミサイルで消した。」

「うわあ、容赦ねえ……」

「テ、テメエ！　正直に話せば殺さねえって！」

「殺さねえとは言つてねえ。考えるつて言つただけだ。安心しろ、すぐにお前も死ぬ」

「そう言つて、俺はミサイルを男に放とうとしたのだが……」

「ふ、ふざけるな！　こんなところで死んでたまるか！」

「男はそう叫びながら何かを握つていた。すると、握つていた何かが光り出し、男は光

に

呑み込まれた。

「何だ……」

俺とグロツケンが腕で目を覆って光を遮断していた。そして、光が収まり男の方を見ると

男は巨大な怪獣に姿を変えていた。

「コイツは……」

「おいおいおい……！ 何でバキシムに変わってんだ!?!」

グロツケンはどこか驚いた様子でそう叫んだ。そして、怪獣は俺達を踏みつぶそうとしてきた。だが、そのスピードは遅く、俺とグロツケンは簡単に避けることができた。

「おいグロツケン。アイツは俺がやる。二人が来たら待機って言っておいてくれ。ベリアル！」

手を貸せ！」

そう言つて、俺はベリアライザーを構えた。

『好きにしろ……』

そう言われ、俺は武装を解除してホルダーから三枚のメダルを取ってスリットにセットした。

「ベリアル！ エースキラー！ エレキング！」

『BELIAL！ ACE-KILLER！ ELEKING！』

「三つの闇の力、いただくぞ！」

俺はベリアライザーを空に掲げてトリガーを押した。

『THUNDER KILLER！』

~~~~~

雫side

テントを立てた場所で待機していた私とデスローグは、巨大な怪獣が現れるのが見え、帝君と

グロツケンが向かった場所に走っていた。

「グロツケン！」

着いた私は一人残っていたグロツケンに話しかけた。

「グロツケン！ これは一体……」

「さあな。急に残っていた人間がああ超獣に変化してな。今ミカドが殲滅しようとしているところだ」

そう言っていると、金色の怪獣がオレンジ色の怪獣に攻撃を仕掛けていた。

「金色が帝君なのよね？」

魔力の気配から察して私はグロツケンにそう聞いた。

「ああ。にしても、バキシムくっそ弱いな」

グロツケンはそう言いながらオレンジ色の怪獣を見ていた。オレンジ色の怪獣は帝君が姿を

変えた怪獣にボコボコにされており、帝君はボロボロになった怪獣にも一切容赦がなかった。

そして、帝君が姿を変えた怪獣はオレンジ色の怪獣の首を掴み空中に浮かばせた。そして、

掴んだ腕から強力な電撃を流し始めた。オレンジ色の怪獣は痙攣し、体が真っ赤に光ると

大爆発を起こした。すると、私達の目の前に黒焦げになった人の形をした何か落ちてきた。

「あーりやりや。碌な死に方してねえな」

グロツケンはそう言いながら落ちてきたものを凍らして足で砕いていた。すると、金色の

怪獣は光り出し帝君の姿に戻って私達の方に歩いてきた。

「お疲れさん」

「…… ああ」

グロツケンの言葉に帝君は機嫌が悪そうに答えていた。

「さっさと戻るぞ……」

そう言つて、帝君は一人先にテントがある方に戻つていった。

「ありや随分機嫌が悪いな」

グロツケンは歩いていった帝君の背中を見てそう呟いた。

「グロツケン、ここで何かあつたの？」

「ん？ さつき俺らの命を狙つた奴等に目的を聞いてな。それを聞いてあの状態だ」

「目的聞いてつて…… 一体目的は何だつたの？」

「お前を奴隷商に売るつてよ」

「えっ……」

グロツケンの言葉に私は言葉を失つた。

「まあお前美人だし売つたら相当な金を貰えるだろうしな。で、連中がそんな事を言つたから」

ああなつちまつてな。いや、一切の容赦がなかつたな。まるで陛下かと思うほどの殺気と

殺意だつたぜ。それに良かったなシズク。お前、アイツにめちやくちや愛されてる

な。めちやくちや

「愛されてなかったらあんなにキレてないからなあ」

「…… 少しでも複雑だわ」

「あつはつはつは！ 良いじゃねえか、わかりやすい愛で！ さ、俺らも戻るぞ」

そう笑いながら、グロツケンとはテントの方に歩いていった。それを見て、デスローグも

グロツケンの後ろを歩いていった。

「（複雑とか言っておきながら心の中で喜んでるとは言えないわね……）」

私は二人の姿が遠くなるそう考えていた。

「私も、大概歪んでいるのかしらね……」

そう呟き、私もテントの方に向かって歩き出した。

くくく

「グオ、グオオ」

「じゃ、先に寝させてもらうぜ」

そう言つて、グロツケンとデスローグはテントの中に入っていった。そして、私と帝君は

見張りのために起きていた。普段だったらもう少しイチャイチャしているのだが、今

日の

帝君はかなりイライラが溜まっているのか私に触れてこようとはしなかった。

「…… こういう時は、彼女の私がどうにかしてあげないと」

そう思い、私は帝君の隣に座ってこう言った。

「ねえ帝君。膝枕してもあげる」

「…… は？」

雫の耳かき

「(どうしてこうなった、って思ってるんでしようね)」

膝枕に誘った私だったが、帝君は始めは困惑して断っていたのだが、私は力づくで帝君の

頭を膝に下ろし、頭を撫でていた。帝君は起き上がろうとしたのだが、私が無理にでも

起き上がらせようとしなかったので諦めて私に頭を撫でられていた。

「なあ…… 何で急にこんな事を……」

十分ほど経った時、ずっと黙って頭を撫でられていた帝君は私にそう聞いてきた。

「帝君が私に触れてくれなくて寂しかったっていうのもあるけど…… 一番は帝君にリラックス

して欲しかったの」

「リラックスって……」

「さっきグロツケンから聞いたの。帝君が機嫌の悪い理由。だから、少しでも帝君の

機嫌を良くしてほしいと思ったの。ほら、彼氏って恋人にこうやって膝枕してもらっ

のが

好きなんでしょ？」

「何の少女マンガ読んだんだよ……」

帝君は呆れたようにそう言っていたが、表情はさつきよりも柔らかくなっていた。

「どう？ 少しはリラックスできた？」

「…… まあな」

「何だか歯切れが悪い言い方ね……」

そう言つて帝君を見た時、私はある事に気づいた。

「ねえ帝君。少しだけ動かないでね」

「あ、ああ……」

私は帝君の返事を聞いて帝君の耳を優しく引つ張つて耳の中を見た。見てみると、帝君の

耳の中は結構汚れていた。

「…… よし。帝君、私が耳かきしてあげるわね」

「何が“よし”なのか知らないが…… じゃあ、頼む」

くくく

「帝君、金属と木の耳かきどっちが良い？」

私は荷物を入れているケースから二本の耳かき棒を取り出して帝君に見せながらそう聞いた。

「じゃあ…… 金属の方で」

「わかったわ。…… じゃあ、やっていくからじつとしててね」

私はそう言つて帝君の耳を少し引つ張り耳の外側から汚れを取り始めた。

さりさり…… さりさり……

「…… 中じゃないのか？」

外を搔かれて不思議に思つたのか、帝君はそう聞いてきた。

「ええ。 外の窪みには意外と溜まつてしまうものなのよ。ほら」

私はそう言いながら匙に乗つた汚れを見せた。

「…… ホントだな」

「でも、窪みにしか無いから結構綺麗な方だと思つたわ」

私はそう言つて耳の裏を見た。だが、帝君の耳の裏は綺麗で汚れはついてなかった。

「耳裏は綺麗ね」

「まあ風呂入る時に洗うから……」

「そ…… じゃあ、次は耳の中を掃除するから。じつとしててね」

「…… ああ」

帝君の返事を聞き、私は耳の中の手前に耳かき棒を入れた。

さりさり……パリパリ……

かりかり……パリパリ……

耳の中の手前側には、意外と薄いものや細かいものがついていていた。

「どう？ 痛くない？」

「全然痛くない……何なら気持ちいいぐらいだ……」

「そっか。それなら良かった……」

私はそう言いながら汚れを取り続け、取れた汚れをティッシュの上に置き一度耳の中を見た。

「手前はこんなものね……じゃあ次は奥をやっていくんだけど、動かないでね。動かれないと」

手元が狂つちやうかもしれないから……」

「……わかった」

帝君はそう答えたが、どこか声は眠そうな声をしていた。

かりかり……かりかり……ゴリッ！

「っ!？」

耳の中を掻いていくと、一際大きな耳垢に当たった。当たった瞬間、帝君の肩はビ

クツと動いた。

「だ、大丈夫!? 痛かった?」

「いや、痛くはない…… 驚いたただけだ」

「そ、そう?」

「ああ…… その部分かゆいから、取ってくれないか……?」

「…… わかったわ。じゃあ、慎重に行くわね」

そう言つて、私は大きな耳垢に耳かき棒を当てた。

ガリガリ…… ガリガリ……

「(…… 硬いわね。何かふやかすものがあれば……)」

そう考えていると、あるものが思い浮かんだ。

「ねえ帝君、耳に少しだけ水を入れてもいい? 耳垢がかなり硬くてふやかさそうと思う

んだけど」

「…… 任せる」

「わかったわ」

帝君の返事を聞き、私は手のひらに小さな水の球体を作り出した。そして、その水の球体を

帝君の耳の中に入れた。そしてしばらく待ち、再び耳かき棒を耳垢に当てた。

グリユツ！ グリユツ！

硬かった耳垢はかなり柔らかくなっており、耳かき棒は簡単に耳垢と耳壁の間に入
た。

「(これなら……)」

私は耳かき棒に力を込めて耳垢を耳壁から引きはがした。

ベリリッ！

私は耳かき棒から落とさないように慎重に耳から耳垢を引き上げてティツシユの上
に置いた。

取れた耳垢には耳毛や砂粒などが混じっており、かなりグロテスクな見た目であつ
た。

「どう帝君？ すつきりした？」

私は帝君にそう聞いたのだが、帝君から返事はなかった。

「帝君？」

私が帝君の顔を覗き込むと、帝君は目をつぶって眠りについていた。

「……寝てたんだ」

「(もう片方は後にした方が良いかしら……)」

そう思いながら、私は帝君の頭を回転させて仰向けにした。

「……ぐっすり眠っちゃって」

私はそう呟きながら、帝君の頬に触れた。

「(今なら、バレないわよね……)」

そんなことを考え、私は自分の唇を帝君の唇に近づけた。そして、私は帝君の唇にキスをした。

キスをして少しすると、私の顔はどんどん熱くなってきた。

「はあ、顔熱い……」

私は自分の顔を押さえながら帝君を見ていた。そして、何を思ったのか私は帝君の首元に

キスマークを付けてしまった。

「……誰にも渡さない。帝君は私のものなんだから。だから、私から離れないでね……？」

そう言った私の瞳には光が消えていた。

~~~~~

「ん……」

一時間程すると、帝君は目を覚ました。

「おはよう帝君」

「……悪い、寝てたか」

「良いのよ。よく眠れた？」

「ああ…… ありがとな雫」

そう言いながら、帝君は膝枕から身体を起こした。

「どういたしまして。機嫌もよくなってくれてよかったわ」

「あー…… まあそうだな」

「また機嫌が悪くなったらいつでも膝枕をしてあげるわね。あ、機嫌が悪い時じゃなくても  
いつでもしてあげるわよ？」

「…… そうか。じゃあ、また今度頼んでも良いか？」

「ええ」

「じゃあ、また頼む」

帝君はそう言って立ち上がった。

「…… さて、雫は少し休んでくれていいぞ。見張りはしばらく俺がしておく」

帝君はそう言って私に来ていたローブを渡してくれた。

「寒かったら言えよ」

「ありがとう」

私は帝君のローブを羽織り、近くに置いていたバッグにもたれた。

「私も、少し休もう……」

そう思い、私は目をつぶった。

## フューレンでのショッピング

「どうしたミカド？ 首元赤くなってるぞ」

次の日、エリセンに向かって歩いていて時、後ろを歩いていたグロツケンにそう言われた。

「首？」

俺は首を見たのだが、どこにも赤くなっている所はなかった。

「ああ、ちよつと後ろの所だからな。虫にでも刺されたか？」

「さあ……？ まあかゆいとかないから大丈夫だろ」

そう言いながら、俺は再び歩き始め地図を確認した。

「今ここか…… どうする？ 近くにフューレンっていうデカイ街があるが寄っていくか？」

俺は三人にそう聞いた。

「フューレン…… そうね。少し寄って行きましょ」

「俺も別に構わねえぜ」

「グオオオ」

「そうか。 んじゃ、少し寄り道していくか」

そう言つて、俺達はフューレンの街に向かった。

「フューレン」

「さて……着いたのは良いがどうする？ 俺は少し食い物買いに行こうと思うが……」

「俺とデスローグは酒だな」

「私も、少し買いに行きたいものがある……」

「見事にバラバラだな……じゃあ、後でどつかに買い物が終わったら集合するか。場所は、

あそこのデカイ建物にするか」

俺はここからでも見えるデカイ建物を指差してそう言つた。

「決まりね」

「んじゃ、また後でな」

「ああ」

そう言つて、俺達はそれぞれ別の道に向かつて歩き出した。

~~~~~

雫 side

「ハハハね……」

私はブルックで貰った商品券が使えるランジェリーショップに来ていた。店の場所は商品券の

裏に書かれており、着いた場所は人通りが少ない路地裏だった。だが、店の外観や雰囲気は

路地裏とは思えないポップな感じだった。

「何だか、不思議な感じ……」

そう思いながら、私は店の扉を開き店の中に入った。店の中には様々なランジェリーや

ベビードール、ガーターベルト、ネグリジエが置かれていた。

「…… 凄い」

「あら、随分と若いお客さんね」

すると、突然商品の裏から女の人が出てきた。女の方はスリットの深い胸元のざっくり開いた

黒いドレスを着ており、女の私でも思わず見とれてしまうほどの妖艶な女性だった。

「ようこそ私の店へ。本日はどんな物をお探して?」

「あ、あの、これを使いたくて……」

私は持っていた商品券を見せた。

「あら…… 随分懐かしい商品券ね」

「これってまだ使えますか？」

「ええ、もちろんよ。それで、どういったものが欲しいのかしら？」

「そ、その…… しょ、勝負下着が欲しくて……」／＼／

「あらあら…… ! それならしつかり選ばないといけないわね」

そう言うと、店長さんは私の腕を掴んで試着室の方に連れて行った。

「さ、じゃあ脱いでもらおうかしら」

「えっ？」

「スリーサイズを測ってサイズを絞り込みたいからね。脱ぐのが恥ずかしいなら私が脱がせて……」

「じ、自分で脱ぎます！」

私はそう言って試着室に入り、服を脱いだ。

「…… ぱっと見でもわかるけど、随分スタイルが良いわね」

「あ、ありがとうございます……」

試着室のカーテンを開けると店長さんにそう言われた。そして、店長さんは私のスリーサイズを

測ってこう聞いてきた。

「ふむふむ。あなたのサイズならかなり種類はあるわね。色はどういったものが良いかしら？」

「色……」

「(帝君の好きな色…… 青と黒だったわね)」

「あの、青色と黒色ってありますか？」

「青と黒ね。少し待っていて」

そう言つて、店長さんは商品のある方に向かい、数種類のランジエリーやネグリジエを

持ってきた。

「まずはこれとかどうかしら？」

「あ、ありがとうございます」

私は渡されたランジエリーを受け取り、試着室で着替えてみた。そして鏡で今の自分の姿を

見たのだが、今ここに立っている自分は自分でないような気がした。

「(け、結構ステスケだから見えそう……)」／／／

私は今の自分の姿を見直して、ランジエリーの先が見えそうになっている事に
恥ずかしくなった。

「着替えれた？」

「は、はい!？」

外から聞こえた店長さんの声に驚き、私は変な声が出た。

「そう。ちよつと見せてもらつて良い？」

「は、はい……」

私は恥ずかしかつたが、一度試着室から出た。

「うんうん。似合つてるわね」

「で、でもこれ、スケスケで恥ずかしいんですが……」

「男はこれぐらいの方が反応が良いわよ。それに勝負下着なんですよ。だったら最高の物で」

最高の思い出にしないといけないわ」

店長さんは商品券をくれた人と同じことを言った。

「そうなるよこれじゃダメね……」

そう言うよと、店長さんは私の肩を掴んだ。

「悪いけれど、少し着せ替え人形にさせてもらうわね」

「えっ……」

~~~~~

「…… うん。これが一番似合うわ。あなたも彼氏もこれを見たらイチコロよ」

「…… 可愛い。それにすごく綺麗……」

数十分ほど様々な下着の着せ替え人形にされた私はある一つのランジェリーを着ていた。

「どう？ 気に入った？」

「はい…… でも、少し不安で…… これで彼は本当に喜んでくれるか……」

「…… 心配ないわ。今のあなたはとても魅力的で美しいわ。私が保証する」

「……」

「それに、女は度胸よ。最終的にごり押しして押し倒して下着見せれば獣になるわよ」

「け、獣って……」

「想像してみなさい。ベッドの上で押し倒されて彼氏に獣のように襲われる姿を」

そう言われ、私は帝君にベッドに押し倒された未来を想像してしまった。

「くくくっつ!!」／／／

「顔真っ赤にしちやつて。初心で可愛いわね」

そう言いながら、店長さんは笑っていた。

「さてと…… じゃあ、これにする？」

「は、はい…… これをお願いします……」／／／

私は顔の火照りが収まらなかったが、そう言って試着室の中に逃げて着ていたランジェリーを

脱いで店に来る時に着ていた下着と服に着替えた。そして、試着室から出てさつきま  
で着ていた

ランジェリーを店長さんに渡した。すると、店長さんはランジェリーを丁寧に袋に詰  
めてくれて

紙袋に入れてくれた。そして、何故か着ていたランジェリー以外にもいくつかのラン  
ジェリーや

ベビードール、ネグリジエを入れていた。

「あ、あの、さつき着ていたランジェリーだけじゃ……」

「私からのサービスよ。マンネリしないように貰っていつて頂戴」

「あ、ありがとうございます……」

「彼氏と上手くいくことを祈っているわ。何かあったらまた来なさい」

「は、はい……」／／／

「ふふふ。またのお越し、お待ちしております」

そう言われ、私は店から出た。

「……」

「（……これ、帝君に見られないようにしなきゃ）」  
そう考えながら、私は待ち合わせ場所に向かって歩き出した。

## ウルでの再会

「メダルも回収できてラッキーだな」

『ああ。そこそこの枚数が揃ってきたな』

そう話しながら、俺は街で回収したメダルを投げながらそう言った。回収できたメダルは

五枚で、レイキュバス、ガンQ、ベムラー、アーストロン、アントラーというらしい。

『だが、駒としての数はまだまだだ。駒は多ければ多いほど戦術が増える』

「まあその辺はお前に任せる。怪獣の知識はお前と比べれば天と地ほどの差があるからな」

「ミカド〜！」

そう話していると、デスローグとグロツケンがこつちに歩いてくるのが見えた。

「いや〜この街凄いやぜミカド！ 面白れえ酒がめちやくちやあつたぜ〜！」

そう言って、グロツケンは袋に入った酒を見せてきた。

「大量に買ってきたな…… 取り敢えず中に入れとけ」

俺はベリアラアイザーを手に取ってトリガーを引き、ゲートの中に買ってきた酒を袋

いし

全部中に入れた。

「そーいや雫は？」

「まだ来てないが……あ」

俺はそう言つて周りを見渡すと、紙袋を持つてこっちに走つてくる雫が見えた。

「私が一番最後だった？」

「それでもねえよ。デスローグとグロツケンもついさつき着いたばかりだからな。それより

その紙袋、ゲートの中に入れてくか？」

「お願い。あ、でも中は見ないで。グロツケンもデスローグも」

「……？ ああ」

俺は不思議の思いながらもゲートを開いた。雫はゲートの中に入り、紙袋を置いて出てきた。

「さて、じゃあ向かうか」

そう言つて、俺達は街を出て再びエリセンに向かって歩き出した。

その数分後、俺達が待ち合わせしていた建物からどつかの貴族が吹き飛ばされたと

か……

（三日後）

雫 side

「おいグロツケン。この町か」

「町の名前からしてそうっすよ！」

フューレンを出てから三日後、私達は目指していた町であるウルに着いた。帝君は昨日の夜に一人で見張りをしていたため現在眠りについており、ベリアルが帝君の身体を所有権を

持っていた。

「そうか。じゃあさっさと飲みに行くぞ」

「まずは宿を探しなさいよ…… とうか、その身体帝君のものなのよ。未成年の身体でお酒飲むのはやめなさいよ」

「チツ…… 固いこと言うな。一杯なら良いだろ」

「…… はあ。一杯だけよ」

これ以上文句を言われるのは面倒だったので私はベリアルにそう言った。

「よし！　じゃあ飯屋に行こうぜ！　俺おすすめの店聞いてるからよ！」

グロツケンはその言うと、私達の前を歩き出した。

~~~~~

「ここだここだ！　教えてもらった店！」

「おいグロツケン。ここ宿だろ」

着いたのは水妖精の宿という宿だった。

「一階が飯屋になってるんすよ陛下」

「ほお……」

「グオオオ」

「シズクもここで良いか？」

「ええ」

「よしっ！　じゃあ入るか！」

そう言うと、グロツケンは店の扉を開けた。

「いらっしやいませ。何名様で？」

「四人だ」

「かしこまりました。ではこちらへ」

そう言ってテーブル席に案内された。そしてテーブル席に座りメニュー表を見てい

たのだが、

ベリアルはどこかイライラしていた。

「…… どうしたのよ、さつきからイライラして」

「向こうのテーブルがうるさいんだよ」

そう言いながら、ベリアルはある方向を指差していた。

「短気過ぎるでしょ……」

「ちよつとうるさいぐらいなら俺だって何も言わねえわ。だがあまりにもうるさすぎる
だろ

あそこ」

「まあ確かにそうかもしれないけど……」

「おい、お前！ 愛子が質問しているのだぞ！ 真面目に答えろ！」

「おいグロツケン…… 黙らせてこい」

ベリアルはついにキレたのかグロツケンにそう言った。

「わかりましたよ陛下」

グロツケンはそう言うのと、大声が聞こえたテーブルの方に歩いて行った。

「(愛子…… どこかで聞いたことがある名前のような……)」

そう考えていると、店の中の空気が少し寒くなった。

「黙らしてききましたぜ陛下」

「よくやった」

「何したの？」

「凍らして氷像にただけだ。それよりも注文するぞ。すんませーん」

グロツケンには気にするようなそぶりを見せずにそう言うと言とうと店員の人を呼んだ。だが、そこに

来たのは店員ではなく小さな女の子だった。

「ちよ、ちよつとあなた！ デビットさんを元に戻してください！」

その女の子の事を私は知っていた。

「……愛子先生？」

「えっ……？」

私がそう呟くと、女の子は私の方を見た。

「もしかして、八重樫さんですか……？」

「何だ、お前の知り合いか？」

愛子先生の言葉を聞き、ベリアルはそう聞いてきた。

「知り合いっていうか、私が元居た世界の担任よ」

「……こんなちつこいのがか」

「ち、ちっこいつて失礼ですね！ これでも私はれっきとした……！」
すると、ベリアルを見て先生は何かに気づいたようだった。

「月無君……？ あなた、月無君ですよね！」

「コイツの事も知ってるみたいだな」

「帝君の担任でもあるからね」

「ほお…… まあ俺にとつてはいつでもいいが」

「どうでもよくありません！ 二人とも今まで何をやってたんですか！ それとその

二人は

「一体誰なんですか！」

「ぴーちくぱーちくうるせえガキだな…… 零、どうにかしろ」

「ええ……」

ベリアルは心底鬱陶しそうに私にそう言ってきた。

「せ、先生に対してガキとはなんですか月無君！」

「このアマ……」

ベリアルはかなりキレイたのか身体に闇のオーラを纏っていた。

「ベリアル、流石にこんな所で魔力放つたらマズ……」

「おい先生。今八重樫と月無って……」

すると、先生が来た方から眼帯を付けた白髪の男がやって来た。私は見覚えがなかったが、

男は私達の事を知っているようだった。

「南雲君！」

「えっ……？」

先生は白髪の男を見るとそう言った。

「っ！ やっぱお前らか…… 久しぶりだな」

「…… あの時のガキか」

「南雲君……？ いやでも髪の色にその眼帯…… それに身長も……」

「ああ…… まああの後色々あつてな」

南雲君は頭を掻きながらそう言った。

「あの時は悪かったな八重樫…… 俺のせいでお前にまで迷惑かけて」

「良いわよ、もう終わったことだから」

「…… 恩に着る。そっちは……」

「ベリアルの下」

「そうか…… おい先生、話しなら後にしとけ。あれ怒らすと普通に死ぬぞ」

「な、南雲君！」

そう言うと、南雲君は先生を引つ張つて元の席に歸つていった。

「……どうする？」

「お前がどうにかしろ。俺は知らん」

そう言つて、ベリアルは私から視線をそらした。

「(よりもよつて帝君が寝てる時に……運が悪いわね……)」はあ
そう思った私の口からは大きなため息が出た。

雫の意思

「……取り敢えず、お久しぶりです先生。それに南雲君も」

先に食事を終えた私は愛子先生の前に座っていた。

「八重樫さん、今までどこで何をしていたんですか？」

「特には。しいて言うなら奈落に落ちて死に物狂いで鍛えて奈落を出て帝君と

会ったって感じですね」

「その着物と刀と顔の傷は？」

「私を奈落で鍛えてくれた人に頂いたものです。顔の傷もその人の修行で付きました」

「どうしてすぐに戻ってこなかったんですか？」

「戻るよりも優先すべきことがあった、それじゃあダメですか？」

「優先すべきことって……」

「帝君と合流することです。正直、味方に攻撃を撃つような人間がいる所に戻るよりも

帝君を探して一緒に行動する方が安全ですから」

「味方に攻撃って……それどういう事ですか！」

愛子先生は驚いたようにそう言った。

「私と南雲君が奈落に落ちたのは味方の攻撃が当たったせいです。落ちる時に見たので間違いないですが……」

「そ、それはいつたい誰が？」

「それは内緒です。言っても面倒なことになるだけなので」

「おい、話終わったか」

私が愛子先生にそう言うのとベリアルが私達の方にやってきた。

「まあある程度は」

「そうか。ならとつとと行くぞ。宿も探さねえと今日は野宿だ」

「はいはい…… そういう事なので先生、私はもう行きますね」

そう言つて、私は席から立ち上がった。

「ま、待つてくださいい！ 八重樫さんは戻つてこないのですか？」

「…… そうですね。そちらに戻るつもりはありません。私は帝君について行くつて

決めましたので」

「どうして……」

「…… 好きな人と一緒にいたい、それが理由ですかね。行きますよ」

「ああ八重樫、ちよつと待て」

愛子先生にそう言つてこの場から離れようとした時、南雲君に呼び止められた。

「何？」

「お前ら、迷宮いくつ攻略した？」

「私は一つだけど……ベリアルは？」

「二つ。ライセンと氷雪だ」

「……そうか。止めて悪かったな」

「いえ……それじゃあまたね」

そう言つて、私達は店から出た。

　　その日の夜

「寝すぎた……」

「……随分お寝坊さんね」

宿の部屋で刀の手入れをしているとベッドで寝ていた帝君が起き上がった。声からして、

　　どうやら帝君に人格が戻つたようだった。

「何か身体だるいんだが……」

「ベリアルがお酒飲んでたからじゃないかしら？」

「そういう事か……」

「寝てる間に色々あったわ。南雲君と愛子先生に会つたわよ」

「……！ アイツ生きてたのか」

私の言葉を聞いて帝君は驚いているようだった。

「ええ。元氣そうだったわよ。女の子二人連れてたわ」

「そうか……。明日、少し顔見せに行くか」

「良いんじゃない」

そう言つて、私は刀を鞘に戻した。

「じゃあ、私は少し眠らせてもらうわね」

「ああ。わかった」

そう言つて、私は帝君がさつきまで寝ていたベッドに寝転がった。

「おやすみなさい。朝出る時は起こしてね」

「ああ、わかった」

私は帝君にそう言つて眠りに就いた。

黒龍殲滅... ?

次の日

「そういや、南雲はどこにいるんだ？」

「さあ... ? 魔力感知とかで探せないの？」

「どうだろな... まあやってみるか」

そうやって俺は地面に手をつき魔力感知を発動した。すると、ここからかなり離れた場所から巨大な魔力を二つ感じた。

「何か分かった？」

「あつちの山の方から魔力の気配を感じた。数は二つだな」

「二つ... 一つは南雲君のものでしょね。もう一つは一緒にいた女の子じゃないかしら」

「アイツ女連れてんのか？」

「ええ。うさ耳付けた子と金髪の女の子」

「どこぞのハーレム主人公か...」

そう呟きながら、俺はホルダーからリトラのメダルを手にとった。

「一先ず山の方に向かうか。雫は俺の背中に乗ってくれ」
 「わかったわ」

俺はそう言つてリトラに姿を変え、雫を背中に乗せて山の方に向かった。

~~~~~

『(マリヨクノホウコウテキニコノヘンダガ……)』

『シズク、イルカ?』

「…… 見えないわね」

『ソウカ……』

そう話していると、突然先程感じた二つとは別の巨大な魔力を感じた。それと同時に、

山の一角で砂塵が舞い上がった。

「帝君! あの方向」

『ビンゴカモナ。ツカマツテロヨ』

~~~~~

雫 side

帝君が急速で向かった所には巨大な黒龍がいた。そして、その黒龍と戦う南雲君達と少し離れた場所で様子を見ている愛子先生がいるのが見えた。

「帝君、あの銃を撃ってるのが南雲君よ」

『アレガナグモ!? ベツジンジャネエカ...』

「人は変わるものよ... まああれは特殊例だと思っけど。それよりもどうする？」

『スコシテヲカスカ...』

「了解」

そう言つて、私は帝君の背中から黒龍に向かつて飛び降りた。そして刀を抜き、頭に向かつて一撃を入れようとしたが、黒龍は私の気配に気づいたのか後退して攻撃を避けた。

「(躲された... 殺気の出し過ぎね...)」

そう考えながら私は刀を一度鞘に戻した。

「八重樫... お前何やってんだ」

すると、背後から南雲君がその声をかけてきた。

「用があつたのよ、南雲君に。そしたら何か戦ってるみたいだから、援護しようと思つてね」

「用だ？」

「ええ、私じゃないけど。それよりも...」

私は黒龍が飛ばしてきた岩を刀で斬り裂いた。

「話はあるを止めてからにしましょうか」

そう言って、私は居合の構えを取った。

「劍技 彼岸花―閃―」

私は刀を抜き、縦一線の斬撃を放った。斬撃は黒龍に直撃したが貫通はせず、身体の鱗に

ひびを入れる程度で止まってしまった。

「様子見で放ったけど、これならどうにかかなりそうね」

そう考えながら二発目を放とうとした時、突如上空から鳥の形をした炎の塊が黒龍に向かつて直撃した。

「新手か!」

南雲君は空中にいる帝君に向かつて拳銃を向けた。それを私は手で制止した。

「大丈夫よ南雲君。あれ味方だから」

「あれが?」

「ええ。というか、あれ帝君よ」

「はっ……?」

私の言葉に南雲君はぼかんとした表情をした。

「後で見ればわかるわ。それよりも……終わらせましょうか」

そう眩き、私は再び居合の構えを取った。そして私は刀に魔力を込めた。

「劍技 彼岸花―崩―」

そう眩き、私は黒龍の上空に跳び頭に向かって刀を振り下ろした。刀は黒龍の頭に直撃し、

黒龍に振動波を与え黒龍を地面に叩き伏せた。黒龍がいる地面は巨大なクレーター
が

できており、黒龍の動きは停止した。

「ふう……」

「おい八重樫。人の獲物を勝手に取ってんじゃねえよ」

彼方を鞘に戻し一息つくくと、背後から南雲君がそう言ってきた。

「あら、ごめんなさい」

「……はあ」

「ハジメ、この女って……」

「俺に巻き込まれて奈落に落ちた奴だよ……いわゆる苦勞人ってやつだ」

「誰が苦勞人よ」

そんなことを話していると空から帝君が降りてきた。そして身体が光ると人間の姿に戻った。

「よつ。久しぶりだな南雲」

「月無……」

「また随分と様変わりして…… 厨二感増したな！」

「誰が厨二だ！」

そう言うのと、二人は言い合いを始めてしまった。

「はあ…… いい加減にしなさい二人とも！」

私は二人の言い合いが長引きそうだったので一発ずつ拳骨を落とした。

「いつ!？」

「場所が場所なんだから少しは周りを警戒してからやりなさい！」

「は、はい……」

二人は頭を撫でながらそう言った。

「ハジメを止めた…… あなた、一体何者？」

すると、南雲君と一緒にいた金髪の女の子がそう聞いてきた。

「私は八重樫 雫。剣豪よ。一応南雲君のクラスメイトね。で、そこで頭を擦ってるのが
私の恋人の帝君」

「…… さつきの鳥？」

「そ。まああれだけじゃないんだけど...」

「... ?」

そう話していた時、黒龍のいる方から風が吹いた。黒龍の方を見ると、倒れていた黒龍が

地面から立ち上がっていた。

「(っ！ まだ立てる力を... !)」

そう思い、私は刀の鞘に手を置いた。帝君に南雲君、それに金髪の女の子も黒龍に気づき

それぞれ武器を構えたのだが...

『ま、待ってたもお！ ぶ、武器を降ろして欲しいのじゃ！』

「は?」

「えっ?」

突然黒龍が人の言葉を話し始めた。